

一、社會奉仕

甲 謝恩的奉仕

乙 同情的奉仕

二、身體ノ發達ト體力ノ充實

甲 健康ノ増進

乙 衛生思想ノ普及徹底

三、國際的活動

甲 國際的互助共濟

乙 外國兒童トノ交際

第五條 本團ハ團員ヨリ團費ヲ徵收セズ

第六條 本團ノ經費ハ左ノ資金ヨリ支辨ス

一、支部交付金

二、寄附金

三、其ノ他ノ雜收入

第七條 本團ニハ左ノ職員ヲ置ク

團長 一名 御影師範學校長

副團長 一名 同附屬小學校主事

幹事 若干名 尋常五年以上ノ擔任教師

協議員 若干名 尋常四年以下ノ擔任教師及尋常五年以上各學級ヨリ兒童一名宛選任

第八條 職員ハ名譽職トス

第九條 團ニ兒童役員ヲ置キ班長ト稱シ團務ニ從事セシム 兒童役員ハ兒童ヲシテ選舉セシム

第十條 職員團員ハ本社所定ノ徽章ヲ交付セラレ

【附】 少年赤十字團發團式

一、日時 大正十五年五月二十八日午後一時

一、場所 御影師範學校講堂

一、式順 1、開會ノ辭

2、團歌

3、成立ノ趣旨ニ就テ

4、祝辭演說

5、役員ノ任命

6、徽章交付(班長團員)

7、團歌

副團長

一同

團長

來賓

團長

團長

兒童

8、宣 誓 兒童
9、閉會ノ辭 副團長

(四) 學校衛生

學校衛生については學校看護婦が主として之に當り、學校醫、齒科醫、耳鼻科醫の指導を得て諸種の研究施設を行つてゐる。その項目を列挙すると

教授衛生 採光、保温、濕氣に對する配慮並に姿勢。運動遊戲の程度。教師の板書文字。課業による疲勞等に注意す。

保護的施設 飲料水の消毒(毎週一回乃至二回)及び掃除の衛生的遂行に對する配慮として學校看護婦は教室を巡視して「教室検査表」に適否を記入すると共に受持教師に注意す。その他設備の利用に對する衛生的配慮もなす。

個人衛生 毎月一回の衛生検査(頭髮不潔、口腔不潔、耳及び頸の不潔、手足不潔、延爪、紙、手拭忘却、皮膚疾患、肌着不潔、手拭不潔)を行ひ之に該當する兒は氏名を「衛生検査表」に記入し翌日再検査をうけ完全になるまで検査をなす。その他學校齒科に於ては齒疾患検査及び治療は齒科醫師によつてされ、學校耳鼻科は聽力障礙兒の原因調査を耳鼻科醫の再診査を受けてゐる。

疾病負傷看護 輕きは看護婦その手當をなし、重きは直ちに學校醫又は専門醫に託するか家庭に送りかへす。

先年デフテリア、腎臟、並びに耳下腺炎等の早期發見をなし、最近に於ては水痘患者の發見をなした。

衛生教授、衛生實習 衛生學理の系統的指導及び偶發事件による指導、繙帶術一般並に齒磨練、看護法の實習指導には看護婦及び訓導が當る。

虛弱兒童保護矯正 身體検査の結果虛弱と見なされたる兒童はその原因を調べ、消極的方面として體操遊戲時に特別の取扱ひを爲すは勿論人工石英燈の照射を受けしめ、積極的方面としては、學校醫及び體育部と連絡をとり別に之が矯正發達に努力する。

寄生蟲驅除 年一回全校兒童の糞便検査をなし蛔蟲、十二指腸蟲鞭蟲等の蟲卵を發見したる兒童には之を見ざるまで継続的に驅除薬を服用させる。

學校衛生に關する中心は、衛生室で普通の藥品、普通の治療器械、齒科治療器具機械一切、體力測定機械、を備附けてゐる。特に齒科治療機一式は野村氏の寄贈になるもので完備した設備であるつもりである。尙昭和六年度より人工高山石英燈(太陽燈)の設備をなし、本年度まで繼續實施し漸次効果をあげてゐる。
健康相談日 専門醫の來校を乞ひ、虛弱兒童・保護者・教師共働して健康増進の方法を講ず。

五、行 事

(一) 朝會及び合同體操

毎週月水金の三日始業前約五分間實施し、月曜日には、皇室、伊勢神宮及び祖神に對し奉り遙拜式を行ひ、以

て感謝報恩の念と自己精進の純情を培ふ。

朝會は全校児童職員の精神的統一を圖ると共に、必要に應じて道徳實行の指導を爲すを目的とし、訓話は週番會議に於て協議したる事項を資料として、週番訓導又は週番児童がすることになつてゐる。

合同體操は規律秩序協同の精神を養成し、全校體操の統一をはかるを目的とし、身體を健康ならしめ各機能を保護増進せしめんが爲に、児童の發育、季節、一年の發育狀態等を顧慮して配當したる教程に依り、體育部訓導指揮のもとに行ふ。

(二) お伽會及び小運動會

本校創立記念日に當る十九日には毎月、お伽會、小運動會を交番に行ふ。お伽會は尋四以上と尋三以下との二團に分ち、訓導及び児童に於て或は他より聘して、お伽噺、唱歌などを行ひ樂しき半日を送ることゝしてゐる。

小運動會は男女二團に分ち、主任訓導の指揮の下に男子は戰鬪遊戲、女子は小球、バスケットボールの外、綱引の如き大團體運動をなしたり、或は低、中、高等年の男女に分ちて體操、遊戲等を行ふ。訓導、練習生の運動を加へることもある。

(三) 年中行事

國民的志操感情を養ふ爲め、上巳、端午、七夕、重陽の節句等には児童の考案趣向に基づき趣味的な催しを行

ひ、其の他正月會、裁縫祭、理科祭をなし、児童をして行動によつて國民的節日を記念せしめる。

(四) 遠足

心身を鍛鍊し知見を廣むるの目的を以て毎月一回次の配當表によつて行ふ。

遠 足 地

月	尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一	高二
4	深田池より 木原山莊 (花見)	神戸諏訪山 (動物園)	苦樂園 (探勝)	武庫川尻 (潮干狩)	奈良良 (史蹟探査)	姫路 (白鷺營)	大津 (探勝)	宇治 (史蹟探査)
5	弓弦羽神社 上人山	湊川神社 大倉山	湊川神社 諏訪山	湊川神社 布引ノ瀧	湊川神社 再度山	湊川神社 丸山公園	湊川神社 鳥原水源池	湊川神社 川崎造船所
6	住吉川 (探勝)	木原山莊附近 (探勝)	武庫川 (探勝)	六甲山 (探勝)	製氷所 六甲山 (見學)	六甲山 六甲山 (探勝)	摩耶山 六甲山 (探勝)	東六甲山 西宮 (探勝)
9	六甲八幡神社 (参拜)	楠谷 (秋草摘)	六甲山 (山登り)	神戸港 (汽船見學)	打出 燒尼ヶ崎 (見學)	六甲山 有馬 (探勝)	六甲山 神戸アルプス (探勝)	
10	御影山附近 (茸狩)	一本松附近 (茸狩)	猿丸の墓 高座の瀧 (史蹟探勝)	鉢伏山 (探勝)	西宮、寒天山 (探勝)	伊勢参宮	六甲山 (山登り)	六甲山 (山登り)

3	2	1	12	11
西宮頼光の墓 (史蹟探査)	孝子蟻道の墓 (参拜)	赤松城趾 (史蹟探勝)	六甲山方面 (義士會)	一王山十善寺 (紅葉狩)
寒天山 (強行軍)	六甲山 (雪合戦)	芦屋天神 (参拜)	六甲山方面 (義士會)	明人丸神社 (公園)
廣田神社 (強行軍)	六甲山 (雪合戦)	神戸港御影瓶詰工場 (見學)	六甲山方面 (義士會)	須磨 (史蹟探査)
摩耶往復 (強行軍)	六甲山 (氷すべり雪合戦)	白鶴美術館 (植物園)	六甲山方面 (義士會)	天王寺 (及動物園)
摩耶より青谷 (強行軍)	六甲山 (氷すべり雪合戦)	寶塚 (大阪城新開社、造幣局)	六甲山方面 (義士會)	京都 (史蹟探査)
六甲より摩耶 (強行軍)	六甲山 (氷すべり雪合戦)	阪石鹼木管會社 (見學)	六甲山方面 (義士會)	六甲山 (山登り)
摩耶往復 (足だめし)	六甲山 (氷すべり雪合戦)	神戸測候所 (見學)	六甲山方面 (義士會)	中山寺 (清荒詣)
摩耶往復 (足だめし)	六甲山 (氷すべり雪合戦)		六甲山方面 (義士會)	箕面 (探勝)

(五) 水 泳

意志の鍛錬と健康の保護増進をはからんとして水泳を行ふ。
 之が實施に當りては、本邦水泳教育界に於ける權威、藤井正太郎氏の指導を仰ぎ、文部省の水泳要目に準據して、職員全部その指導に當る。参加兒童は三年以上男女有志とし、三年は主として水に馴れる程度に止め、四年より技術の指導をなす。
 期間は七月十日より二十日間、毎日午前十時より十二時まで御影大江濱に於て行ふ。

(六) 寒 中 行 事

兒童心身の鍛錬を目的とし、一月中旬より約三週間始業前及び第一時を之に當て、徒歩、朗讀、書方等の練習をなし、修了後郊外徒歩、朗讀會、書方展覽會をなす。

(七) 課 外 作 業

全校兒童の共同作業として隔週一回放課後に校舎内外の美化、學校園の手入等をなす。

(八) 大 運 動 會

毎年秋季(十月中旬)に大運動會を催す。運動唱歌は永年親しまれて來たが備忘の爲に記録したい。
 昭和六年以前の運動唱歌

- 一、雲にそびゆる武庫の山 三千餘尺のそのふもと 空をひたせるちぬの海 波うちよするそのみきは
- 二、こゝぞわれらの運動場 晴れたる空の朝日かけ いざわが友ようちつれて 楽しく今日もあそばまし
- 三、春はわかばのもえ出づる 山にのぼらん元氣よく 野べにあそばんもるとともに れんげ茶種は花ざかり
- 四、夏の暑さをよそに見る 御影の濱のポートこぎ 海水浴に日はくれて かすかに見ゆるあはち島
- 五、谷間のみち色づきて 松茸がりに秋ふけぬ ランプのもとに集りて 話をきくもゆくわいな

- 六、六甲おろしふきすさぶ 寒さはげしき冬の日も ペースボールにかけくらべ テニスおにごと勇しや
- 七、みがかば光る玉つるぎ 暑さ寒さのわかちなく 遊びし後はおこたらず 學びの道を進むべし
- 八、いまだわれらは幼きも 智識をみがき身ををさめ 御國のためとつくすべき 時こそやがて来るなれ。

昭和六年以降の運動唱歌

- 一、雲にそびゆる武庫の山 波ははるかにちぬの海 歴史ゆかしき灘御影 こゝぞ我等の學び郷
- 二、いしすゑたちて幾十年 樟の薫のいや高く 旭の御旗ひらめきて 我等の意氣ぞ盛なる
- 三、春は若葉のもえ出づる 山に登らん元氣よく 野邊に遊ばんもろ共に れんげなたねの花ざかり
- 四、夏の暑さをよそに見る 林の中の學びごと 御影の濱の水泳ぎ 楽しく今日も暮すなり
- 五、谷間のみち色づきて 松茸狩に秋ふけぬ 燈火のもとにうちよりて 書物ひもとも愉快なり
- 六、六甲おろしの吹きすさぶ 寒さはげしき冬の日も ポール遊びやかけくらべ 雄々しくとも遊ぶなり
- 七、みがかば光る玉つるぎ 暑さ寒さのわかちなく 知徳をみがき身をきたへ 學びの道を進むべし
- 八、いまだ我等は幼きも 恵の光に生ひ立ちて いざや歩まん人の道 いざや盡さん國のため。

(九) 學 藝 會

第二、三學期に行ひ、特に第三學期には父兄を招待する學藝會を催す。

(一〇) 映 畫 會

各學期一回、國民的記念日を卜し、教育的な映畫を見せる。

(一一) 展 覽 會

毎年一月下旬本校児童製作品の展覽會を催し父兄を招待する。

(一二) 卒 業 生 招 待 會

毎年五月上旬の日曜日に尋六、高一の児童が新卒業生を母校に招待する。

(一三) 新 入 兒 童 招 待 會

四月下旬尋二児童が中心となり尋一児童の招待會を開催する。

六、教生指導に關する方面

◎ 綱 領

- 一、我が國建國の精神を中核とし、光輝ある歴史の精神を實現するの態度に於て、懿徳良能を發達せしめんことを修養の根幹として教育一般の實習にあたり、教育道に精進するの精神を確立すること。
- 一、教育活動の根源は人間敬愛の精神にあり、宜しく之が宣揚顯現に努め快活動勉よく教育行に浸潤せしめ以て

明朗よく教育を楽しむの素地を修練すること。

一、教育の方法は、正しき自己活動による體驗及び作業の原理に従ひ正しき理解に導き、児童の魂の覺醒を念とし、其の實踐力涵養の工夫あるべきこと。

◎實 習 態 度

一、教育者たるを自覺して、常に児童の信賴尊敬を得るに足るべき威重懇誠匪勉等の諸徳の修養に努むること。

一、常に容儀言行に留意して、學校文化の發展に貢献するの誠意を披瀝すること。

一、向上發展の道は一に自己を空しうして指導を受くるにあり、苟くも不遜陋劣の心志を懷くことなく、先輩の體驗と人格とに向上の契機を把握せんことに努むること。

一、先進の指導を格遵して一致共働實習に當り教育の精神を體得し、之れが實現のため積極的態度を確立せしむるは自他大成の達道である。

一、校則訓諭は校内秩序の整肅を期するに止らず、児童徳性の深化、學校文化の進展に缺くべからざるものなるを銘し、職員と共働よく之が實踐實現に努め以て學校教育の効果に貢献すること。

◎實 習 上 の 注 意

(一) 一 般 事 項

- 1、各自の所持品(書籍、帳簿、帽子、履物)の整頓に留意すること。
- 2、各自擔當の當番勤務に於てその責任を自覺し、之が勵行に努むること。
- 3、朝の挨拶、降校の際の挨拶に於て禮容あるべきこと。
- 4、清潔を保ちハンケチ、手拭を携帯し上履、下履を嚴重に區別すること。

(二) 勤 務 上 の 事 項

- 1、始業前二十分までに出勤し出勤簿に捺印すること。
但し本校の授業ある日も一度附屬に出勤するを本體とす。
- 2、缺勤届は出勤時限までに所定の様式に據り擔任指導の手を経て庶務係指導の許に提出すること。
但し當日の作業案を之に添へて提出するを本體とす。
- 3、遅刻早引一時退出の場合も前者に準ずること。
- 4、放課後は擔任指導の許可を得て降校すること。
- 5、降校の際は教室及び自己學級責任個所の整頓、戸締等につき特に留意すること。
- 6、他學級を參觀せんとする時は擔任指導の許可を得て之をなし、其の他肆意的行動をせぬこと。

(三) 訓 練 上 の 事 項

- 1、時日の如何を問はず凡て児童を寄宿舎に呼び寄せ、又は訓導の許可なくして児童を校外へ連れ出さぬこと。
- 2、児童に訓誡をあたへんとするときは特に注意し、特別なる訓誡は豫め訓導の了解を得ること。

- 3、児童の身上に關して家庭訪問をなさぬこと。(書狀の交換物品の贈答も之に同じ)
- 4、休憩時に於ては所屬學級の児童と共に運動場に出で訓練の機会を求め、児童看護の實習に努むること。

(四) 備品使用上の事項

- 1、教具及び學校備品の使用法を心得特に使用後の後始末整頓に努めること。
- 2、圖畫雜誌等は一切所定以外の場所に持出さぬこと。若し必要あらば掛訓導擔任の許可を得ること。
- 3、唱歌室のピアノ及びオルガンは授業の外決して使用せぬこと。
- 4、特別教室其他保管者の定まれる備品を持出さんとする時は必ず掛訓導の許可を得ること。

◎研究に關する事項

(一) 教 授

- 一、教材の研究、作業案の立案は周到なる用意を以て之を行ひ、教授の實際、管理、訓練の實際と共に擔任訓導の指導をうくること。
- 一、児童の學習が構案的作業活動となりて現はるゝやう工夫すること。
- 一、教材は前々日までに打合せ、作業案を調製して前日放課後までに學級擔任訓導又は教科擔任訓導に提出すること。
- 一、實地授業に對する批評は放課後必ず擔任訓導よりうけること

- 一、臨時に主事及び本校職業等の參觀をうけたる時は當日中に批評をうけること。
- 一、實習要録の記録を行ひ週一回擔任訓導の檢閲をうけること、尙實習期の終に訓導の手を経て主事に提出すること。

(二) 訓 練

- 一、児童の言語態度等の指導に努め、これに對して範を示し、児童の善良なる品性の確立に力めること。
- 一、児童の個性調査を行ひ擔任訓導の指導を仰ぎ、協力一致して之が助長矯正の方法を講じ遂行すること。
- 一、児童賞罰の方法及び訓諭を慎重にし、之が措置を誤らざるやう留意すること。
- 一、級訓、校訓、朝會に於ける訓話等を了解し、相共に實行に力めこれが徹底を期すること。
- 一、授業時及び休憩時に於ける児童の善導及び矯正に力め特に其の作業活動を正しく導くこと。
- 一、其他訓練上の諸事項はすべて児童の自律と構案的活動に訴へ實地に遂行せしむるやう導くこと。

(三) 衛 生

- 一、児童の姿勢の善導及び矯正に努めること。
- 一、窓硝子の開閉による換氣及び保温に留意すること。
- 一、窓カーテンの開閉による直射光線の除避をなすこと。
- 一、身體及び衣服の清潔頭髮爪及び齒に對し、常に注意せしむること。
- 一、食事前及び排便後の手洗について留意せしむること。

- 一、身體検査及び體力測定等に於て調査したる結果による兒童の處理に留意すること。
- 一、教室の掃除其他校舎内外の美化作業等についてもよく之を監督し適當なる指導をなすこと。
- 一、其他衛生に關する事項につき細心の注意をなすこと。

◎事務に關する事項

(一) 學 級 事 務

- 一、兒童の成績調査及び教育テストに關すること。
- 一、學籍簿、考査簿の整理に關すること。
- 一、表簿（兒童出席簿、學校食事簿等）及び統計の調査整理に關すること。
- 一、通信簿の記入に關すること。
- 一、教室の裝飾、備品の整頓保管に關すること。
- 一、學級園の計畫手入等に關すること。
- 一、學用品の整頓檢閲等に關すること。
- 一、兒童年齢、身長別、各月體重測定記録に關すること。
- 一、各月體力測定に關すること。
- 一、希望兒童太陽燈照射に關すること。

(二) 學 校 事 務

- 一、教具校具の製作並に修理保存に關すること。
- 一、職員より命ぜられたる事務の處理。
- 一、學級擔任訓導の分擔せる校務の實習。

(三) 週 番 勤 務

- 一、週番勤務は應接係と看護係との二つとし學級擔任訓導の當番日に所屬教生も之に當ること。
- 一、應接係は參觀人父兄面會人等に應接し適當に處理すること。
- 一、看護當番は休憩時間は必ず校舎の内外を巡視して兒童の監督看護に當ること。
- 一、看護當番の注意事項。
 - 1、兒童の風紀上のこと。
 - 2、兒童の遊戯を監督指導し、特に危險なる事に對して注意すること。
 - 3、晴天の日校舎内に残る兒童を取締ること。
 - 4、病人及び負傷人は直に學校看護婦の手當をうけさせること。
 - 5、偶發事項につき週番訓導に報告すること。
 - 6、兒童のなす諸種の作業を總括的に促進し、結果を檢査すること。
 - 7、一般的に兒童の教授及び作業の衛生に注意すること。

- 一、週番は毎週土曜日午後週番會議を開くを以て、所屬教生もこれに加はること。
- 一、週番訓導中揭示掛に當てられたるものゝ仕事を補助すること。

◎ 實習中行事綱要

- 一、指導教授 學科擔任訓導より指導教授を受け、教授後其の科の教授に關する講話をきく、時に指導講話のみ場合がある。
- 一、批評教授 分ちて大批評教授、小批評教授の二とし、實習開始後二週間前後より行ふ。
 - 1、大批評教授は實習中に四回、小批評教授は六教科につき之を行ふ。
 - 2、教授者は實習期の初期に於て豫定表を作成し之を發表する。
 - 3、教授者は所屬訓導の指導により前日放課後までに作業案を作製し所要部數を騰寫して參觀者に配布すること。
 - 4、當日の授業後次の順序によつて批評會を開く。
 - (イ) 教授者意見
 - (ロ) 參觀者の質問
 - (ハ) 教生批評
 - (ニ) 教授者のそれに對する意見
 - (ホ) 學級擔任訓導の意見
 - (ヘ) 訓導及本校職員の批評
 - (ト) 主事總括

- 5、教授者は批評要項を記録し教務掛に提出すること。
- 一、希望教授 實習期の終頃希望者に他學級の教授を許し、希望教授を開始する。希望者は教務係に申出で許可を受くること。
 - 作業案及び實際の批評は教授する學級の訓導より受ける。

一、研究會

- 1、毎週水曜日放課後研究會を開く。
- 2、研究事項の重なるもの
 - (イ) 教科主任訓導の指導講話
 - (ロ) 其他、主事訓導の教育一般に關する指導講話
 - (ハ) 研究問題の討究
 - (ニ) 學級經營に關する研究
 - (ホ) 教具製作
- 3、實習期間中各自研究題目を選び、これが研究に當り、實習期に於て各一通の研究論文を教務に提出すること。
- 4、數名を選びて研究論文の發表會を行ひ、質問討議をなし、指導者の指導を受く。
- 一、他校參觀 實習中(又は終了後)主として縣下郡市の小學校を四五泊の豫定で參觀し、又附近の小學校を數

同參觀する。他の小學校を參觀する時は左記の諸項に注意すること、尙參觀後一週間以内に報告書を調製し引率訓導の手を経て主事に差出すこと。

(A) 教 務

- 1、児童數、學級編制
- 2、職員數及び配置
- 3、加除科目の狀況
- 4、學習指導豫定案及び學習指導案の形式
- 5、學習指導の方法及び其の成績
- 6、児童の學用品
- 7、成績考査簿の諸形式
- 8、諸規定
- 9、家庭との聯絡
- 10、學校の訓育
- 11、児童出席獎勵法並に出缺席狀況
- 12、其の他の學級經營、學校經營に關する特設事項

(B) 設 備

- 1、學校の位置及び設計開取
- 2、運動場の位置及び體育施設
- 3、机、腰掛、塗板等の諸器具
- 4、便所及昇降口
- 5、衛生上の施設
- 6、學校園及び圖書室、理科室等の特別室
- 7、其の他有益な新施設

(c) 雜 件

- 1、社會教育に關すること
- 2、青年學校に關すること
- 3、青年團、處女會に關すること
- 4、卒業生との聯絡に關すること
- 5、児童の自學自習に關する特別機關のこと
- 6、職員修養に關すること
- 7、學校醫及び學校看護婦に關すること。

七、附屬小學校卒業生並同窓會

(一) 附屬小學校卒業兒童一覽

年	高男	高女	尋男	尋女
明治三十三年	四三	一三		
明治三十四年	二四	二二		
同 三十五年	三四	一七		
同 三十六年	五四	三〇		
同 三十七年	四〇	一七		
同 三十八年	三九	一六		
同 三十九年	四五	三二		
同 四十年	二五	四		
同 四十一年	二六	二七		
同 四十二年	三〇	一八	四八	四一

同 四十四年	二七	一〇	六二	五七
大正元年	一五	一八	七七	七〇
同 二年	一六	一七	七三	六九
同 三年	二六	一五	五九	四九
同 四年	二七	一七	五六	四二
同 五年	二四	一九	五七	四二
同 六年	二四	一五	五九	四九
同 七年	二二	一四	五三	四二
同 八年	二七	七	五三	四七
同 九年	二四	一三	四六	五一
同 十年	二二	一一	五三	四九
同 十一年	一六	一四	四六	四七
同 十二年	一八	八	五五	五三
同 十三年	一〇	〇	五八	四七
同 十四年	二二	一	五五	五一

昭和元年	一二	一	七〇	六九
同二年	九	二	四七	四二
同三年	一八	三	四六	四八
同四年	一四	六	四八	四二
同五年	一八	五	五一	五〇
同六年	九	五	四九	五一
同七年	一二	五	七一	六三
昭和八年	七	五	六七	六四
同九年	一八	五	五〇	四五
同十年	九	三	六六	五九
同十一年	一一	二	六一	五〇

(二) 男子同窓會規約

第一條 本會は御影師範學校附屬小學校男子同窓會と稱す。
 第二條 本會は同窓者相互の交情を温め且修身處世上相輔け益することを目的とす。
 第三條 本會は附屬小學校男子卒業生、並びに附屬小學校に在學せし者を會員とす、附屬小學校職員及び校長を

役員とす。

第四條 本會は附屬小學校主事を會長に推薦する。
 第五條 本會には會長の外理事及び幹事若干名を置く。
 第六條 前條の各役員は會長の指揮を受けて會務を執る。
 第七條 理事及び幹事は會長之を依囑す。
 但し理事は附屬小學校訓導中より依囑す。
 第八條 本會は毎年一回總會を開く。
 但し必要に應じ臨時に開會することあり。
 第九條 總會には大要左の行事を行ふ。

一、會務報告

二、演說講話

三、餘 興

第十條 本會は毎年一回會報を作り會員に頒つ、但會報は會長の指揮を受け理事、幹事之を作る。
 第十一條 會員は入會後五年間に會費として金四圓を納むるものとす。但し特別の事情ある會員は會長の許可を経て延期することを得。

(三) あけぼの會々則(女子同窓會)

第一條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ兵庫御影師範學校附屬小學校あけぼの會ト名ヅク

第三條 左ノ各項ノ一ニ當ルモノヲ會員トス

一、神戸時代ノ師範學校附屬小學校高等科卒業ノ女子

一、兵庫縣第一師範學校附屬小學校高等科卒業ノ女子

一、兵庫縣御影師範學校附屬小學校高等科卒業ノ女子

一、兵庫縣御影師範學校附屬小學校尋常科卒業ノ女子

一、兵庫縣御影師範學校附屬小學校高等科在學中ノ女子

一、兵庫縣御影師範學校附屬小學校尋常科第六學年在學中ノ女子

一、右各學校ニ於テ嘗テ高等科及尋常科第六學年在學セシモノ

第四條 兵庫縣御影師範學校附屬小學校ノ職員又ハ嘗テ同校職員タリシ人若クハ本會ノ爲ニ盡力セラレシ人ハ客

員トシテ入會ヲ請フモノトス

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名 理事 幹事 會報幹事各若干名

會長ニハ御影師範學校附屬小學校主事ヲ推戴ス

會長ハ本會一切ノ事務ヲ統轄スルモノトス

理事ハ客員中ヨリ會長ノ依囑シタルモノニ任ズ

任期ハ一ケ年トシ會長ヲ輔佐シ幹事ノ顧問トナル幹事及會報幹事ハ會員中ヨリ互選シタルモノニシテ幹

事ハ事務ヲ整理シ會報幹事ハ會報ノ編輯ニ當ル

第六條 本會ノ目的ヲ達スルタメ次ノ事業ヲナス

一、毎年一回八九月ニ總會ヲ開キソノ他必要ノ場合ニハ臨時ニ總會ヲ開クモノトス

一、總會ニハ會員相互ニ談話スル外客員其ノ他知名ノ人士ヲ招聘シ講話ヲ開クモノトス

一、年一回以上會報ヲ發行シ會員相互ノ通信ニ充ツ

一、會員中ノ吉凶慶弔之ヲ共ニス

第七條 入會及退會ハ共ニ會長ノ許可ヲ得ルモノトス

第八條 本會ノ費用ハ維持金ノ收入ト寄附金トヲ以テ之ニ充ツルモノトス 但總會ノ費用ハ來會者ヨリ之ヲ徵收

スレドモ役員ノ決議ニヨリ其一部ヲ補助スルコトアルベシ

第九條 會員ハ左ノ各號中何レカノ方法ニヨリ會費ヲ出金スルモノトス

會費ハ從來基本金トシテ分納者ハ金四圓 全拂ハ金參圓五拾錢ヲ納メ、其ノ他ハ每年金貳拾錢ヲ納ムル

規定ナリシヲ今回ハ幹事會ノ結果之ヲ變更シテ

- 一、基本金ノ名稱ヲ維持金ト改メ已ムヲ得ザル場合ハ一時之ヲ流用スルコト得
- 二、維持金ハ全拂參圓五拾錢 分納者ハ四圓トス
- 三、從來ノ規定ニヨリ既ニ基本金ヲ完納セルモノハ矢張維持金ト見做ス
- 四、從來ノ規定ニヨリ基本金トシテ既ニ分納セル者ハソノ儘之ヲ維持金ノ分納者ト見做ス
- 五、從來ノ規定ニヨリ毎年金貳拾錢ヲ納メシ者ハ此ノ際之ヲ維持金ノ分納者ト見做ス、而シテ從來ノ毎
年金貳拾錢ヲ納入スル規定ハ之ヲ取消ス

【附則】 此ノ會則ハ會員多數ノ希望アル場合ニハ會長ノ許可ヲ得テ變更スルコトヲ得

舊 師 の 回 顧

述 懷

堀 卓 次 郎

予は中學生の頃二三教育者の師範學校に對する批評を聞き、之が先入主となつて、何となく師範學校なるものに好感を有たないで、殊に師範學校生徒は概ね陰鬱であり卑屈であつて、所謂面従後背の徒に過ぎないで、中學生の如き天真爛漫の氣風に乏しいやうに思はれたのであつた。随つて大學卒業後、中等學校教員たる無試験檢定を受ける際にも、師範學校の教員たることを好まない爲、同資格を得るの必要がないと考へて、唯り中學校教員たる資格を出願したのであつた。(女學校は年少氣銳の教員の就職すべき學校でないと考へて) 随つて其後も商業學校や中學校に勤務し師範學校には足を入れなかつたのである。明治三十五年廣島高等師範學校創立の際より同校に教授となり約十九年を経過した折柄、圖らずも文部當局から兵庫縣御影師範學校に就任のことを慫慂せられたのであつたが、好感を有たない師範學校に就任することは屑としない所であるので、早速之を斷つたのであつたが、其後更に御影師範學校が他の一般師範學校と違ひ、訓育の狀況、生徒の氣風等に大に特色があり、殊に校長を始め主なる職員が夫々の寄宿寮と軒續きの役宅に居住し、寮長として日夕生徒を家庭的に訓育する仕組になつて居ることを承知し、心大に動い

たので、無經驗をも顧ず遂に文部當局の意に従ひ、大正十年四月一日から同校に勤務することゝなつたのである。爾來予は校長として、教師として、寮長として、三方面より生徒を訓育したのであるが、生徒の氣風態度は予の豫想した師範風ではなくて、寧ろ中學風に近いことを知り、是れ一は前校長和田氏等の訓育方針宜しきを得たことを感ずると共に、師範學校生徒は概ね農村の子弟であるから純朴率直であるべきであつて、若し陰鬱だとか卑屈だとかの弊風があるとすれば、それは全く訓育方針宜しきを得ざるに基因するものであるとの確信を有するに至つたのである。然るに或年の師範學校長會議に於て、或師範學校長から如何にして師範學校生徒の氣風を快活明朗ならしむべきかといふやうな意味の問題が提出されたことがあつたので、矢張り一般師範學校少くとも一部の師範學校には、生徒間に陰鬱卑屈の惡氣流が横はつて居るのであらうと感ずると共に、我が校に於ては斯る問題は一顧の價値もないことを思うて、窃に快感に堪へなかつたのであつた。殊に本校は明治三十年代の頃から各種の運動競技や武道が盛に行はれ、知らず識らずの間に武士道的精神を練り、又スポーツマンシップを養ひ、此等が他の師範學校に類例の少い寄宿寮内に於ける家庭的訓育や自治的訓練と相俟つて、旺盛な意氣、快活淡泊な氣象、不屈不撓の氣魄等を醸成し、所謂甲陽魂とか御影魂とか稱する共通の精神を作り上げたのであらう。而して此の精神は御影師範學校の存続する限り傳統的に繼承して光彩を放つべきものであるにも拘らず、先年某有力者が御影師範學校の或式場とかで之を非難し、斯る精神が學校閱を作つて軋轢反目するの端を開くのであり、偏狹な黨同伐異の基因をなすものであるが如く述べたとのことであるが、是は實に甚しき謬見であつて、予は寧ろ斯る精神に乏しい卑屈陰險な氣風こそ、校閲や黨同伐異の原動力であると信するのである。

今や御影師範學校は六十年を一期として其の光彩陸離たる歴史を終らんとして居る。併しながら予は此の傳統的精神は幾千卒業生の存在する限り死滅することなきは勿論、尙進んで新師範學校生の繼承する所となり、永遠に快活明朗なる教育者を輩出するに至らんことを期待して止まないものである。

古き思い出

横地 石太郎

私が東京大學理學部を卒業したのは明治十七年七月であつたが、其際服部一三さんから呼びに来て面會した處、教員になる氣はないかと聞かれた故、私は應用化學を修めたのだから成るべく化學工業に従事する處を望むと答へたら、夫等の方面には目下の採用の口がなく有つても僅三十圓計の月給であるし、外國人が上にあつて日本人の技倆を信用せず昇進も中々六ヶ敷故當分教員をして居り時機を待つ方が得策であらうと勧められ考へて見ると、理學士文學士の殆ど全部が教員となつて専門の技術を以て世に出るにはまだ時が早過ぎたることを覺り教員になりませうと云ふたら、夫ならば今長崎縣の中學校で七十圓で理學士を一名採用しに學務課長の小山健三と云ふ人が上京して居るから其人に面會して決めるがよからうと云はれ、小山氏に面會に行つたが、同氏は外出中で其日は面會出來ざりしが、翌朝濱尾新さん及松井直吉教授から兵庫縣の師範學校から君を採用したいと云うて來たから

行つて呉れ月給は六十圓であると云はれたから、前日の服部さんからの話をすると、月給は十圓少いのは氣の毒だが神戸の方は君を指名して來たのであり長崎の方はまだ確定してゐないのだから僕等より服部に話して他の人を向ける様にするから神戸へ行けと勧められ、神戸は郷里にも近く交通の便もよく氣候もよく雙方とも開港場であり望む處であつたから神戸の方に決め、長崎の方は同時に同科を卒業した安藤格氏（篠山人）に譲り文部省より赴任旅費三十圓四十錢を受け取り同月二十三日東京を出發し午後六時横濱より東京丸と云ふ其當時最大なる外車の汽船に乗り、二十五日午前五時神戸港に着し、直に上陸旅館西村に投宿し朝食後縣廳に出頭して縣令森岡昌純氏、大書記官篠崎五郎氏、學務課長久保春景氏及師範學校長川上彦次氏等を歴訪したれども休暇中のこととて皆出勤し居られず、依つて學務課員堀均一氏に面會して赴任の旨を報じ、其日は市中及外國人居留地を見物し、翌二十六日朝久保氏及川上氏を私宅に訪問し面會した處、直に辭令書を渡すとのことであつたが學校も暑中休暇中で授業もなきこと故辭令は八月下旬改めて赴任する時に受けることにして其間歸省することにしたのは、餘計な遠慮であつて爲めに一ヶ月間の月給を取り害ねたのは就職最初の失策であつたと後に人に笑はれた。爰に驚くべきことは縣令を初め大書記官、課長、校長に至るまで残らず鹿兒島人であり、丸で芋畑に蹈込んだ様な心地して薩藩人の官海に勢力の旺盛なるを痛感したのであつた。

斯くて歸路神戸市唯一の西洋料理店外國亭にて午餐を喫し宿に歸へると川上校長が來訪して受持學科のことを聞き取り、學校の規則書を受取り、東京より携へ來りたる行李二箇を同氏の宅に預け午後二時三ノ宮發の汽車にて五時四十五分大津に着、十時太湖丸と云ふ小汽船に乗り翌二十七日午前一時三十分長濱に着泊六時汽車にて同

所發八時敦賀に着し九時小汽船三國丸にて同港發午後一時三十分阪井港に着し人力車にて小牧に到り同所より小舟を雇うて吉崎を経て大聖寺川を溯り、七時半大聖寺に着泊、二十八日午前五時人力車にて大聖寺發午後三時郷里金澤に着し、二三日間は親類友人等を招き卒業就職の宴を張り、八月十九日金澤を出發し單身神戸に向ふ途中京都及大阪に二三日間滞在して名所古蹟を見物し、二十六日早朝神戸に着す、前夜十一時頃より強烈なる暴風雨にて阪神沿道の家屋樹木の損害甚だしく、神戸の海岸は高濤の爲め埠頭石垣は破壊せられ、大小船舶の沈没四十餘隻に達し多數の死傷人を出し海岸通一體は大混雜を呈して居つた。川上校長を訪問して赴任を告げ辭令書を受けて同伴して初登校をした。

當時神戸師範學校の職員は左の通りであつた。

職 務	月 俸	就 職 年 月	族 籍	姓 名
學 校 長	五 十 圓	十 七 年 六 月	鹿兒島縣士族	川 上 彦 次
一 等 教 諭	六 十 圓	十 七 年 八 月	石川縣士族	横 地 石 太 郎
二 等 教 諭	四 十 五 圓	十 五 年 八 月	岡山縣士族	富 津 龜 三 郎
同	同	十 七 年 四 月	千葉縣士族	三 橋 得 三
一 等 助 教 諭	二 十 五 圓	十 四 年 四 月	福岡縣士族	岩 松 熊 太 郎
一 等 訓 導 兼 書 記	同	十 七 年 五 月	大阪府士族	鈴 木 重 持
一 等 助 教 諭	同	十 七 年 六 月	兵庫縣士族	渡 邊 世 順

書記兼舎監	二十八圓	十六年八月	福岡縣士族	久田道
二等助教	二十圓	十一年五月	岡山縣士族	前田吉彦
二等助教兼書記舎監	同	十六年九月	兵庫縣士族	松岡彪
三等助教	十八圓	十五年九月	同	田邨文右
書記兼舎監	十五圓	十七年六月	鹿兒島縣士族	郷原増之輔
三等助教兼書記	同	同	兵庫縣士族	松原貞幹
書記	同	同	鹿兒島縣士族	大山精一

右の外學務課屬長松省三、恒川亨二、内海忠誨、堀均一、村瀬乙五郎、大久保好等の諸氏が教員若くは書記として兼務して居り師範學校より川上、三橋、久田、鈴木及松岡の諸氏が學務課員を兼勤して居つた。川上校長は東京湯島の共憤義塾出で軍屬として支那に行つて居つたことがあり富津、三橋の兩氏は東京師範學校（高師の前身）の中學師範科の卒業生であつた、其頃全國孰れの師範學校でも其首脳部は主として東京師範學校出のものが占め中學校の首脳部は東京大學出のものが占めることになつてゐた故、私が神戸師範に入つて二人の東師出の同僚の上に立つことに就ては折合上圓滿を缺く様なことなきやと校内外のもの危惧の念を懐きゐたるも夫は全く杞憂に屬したとて後に學務課長が話して居つたと聞いた。

授業は翌月の初から始まり私は物理、化學、金石學（礦物）及數學の一部等を受け持つたが學科は皆平易なものであつたが、私は大學に在つては英語のみで教はつたのであつたから、殆ど學術上の譯語を知らぬので困つて急

に種々の譯書を調べて譯語を知らんと努めたが其頃は未だ譯語の一定してゐない時代であつた故、譯書によつて種々區々の譯が付いて居るので孰れを探つてよいか尠からず苦しめられた。又理化學用の器械、藥品、標本等の設備も極めて不完全であり僅に小學校用のもの少し計あつたのみで豫算の都合上急に購入することも出来ぬので器械類は竹木、ボール紙、空瓶、硝子板、武力等を用ひて自ら簡易なるものを製して間に合せ藥品も自ら町に行つて多少買ひ集め礦物標本は冬休中に縣下の鑛山等に出張して採集し持歸へる等中々骨が折れたが、生徒は夫が爲めに簡易器械の作り方も知り實驗に興味を有する様になつた、就中雙眼鏡のレンズを外し夫と鏡とすり硝子板とを用ひて暗箱を製してダゲロタイプ式の寫眞を寫したり青寫眞を寫したりして見せたら、講習生の中に後に寫眞屋になつて自分で寫した寫眞を送つて來たものすらあつた。

器械、標本等の設備は斯の如く不充分であつたが唯茲に不思議なことには一臺の精巧なる望遠鏡があつたことである、夫は常に本館二階のヴェランダに備付けてあり校員が港内に出入する船舶の名を讀む爲めに使用せられてゐたが其對物鏡の直徑は十センチメートルもあり、フワインダー付の天文觀測用のものであつたから私の宿直の晩には運動場へ持出して月諸遊星等を觀覽して生徒に天文學上の知識を與へる爲めに使用したので生徒は素より校長、職員までも時々見に來たのであつた。月面の山嶽諸遊星の衛星までも明かに數ふことを得る程のものであつた。斯る望遠鏡が如何にして此學校にあつたかと云ふことを後に調べて見て、是は明治七年十二月金星が太陽の面を經過した時に佛國の有名なる太陽研究者なるゼンサン博士が助手を伴ひ日本に渡來し、諏訪山に於て此珍らしき現象を觀測するに使用したもので、觀測成功の後記念として、兵庫縣に寄贈したものであつたこと

が分つた、此望遠鏡は今尙貴重品として御影師範學校に保存してあり、其觀測記念碁は諏訪山の所謂金星臺に現存して居り、神戸市の一名蹟となつて居るは喜ばしきことではあるが、尙望蜀の欲には此望遠鏡を一學校内に死藏せず金星臺に一の簡素なる觀測所を新設して此に移し遊覽客をして自由に使用して天體及港内外の事物觀覽の用に供せば一層意義あるものとなるのみならずゼンサン博士の遺志に酬ゆる所以であると思ふ。其費用の如きは神戸市の敢て支出を辭せざる所であらう。

此碁面には圖を以て太陽面を金星が經過した經路を示し其下に佛文にて觀測の年月日、觀測者名及時の兵庫縣令神田孝平氏の名も刻してある。觀測助手の内に清水誠の名もあるが、清水氏は明治の初年加賀藩より佛國へ留學し燐寸の製造法を研究し明治七年ゼンサン博士と共に歸朝し觀測の助手及通辯をなし、翌年東京本所に新燐社を興し本邦最初の燐寸製造者として有名なり。同十年其所製の燐寸を上海に輸出し、同十三年始めて外國製燐寸の輸入を防遏し、其功により死後從五位を贈られた人である。

金星が太陽の面を通過することは私も其時金澤英學校の生徒であつて雇外國人より其事あるを知り、硝子板の面を蠟燭の油煙で煙らしたるものを以て肉眼觀測をなし、其豫言の適中したるには大に驚いたのであつた。

其頃は素より活動寫眞などのまだない時代で、幻燈が漸く學校に行はれ始まりたる頃で師範學校で一組の幻燈器械が購入せられたので、一夕講堂に於て初めて映畫會を催した時は内海知事の家族をはじめ職員生徒の來觀堂に溢るる程の盛況を呈し天文地理等の映畫を見せ、餘興として私が製したる種々の色火を燃やして大に喝采を博したこともあつた。

私が赴任した少し前までは師範學校に入學するものは二十一歳以上であつたから、初めて教室に出た時は私よりは年上の者も少からず、斯る生徒から先生、先生と呼ばれるのが何となくうら恥かしき心地したが別でも教員の顔が稍揃ふたと云ふので間もなく縣下小學校の教員を師範學校へ一組づつ招集して講習會が開催さるる様になつてからは、講習員中には鬚髯を蓄へたる堂々たる體格の者や白髮交りの老教員すら少なくなつたので一層怖氣立つたが、其質問する所に依りて其知識の低きことを知り間もなく先生顔して安心して教授する様になり、生徒講習員等も私を信賴して呉れ愉快なる教授を續けることが出来る様になり、生徒及講習員は知識欲が旺盛で私の宿直の時などは教室で教ゆることのみで満足せず來りて種々なる質問をなすに至りたる故、私も圖に乗り遂には教授時間外に特別に「何でも來い」と云ふ時間を設けて種々雑多なる質問に答ふことまでなすに至つたら色々面白き質問を持込まれた、其内で今尙記憶に存して居るものでは、地震、雷獸、火山、溫泉、鬼、幽靈、夢、天狗、化石矢根石等のことは皆平凡で即答してやつたが多少天窓を惱したものは秋になり樹木の紅葉すること、澁柿の甘くなること、海鼠を糞で結りて下げると溶けることの類まで質問せられて中々面白く感じた、學士ならば何でも知つて居るものと思はれた様であつた。

學校に於て體操科には未だ兵式體操と云ふ程のものは行はれて居らず、教師の松岡彪氏は文部省の體操傳習所出であつたから棍棒、球杆、啞鈴、木環などと柔軟體操など位のものであつた様に記憶するが殊に珍らしく感じたのは立木倒しであつた、是は古くから鹿兒島に行はれた武藝の一で一丈計の杣木數十本を沙原に林立し袴を穿き後鉢巻をなし木刀を以て掛け聲鋭く氣合をかけて勇猛な勢で一本一本打ち倒して進むのである。教師は郷原氏

であつた。

是も校長が鹿兒島人であつたからであつたらうが村田経芳中佐の新案であつた。室内射的銃が備へ付けてあつた。是は極小口径の小銃で散弾一粒を詰めて雷管の力で二三間先の的を射るので其頃東京邊では楊弓代りに一時流行したもので雀位の小鳥を射落すことが出来たので私が宿直の時校庭のユーカリの木に來る雀を射つて其の外れ弾が隣の大河平學務屬の室内に飛込んだとて證據物件を持つて來て小言を持たれて閉口したことがあつた。

陸上運動會は明治十六年六月十六日東京大學法理文三學部に於て開催されたのが本邦に於ける最初のもので私學生中にも夫に参加し興味を有して居たので神戸へ來てから師範學校に於ても陸上運動を始めたいと思つて校長及一二の教員に話して見たけれども誰も賛成する者はなく運動場も狹隘であつたので、遂に行はれざりしも外國人居留地の東部の舊生田川の右岸に沿ひたる細長き外國人遊園地に於て外國人のアスレチック、クラツプの企で時々運動會が催されたので見物に行つたが普通の日本人の入場を禁じてあつたけれども私は其隣地にあつた瓦斯製造所の技師長のベイトンと云ふ人と懇意にしてゐたので其人の紹介で特に入場を許され數回見物した。流石外國人の催だけあつて小規模ながら整然たるもので、現今行はれて居る運動會と運動の種類に於ても敢て大差なく千八百八十六年五月八日の會のプログラムが今尙私の手許に保存せられて居るが夫に依ると諸役員も定りたるものあり午後二時の開會で競技の種類は百ヤード競走、ハンマー投(十二ポイント)一等百四フキート四インチ、幅飛一等十八フキート八インチ、砲丸投(十六ポンド)一等三十六フキート十インチ、四分一哩競走、子供(八歳乃至十一歳)百ヤード競走、高飛一等五フキート七インチ、ハードルレース百二十ヤード十墻付、少女百ヤード

競走、居留地巡査競走四分の一哩、密柑競走三十個一ヤード離(九百二十ヤード)、子供(五歳乃至八歳)百ヤード競走、老練者競走百五十ヤード、一哩競走、子供慰安百ヤード競走、一哩步行競走、最後に綱引があつた。外にレガツタクラツプのボート・レースもあり又運動場の南隣の劇場では音樂會、ドラマ等の催もあり珍らしく感じた。尙毎日々刻には海岸バンドの遊園地には幾組もの夫婦が互に腕組をして散歩し子供が其後に仔馬の様に付き従ふて行くなど面白く覺えた。(未完) (昭和十一年二月二十九日)

回

顧

淺 尾 重 敏

創立六十周年とは實に全國に於いて稀なることゝ存じます、誠に御目出度いことで謹んで御慶賀を申し上げます。私は明治二十五年から同二十九年迄五ヶ年間本校に在勤致しました、その時分學校は神戸市下山手通四丁目、今の縣立神戸第一高等女學校の所にありました。附屬小學と運動場は今の縣會議事堂の邊にありました。私は三橋校長の時に赴任して山路校長伊村校長と三代に仕へました。私は齡已に七十四に達しその三校長は已に故人となられ同様であつた中でも今は僅かに教頭の田中氏、圖書の堀越氏、數學の佐伯氏、國語の吉田氏(元町田)、博物の棚橋氏、手工の堀居氏、音樂の田村氏の數名位は御健在ををらるゝやうに思ひます。

私は手工科擔當の杉本教諭の後任としてまゐつたのであつたが、その時分に農業科擔任は欠員となつてゐたので私に農業科も兼ねよとのことで一時は兩科を掛け持ちして随分繁忙のこともありました。農場は今の山手小學校邊にあつて諏訪山から流れて来る細い溝の水を引いて作物を培養したのであります、その後手工科に龍澤氏が赴任して來られたので、私は専ら農業を受け持つたのであります。而しその時分は實に經驗淺く未熟であつたことを回顧して慚愧に堪へぬのであります、元來師範學校の手工や農業は實業家を作るのではなく、その教師を養成するのであるからその心得を以て教授もし研究をも進めたのであります。即ち手工は手惱共練がその目的で考と實行と相伴ふべきを主要とし、農業は農民となる者を作るべきその教師を養成するのであつて、手工では實行力の訓練教育、農業では農事ではなく農業教育といふことを主要とするかと思ひます。然るに今も猶師範學校で農學校に類似の教育を行つてをらるゝのを見受けますがそれ等は動もすれば耕種の方法等に偏倚り過ぎて肝要の農業の根本精神たる本邦は農本國である、農業は百工の基、農業は人生の最も尊貴堅實なる職業であるといふ確い觀念を與へるのを怠つてをらるゝではあるまいかを疑ふのであります。それで師範學校農業科修了の卒業生は農業地方へ赴任してその地方の子弟に農本の精神を確實に指導教育することが大切の眼目で畢竟農村の振興といふことも大に之に頼るべきではあるまいかと思ひます。手工とても同様に之は明治二十年頃に瑞西、佛蘭西等の手工教授に本づき故上原六四郎先生は初めて手工講習に於て手惱共練を稱へられてから五十餘年を経過し昨年五十年記念會とかを擧げられたことを耳にしたがあれは手工を小學校に加へられてからでなく何れかの學校に於て初めて手工を置かれてからのことであつたらうかと思ひます。兎に角小學校手工科現在の實況を觀てその進

歩發展その効績の甚だ遅々たることを感ずるのでありますことは遺憾に存じます。而して此の兩科に就てはまだ研究すべき多大の前途あるべきを痛切に思ふのであります。

誠に駄言を陳べてをこがましく存じますが往時を偲び感想が思はず迸り出で、失禮を顧みず書き列ねたことを平に御宥恕を願ひます、終に於て母校の益御發展と會員諸彦の御健勝を祈り奉ります。

本校寄宿舎の由來

田 中 勝 之 丞

本校寄宿舎先年火災に罹つて全部焼出したので時の校長和田豊氏は直に建築圖案を作つて提出して來たが舊寄宿舎は階上を寢室とし階下を自習室とせる純然たる兵營式で和田氏の提出せる案も亦舊の如く兵營式であつた。當時自分は本縣の學事を擔當して居たが兵營式の寄宿舎は教育上宜しきを得ないとの持論で本校がまだ兵庫縣師範學校と稱して神戸に在つた頃四人の舎監で兵營式の寄宿舎を預つて居たが舎監の一人の言に宿直の翌日はのんびりして春の心地するが其翌日は夏の心地で其又翌日は明日の宿直が氣に懸つて心は秋の如く何となく荒涼たるものがある。愈宿直當日となると全く慘澹たる冬の心地であると云つて居た。誠に尤な告白であるが舎監がこんな心で勤めて居ては唯舎生の非違反則を取締ると云ふ丈で到底眞の寄宿舎訓育は望めない、舎生も亦窮屈で何の

面白味も無いから勢他に隠れた愉樂を求める様になるのである。元來舎監と云ふ其名さへ訓育とは縁遠い感じがするではないか、寄宿舎は親愛を本として師弟相知り相信じ舎長と舎生とは恰かも骨肉の如く渾然一家族の如くになつて始めて眞の訓育は成し得るもので斯様な成果を得るには是非寄宿舎を小さく幾棟にも分割建設し各棟に舎長の住宅を併設して舎生と一家族の形を成さねばならぬとは自分の夙に考へて居た所で、先年京都府在職中同府花園に中學校を新設するに當り是非此趣旨の寄宿舎を設けんと計畫したが財政上種々の事情の爲十分目的を達し得なかつたのを常に遺憾として居た際新に本校寄宿舎を全部一時に建設することとなつたから和田校長に對し此新意義の寄宿舎設置を勤めた所和田氏大に喜びて直に同意し、兵營式の圖案を撤回して間もなく八棟の小寄宿舎を分立する圖案を提出して來たので頗る本懐に感じた次第である。唯此に一つの難關は此小寄宿舎に舎長たる人は單に學識のみならず人格亦優良にして感化誘導に興味を有する人たるを要するが本校に果して適任の人物八人を得るや否やと云ふ點である。和田氏は之に對して八人は確に之を得る見込みあり、自分も其一人として一舎の長たらんと言はれた。然るに和田氏の選んだ八人中には訓育に何等經驗なき書記迄も含んで居たから果して八人共希望に副ふ働を爲し得るやと多少の危懼は無いでもなかつたが、何れも長く師範教育に従事して居る人達だから舎長と云ふ責任ある位置に立ちて一家族同様に朝夕舎生と接觸せしめたならば必ず相當の働をなし得るならんとも考へたので愈此案を知事に提出した所が時の知事服部一三氏は流石に老練にして教育上の識見もある人として開口一番八人の適任者を得らるるやと問はれたので校長も責任を以て推薦すると言ひ居る旨を説いて漸く納得を得たが、知事更に申さるるには幸に八人の舎長を得るとしても其人々の妻女は果して皆舎長の妻として適當なるを

得るやと此一問眞に肺腑を穿つの感あり。自分の經驗によるも校長教員は小寄宿舎の長と云ふ如き始終舎生と親炙する位置に居らずとも妻女の人柄は大に訓育上に影響あり、幸に其人宜しきを得ば舎長の働は倍加するも若し慳貪我慢にして家庭に風波の絶えない様な事では舎長の威信も地に落ちて感化誘導の功も皆無となるであらう、故に此點に附ては知事に對し確實な保證は出来なかつたが種々自分の經驗を説きなどして漸くの事で同意を得、縣會にても新奇の案として好評あり、遂に成立して今日の寄宿舎を見るに至つたのである。思ふに小寄宿舎では數年の後には必ず種々の良習慣が成り立つものである、即ち家風或は舎風と云ふものが成り立つに相違ない、斯様に良風の成り立ち行くのを見つつ骨肉同様の愛の中に相提携して行くのは、何物にも換え難い樂でなければならぬ。又左様に楽しんでこそ舎長としての勤め甲斐があるのである。校長も當初は一舎の長を兼務して居たが是は一時的便宜に出たものであらう。校長は一舎の長でなくて全舎の長でなくてはならぬ。即ち一舎生の父でなくて全舎生の父たるべきもので綜合統制の責は校長に在るべき筈である。故に校長は常に各舎の進境に注意し敢て干渉を加へずして各舎長と一體となり其短を補正し其長を發揚して一段高い所から一段高い獎勵を加へるならばそれが學校訓育の殆ど大部分に相當するので他に見られぬ成績を示すのも當然の事である。

御影師範學校の今昔

曾 我 豊 吉

今や御影師範の名は形式的には消えても、その歴史的事實としては綿々として縦に永久につゞき、又横には廣く江湖にその影響を及ぼしてゐるのである。抑本校の神代史ともいふべき神戸時代は明治十年一月十九日今の縣立第一高女の敷地に設置せられ、明治三十二年七月今の御影に移つた時までを劃することができる。此間に特筆すべきことは明治十三年七月二十一日長くも 明治天皇の行幸を仰いだ事であつた。これ實に本校の光榮の極みであつた。今回その行幸記念碑を本校創立六十周年記念事業の一として建てられたことは誠に意味の深い事である。私が本校に奉職したのは明治三十二年四月の初であつたが、其頃の教頭故大村忠治郎氏と共に教諭兼舎監として中堅の位置に居られた佐伯信太郎や、その以前に教頭であつた田中勝之丞氏（後の縣視學官）等が當地方に健在で居られるから、その當時の事情はこれ等の先覺に教を俟つこととし、茲には將に御影に移らうとする學年初の四月より筆を起すこととする。當時の兵庫縣知事は故大森鍾一氏、書記官は故武田千代三郎氏、參事官は現貴族院議員有吉忠一氏（大正時代の當縣知事）であつた。縣廳は今の縣會議事堂の敷地（其北に附屬小學校があつた）に在つて其西側に道を隔てて師範學校が相對して膝下にあつたので、時の校長故伊村則久氏は縣との連絡

に移められ、武田書記官は常に師範生徒に對し、運動を奨められ、特にランニングについては大に研究せられ、自ら選手を率ゐて指導せられ、有吉氏は憲法を講ぜられた。かうして縣と學校との間が實に親密であつた。この年始めて京都帝大主催の陸上運動會に於て啓發旗（師範生徒の部）義勇旗（中學生徒の部）の二部に分けて競走が行はれた。（六〇〇メートル）この兩優勝旗は賀陽宮殿下より親授せられたのであつた。この第一回の優勝を以て啓發旗を頂いたのが我兵庫縣師範學校選手であつた。此の時の歡聲は全校に響き、大森知事を始め、指導者たる武田書記官及び全校生徒職員の熱狂的歡喜は私の就任早々驚嘆せざるを得なかつたのであつた。かうして一年と益々盛となり、第六回は明治三十七年四月の大會まで連勝を以てこの月桂冠を我校に戴いたのであつた。（和田校長は明治三十七年一月來任）第七回は滋賀師範の選手に第一着を輸したことは實に遺憾であつた。（明治三十八年は日露戰役のため休止せられ、翌三十九年四月に行はれた）和田校長は益々これを激勵せられ（第二回以後高宮教諭主として指導の任に當られた）毎月曜日放課後直に全校生徒職員は運動場の三〇〇メートル・サークルを二回周りて駆歩することとなつた。（後には三周）これは全生徒が選手の氣分を體驗せしむるためであつた。ランニングはすべての競技運動の基本練習ともいふべく、又準備用具等も極めて簡單でしかも體力を鍛鍊し堅忍剛健の氣を養ふに適した運動であるからである。かくて明治四十年四月第八回には又本校選手が優勝して後啓發旗が我校に還つたのであつた。翌四十二年四月第九回にも又優勝した。然るに翌四十三年四月第十回には京都師範の選手が優勝し、これを最後としてこの啓發旗競走は中止せられることとなつた。其後義勇旗競走が男子中等學校——生徒のために再興せられ、啓發旗競走は小學校兒童のために開催せられることとなつたが、その後

如何なるわけであつたか何れも廢止せられた。

其他の運動については野球部が神戸時代に相當盛であつたやうで杉野精造氏、岸邊福雄氏(東洋家政女學校校長)御影に移つた頃、佐伯英作氏、澤田金太郎氏等、後には藤岡茂氏(甲南高等學校教授)、荒勝文策氏(理學博士、臺北大學教授)塚本龍藏氏、生島芳三郎氏等活躍せられてゐた。又擊劍部では、神戸時代において田中勝之丞氏(後兵庫縣視學官)、故伊村校長、故小林鼎氏、小野氏、故境野氏等諸教諭率先して生徒を指導せられ、教士としては高橋赴太郎氏、御影時代には富山圓氏、坂部小郎氏、園部氏等が相次いで指南せられ、生徒としては阿部常次氏、青木勝氏、宮崎晴吉氏、御影に移りては玉木敬太郎氏、鎌井丈太郎氏、土橋保氏、林春次氏、足立良之助氏、故山本晴夫氏、竹内幸一氏等が選手であつた。柔道部は稍後れて設けられて、故藤田軍造氏師範として、赤松芳太郎氏、太田輪一氏、杉本省一氏、澤俊二氏、小谷澄之氏(大連南滿工業專門學校教授)、玉田一次氏、吉田四一氏等の猛者を出し、何れも我校武道部を發展せしめられた。其他庭球部(仲野定一氏、西田八郎氏、松田慎之氏、山本太一氏、末澤隆次氏、神戸茂七氏、谷口幹治氏等)相撲部、蹴球部、松本從之氏、東米吉氏等が活躍せられてゐた。

又漕艇部に於いては特に我校の名を江湖に轟かしたのであつた。漕艇は神戸時代既に盛であつて神戸中學(神戸一中)神戸商業(縣商)と本校と相鼎立して茅海に覇を争うてゐた。時しも明治三十二年十月に大正天皇が當時東宮に御座せし頃、舞子濱に行啓あらせられ、三校の競漕を台覽在らせられたのであつた。時の校長は松尾貞次郎であつて、三校より競漕係委員として各二名を選まれ、當校よりは佐伯教諭と私とに命ぜられた。爾來漕

艇熱は益々盛となつたが經費が過大となるため、校長は一時和船に代へられたが、生徒は之を好まず不振の状態となつた。其後和田校長はボートを復興し、琴井谷福次郎氏漕艇部長となり、大に盡力し、新に三艇を新造し、艇齡に達する毎に週期的に新造し得る豫算計畫が成立した。當時神戸新聞社は年々關西中等學校及專門學校生徒の競漕大會を開催し、神戸高商亦これを奨勵し、夏季には京都帝大主催の琵琶湖における全國競漕大會が開かれ、我校は屢優勝旗を獲たのであつた。最初に玉島種治郎氏等、後は南善一氏、故藤江確郎氏、賀集富治氏、神部賢治氏、廣瀬啓太郎氏、故齋藤康次氏等大に此部のために盡された。かうして運動部の各方面に於て和田校長を始め職員達は奮つてこれを奨勵し、特に高宮教諭が指導の任に當られ、生徒はよく共鳴し、大にスポーツマンシップとしての精神を發揚し、快活明朗、堅忍不撓の所謂甲陽精神を養ひ、御影師範の雄名を轟かし、今日の隆盛を見るに到り、各方面より獲得したる優勝旗は校長室の一部に所せまく林立しその名譽を飾られてゐることは如實に、又雄辯に之を物語つてゐるのである。(以上生徒中の大に活動して運動部に力を盡したる諸氏の名を記憶してここに記し得ざるを遺憾とする。希くは他日の機會を俟つこととしたい)

又學科の研究方面については故大村忠次郎氏、故小林鼎氏、佐伯信太郎氏、小室龍之助氏、故松原貞幹氏(勤續三十餘年)田村虎藏氏、故坂本熊藏氏等何れも熱心に生徒を指導せられ、私共新參者を誘掖せられた。御影に移つた翌年に前波仲尾氏、西川順之氏、故高橋憲一氏、伊賀駒吉郎氏、米野鹿之助氏、大山爾也氏等來任せられ、大に生徒の研究心を鼓吹せられ、特に前波氏が中心となりて學風を振起刷新せられ、時の縣知事故服部一三氏、視學官小森慶之助氏何れも松尾校長にその手腕を振はしめられ、前波氏作の校歌(故米野氏作曲)の精神を發揮す

ることに努力したのであつた。前波氏の國語教授は特に新機軸を以つて鳴り、同氏著「日本語典」は時の菊池文相、及澤柳學務局長がその卓見に注目する所となつたほどであつた。職員及生徒は氏の刺戟を受け、生徒各々其嗜好學科に對し大に研究心を深め、種々の學會を組織し、職員間にも亦研究會を設けて互にその研究の結果を發表することをも行はれた。頃しも明治三十三年六月十日御影師範學校新築竣工式の祝日に當り、伏見宮貞愛親王殿下（時に第十師團長で在らせられた）の台臨を辱うし、次の令旨を賜はつたのであつた。

國家教育ノ基礎ハ小學ニアリ小學教育ノ源泉ハ師範學校ニ出ヅ此校ノ責任ハ重且大ナリト謂フヘシ茲ニ新築開校ノ式ヲ學クルニ當リ諸子倍精勵此重任ヲ完ウスルコトヲ期セヨ

明治三十三年六月十日

陸軍中將大勳位功三級 貞 愛 親 王

特に職員一同に對しては賜調の光榮に浴することを得たのであつた。

其後明治四十年頃樺山文相巡視せられ、職員及生徒を激勵せられた。又日英博展會がロンドン市に開設せられたる時に於て文部省の指定により全國師範學校を代表して本校の施設經營の概況を印刷物とし又職員及生徒の活動實況寫眞及製作品等を出陳し、我校の存在を海外に知らしめる機會を得たことも亦本校發展の一刺戟となつたのであつた。

松尾校長の退職後は一時小森視學官が本校長事務を取扱はれたこともあつたがやがて奥田教信氏校長となり在職僅に一年、其間前波氏職を辭せられ、故大石和太郎氏教頭として來任せられ、大に校紀を振肅せられ、教務を統一整理せられたが明治三十七年一月和田校長來任せられ、大石氏は愛媛縣師範學校長に榮轉せられ、その後任

として人格高潔熱心篤學の岡田五鬼氏來られ和田校長を輔佐せられて、茲に本校の基礎は益々堅實となり、穩健中正の學風を樹立し、甲陽村ともいふべき自治的家族的の寄宿舎を經營し、生徒の薰陶に努力せられた。大正十年和田校長の勇退について廣島高等師範學校教授堀卓次郎氏來任せられ、和田校長時代の學風を繼承せられ、謹嚴懇切を以て生徒を率ゐられ、岡田教頭亦終始一誠、益々其發展と擴張とに努力せられた。私は明治三十二年四月以來歴代の校長並に同僚先覺の驥尾に附して誘掖指導を受けることを得たことを感謝してゐるのであつた。（これより先私は病を得て大正十二年七月退職）其後堀校長勇退せられて熊本縣濟々中學校長安井清雄氏來任せられ、前代の校是を旨とし、大に校運を隆々たる現狀に進展せしめられたのであつた。然るに數年來縣下師範學校の併合問題を惹起し、遂に縣會の議決となつた。安井校長はこの難題の衝に當り、併合後の師範學校位置については同窓義會これが活動の中心となり、同窓義會の幹部諸氏は爾來この問題に熱狂斡旋し、中にも玉木敬太郎氏（御影町長）等は非常なる努力を以てこの難局に當り、茲に新師範學校の位置は縣當局に於て住吉村赤塚山に確定せられ住吉村御影町相共に縣教育のために寄附貢獻せらるる所となり、目下その敷地工事を行ひつゝあるのである。かくて昭和十一年三月末日恰も御影師範學校創立六十周年を以つて御影師範學校の名は解消の形式をとることとなり、茲に御影師範學校と姫路師範學校とを併合して兵庫縣師範學校となつたのである。この三月二十四日御影師範學校最後の卒業式に參列した時の光景は實に感慨無量であつた。時に安井校長、式辭の中に「抑兵庫縣の師範學校は恰も兵庫縣と稱する父をもつて渝らぬが、御影師範といふ母がこのたび縁を切つて新に兵庫縣師範學校と稱する母を迎へたのであると考へるがよい。云々」又來賓として元校長和田豐氏は祝辭の中に「御影師範の

名は消えてもその歴史はいつまでもつゞいて、校歌の精神と共に永久に存続するのである。たとへば元來兵庫川といふ流があつたのが御影川となり、後に又別流（支流とはいはぬ）に姫路川が分派し、数十年の後この二流が合して元の兵庫川に復舊したやうなものである。云々」といふやうな意味をのべられた。この兩氏の詞は滿堂の人々をして感慨悲愴の間に大に慰安納得せしめたことを信するのである。

今や本縣教育の淵源茲に統一して六甲山麓赤塚丘陵上に巍然たる校舎の壯觀が出現することの目睫に迫つてゐるのを待望し、大に新校の益々隆昌に、縣下教育淵源の統一融和を示し、昭和聖代の兵庫縣師範學校として彌榮えんことを祝福いたしたのである。昭和十一年四月 元兵庫縣御影師範學校教諭從六位勳六等曾我豊吉識

三十餘年の回顧

脇 屋 督

明治卅六年春まだ寒い四月の初め赴任した當時は、丁度教科書事件の直後で松尾校長、寺内教頭等職員多数が更迭して奥田校長、大石教頭の許に新陣容を調へた許り、私などは生徒より年が若くて全く何の役にも立たず高橋憲一、曾我豊吉、高宮龜喜諸先輩の驥尾に附して其の日を過すに過ぎなかつた。姫路中學時代の恩師前波先生が本校を既に御退職になつてゐたがまだ佳吉に御在住で五月に入つてから神戸北長狹の吟松亭で送別の宴があ

り、其の席上で十年振りでお目に掛つたのであるが例の聲で「相變らずだね」と云はれ何のことか解らず多分容貌のことであらうとは思つて居たが、修養の足らぬことかも知れぬと大に恐縮、直ちに學校の圖書室を覗くと、あるは先生の御蒐集になつた言語學の参考書は東大や高師の圖書室より豊富なのに一驚を喫し、更に其の内容を精査すると例の色鉛筆で縦横十文字に要所々に横線、マーチンには要項を書き付けてあり、晝夜を別たぬ先生の御勉強振は明かにまさくと表はれてゐるのに二度喫驚、先生のこれ丈の親切な手引は何よりの幸福と聞かれば圖書室を覗くことにした。藏書の中でも「ブルワクマンの印歐比較文法」は燦として光を放つてゐた。「スキートの言語の研究」などは餘程精讀せられて先生の日本文法研究の根柢をなすものと窺はれる。先生の著「口語日本文法」はこの時代には劃期的の卓見であつたと思ふ。尙先生が教室で述べられた持論の大要は明治卅五年香川縣で開催の關西教育大會展覽會への出品物三點、即ち

一、國語教授についての意見

- (a) 國語と其教授法
 - (b) 發音法より入ること
 - (c) 口語を土臺とすること
- 二、漢文教授についての意見
- (a) 漢文と其訓讀法
 - (b) 口語で訓讀すること。附口語訓讀の例

(c) 文法から入ること

三、國語科と關聯させての習字教授のあらまし

(a) 従來の教授法の足らぬところ

(b) 國語科と關聯させる法

(c) 形狀運筆をよくする法

で大體其の輪廓が判明すると思ふ。

今日讀んで見ても啓發せらるゝところが多い。本校圖書室の書目分類も亦先生一流のもので漢書の部などは經書、詩、子類、叢書などと分類せられ、十三經二十一史諸子の大部分から詩集に至るまであるが嬉しく中にも胡廣以下四十餘名の大家が勅を奉じて纂脩した堂々二十一卷の四書集註大全は圖書室を威壓してゐるの感がある。この書は舊姫路藩のものであらうか、驗封司堂、節磨古學、などの藏書印がある。辭書では淵鑑類函、五車韻瑞、さては古今萬姓統譜まで揃つてゐるので中々便利である。後には永瀬君が大平御覽、ヂヤイルス漢英字典などを備へて益々其の光彩を發揮するに至つたものである。珍書としては例の門外不出の播磨萬寶智慧囊がある。現在所藏圖書二萬一千冊に達してゐる。近頃の施設としては岡田先生創設の教育研究室があり其の藏書亦追々に完備して研究者は大いに便益を蒙つてゐる。

或る時圖書室の重複書籍を處分することになり數百冊を整理した。珍らしものが多數にあつたが中でも繪入木版の「伊勢物語」二冊本と「大日本史」の寫本壹百卷があり前者は今は學友會に後者は松田直一氏の書庫に納ま

つてゐる。

和田豊先生の校長としての事蹟は一々擧げる追がない程である。先生の著書「倫理一斑」は斯界に重きをなしたいで永く教科書であつた「法制經濟教科書」がある。先生御在職十八年に涉り其の間に動かすべからざる學風が嚴として確立したものである。全國に於ける代表師範となつたのも第一、有能教師の採用。第二運動の奨勵。第三獨特なる寄宿舎施設と制度。等が重なるものであるが、各方面に適材適所主義によつて全責任を以て當らしめられたが一事業を始めるに當つて微細の點に涉つて幾十の質問を發せられ、全てに満足なる明答を得て漸くこれを承諾せらるゝのが例であるから後になつて一點の遺漏がない。

特に學校の經營上教務、舍務、庶務の三部が渾然として一體となり其の間に何等の支障のなかつたことは他の何れの時代にもない位で大抵は何れかの一部が偏重せらるゝの弊が起るものである。

寄宿舎を中心として生徒の訓育に全力を注がれたことは一通りでなく如何なる場合でも生徒の催す會合には都合をつけて出席せられ假令大臣、知事の招待も時にこれがためにお斷りになつた例もありこの一事を見ても如何にも其の眞劍さが窺はれる。

教務の諸規定の整理は主として大石和太郎氏によつて今日の基礎を築いたものである。大石氏の後を受けられたのが岡田五兎先生である。

岡田五兎先生の御來任については私も大に意を強うした。先に恩師前波先生を失つて落膽してゐた際、愛媛中學校で三ヶ年御世話になつた岡田先生をお迎へすることの出來たのは眞に天祐とでも云はうか、明治三十八年九

月先生を住吉驛頭にお迎へして那家の私の寓居の近くに先づ落ちついて頂いたのです。それ以來先生が献身的に學校の爲にお盡し下さつたことは、中々短時間には述べ難いので一々は挙げません。其の當時御翻譯になつた「チーグラ 教育學」を出版せられ其の謹嚴正確な譯文既に世に定評があり、爾來三十餘年先生が口に筆によつて時々御發表になつたものは相當な量に上るものであり、他日誰れかゞ一纏めとして下さる方があれば我々後輩のために非常に有難いことであると思ふ。何事にも熱心で御教示を賜はつたことは少くない。私の貧弱な頭では其の萬分の一も了解してゐないので、知らず識らず感得し得たものを擧げると、

一、正しくあること。二、何事にも辨解がましいことを言はぬこと。三、何事にも人情味あること。四、他人には寛大に自己の格率は嚴重に守ること。等ですが其の一つでも是非共守りたいと思つて努力を續けてゐますがどれ一つ思ふやうにならぬのは凡夫の悲しさです。

當時の附屬小學校主事は伊賀駒吉郎氏で氏の心理學原論は當時有名なものでした。後に明石女師の主事となられ大に活動せられたことは出入の靴屋が同氏の靴の修理がとて間に會はぬとこぼして居た一事を見ても、如何に其の活動が劇しかつたことが想像出来る。

末廣、曾我、三浦各主事を経て現主事に及んでゐる。各主事の事績についてはこれを記述するに其の人があらうと思ひこゝには述べませぬ。

當時の學校職員の研究に熱心なことは大したもので曾我教諭が重い々々寫眞器械を擔いで數ダースの乾板をも

携帶して朝鮮の山野を跋渉せられたことがあり、高橋教諭の博物會は時々大會を開いて私し迄もダーウキンの傳記の講演を言ひつかつたことを記憶してゐる。

米野教諭の作曲は多數に上り「統合教科女學唱歌集」となつて出版せられ就中かの赤穂義士の唱歌は縣下一圓に流行したものであり、日露戦争後には私の拙い「戦死者をいふ」といふ歌詞に作曲して下さつてこれ亦廣く用ゐられたことがあつた。

學科の教授法も幾多の變遷を経て居る。明治二十年前後の全部筆記時代より原書時代、邦語教科書時代より和田校長時代の主張であつた教室内教科書筆記不使用時代、次いで實驗主義時代を経て今日のプリント全盛時代に立到つて居る。

英語の教授も前波先生の意見によつて全くダイレクトメソッドによるもので、教師は福本メリー次いで英國人イングロット氏で、最初から外國人について英語のみで英語を習ふといふ新式のものであるが、生徒は一時間何も解らずに過すことも多かつたやうである。

當時の寄宿舎舎監は黒砂糖の尊號のあつた佐藤秀一氏の後を受けて曾我豊吉、高橋憲一、謝花寛功、高宮龜喜、堅田常太郎の諸氏の中へ小生が加つて甚だ形式的な事務をとつて居つた。和田校長の來任と共に柳澤久太郎氏が舎監長となり、大いに活躍學友會の創設と共に其事務が大いに整つた。主なものは學友會經費の確立である。氏の考案になる基金の制定は其の當時日露戦争の國債を生徒職員の出金で應募購入したのが其の始まりで、爾來年々生徒は入學の際職員は新任の時に醸出して今日約一萬圓に達してゐる。柳澤氏の計劃では百年の後に百萬圓

に達せしめて其の曉には學友會經費は全部其の利子で支辨しようといふ永遠の大計劃であつた。次いで休養部、共同購買部の施設も皆氏の賜であり、これ等は自分が其の後其の經營に當り約二十年を経て今日榎本氏の手に繼續せられてゐる。大正年間學友會の經費が毎年一萬圓以上に上つたことは全國に其の比を見ないことで各部の活躍が如何に盛大であつたかはこれでも窺ひ知られる。

休養部の如きも毎年一萬圓以上の賣上を見、漸次生徒數の減少と共に其の額も又二分の一以下に降つたのであるが御影時代を通じて生徒の食つた菓子代が十五萬圓を下らぬとは豪勢なものである。休養部以前は國道（郵便局の前通り）の突當りに直角堂といふ菓子屋があつて皆がこの店の上得意であつた。

大寄宿舍に四名の舎監が一人宛交替に宿直勤務をするのは誰しも經驗した通り、舎監と生徒とが全然其の氣持が反對に離れて行くのでどちらにも楽しみといふものがなく、苦しい許りである。これに比較すると家族的な舎監住宅付の寄宿舍は終始一所に生活するのでお互の心持に何の距てもなくなりお互の心持はよく理解せられて同情があり非常な親しみが生じて如何にも楽しい生活である。

青年心理の研究者青木誠四郎氏と一日話したとき氏が某師範の出身でありながら師範學校寄宿舍無用論を述べられたことを記憶するが、これは多分大寄宿舍の弊を見て本校の如き家族的な寄宿舍の特長と愉快さを御承知ない結果であらうと思ふ。この制度にも一面の弊がないでもないが更に深く研究を要するものであると信ずる。

十五六歳の青少年から四十歳前後の専攻科生を收容する師範學校は甚だ特種な立場に置かれたもので單に年齢の上から見ても他の中等學校のやうにあまりに劃一的な施設と規定は、殆んど意味をなさず、總ての方面に特種

の工夫を要することは云ふまでもない。

寄宿舍に起つた不鮮事件も二三あり我々舎監の不行届であつたことは云ふまでもないが、一事は施設の罪に歸すべきものもあり將來は大いに考へなければならぬ點であると思ふ。

寄宿舍が生徒訓育の中心であることは勿論であるが、通學を許可する制度が始つて一時は七百餘の生徒の半數が朝夕に校門を潜る時代も出現したが、其の結果通學生控室取締りの必要を生じ幾多の事件も發生した。通學生の方が寄宿舍よりも修學上に多分の自由性があつて萬事が其の結果必ず良好であると信じて居つたにも係らず師範生の家庭の或部にあつては父兄の取締り方に案外缺陷が多いことが判明、他の中等學校の如き良結果に到らなかつたことは甚だ残念であつたが致し方がない。時期尙早の恨みを飲んで終つた。

和田先生について人格圓滿識見高邁の堀卓次郎校長先生を迎へ、更に寛仁大度量の偉丈夫安井清雄校長を戴き今日校運隆盛を致し今回の六十年記念祝典舉行の幸運に遭遇して我々職員並に五千有餘の卒業生が、歡喜の極みに達したるに際し今や突如として廢校の悲運に直面し眞に感慨無量である。

師範教育といつても今では六十餘年の經驗を有して居り幾多の變遷を経たことであるから當初の創設時代の古い型をいつまでも襲用するの愚は敢てしたくはない。米國では研究せられた所によると、小學校教師としては中等學校卒業後二ヶ年の専門學校、中學校教師としては四ヶ年の大學程度の修業を必要としてゐる。これを見ても我國丈がいつ迄も舊制度を固執せず時勢の進運に伴ひ新しい制度の確立か急務中であると信じ所感の一端を述べて其の責を塞ぐこととする。

御影師範の回顧

山 鳥 吉 五 郎

御影師範の五十周年記念式がつい此間行はれたと思つてゐるに早六十周年となつて記念誌に再び感想を書くの光榮を有するに至つた。

余が中學校を卒業する年に京都帝國大學に第一回の啓發旗及義勇旗競走があつて余の中學校からも義勇旗競走に出て敗けた。其時に御影師範が啓發旗競走に優勝したので其存在を初めて知つた。爾來毎年御影師範が優勝してゐた。數年の後明治三十八年四月に此學校に奉職することになつたのは奇縁であつた。之が余の教員生活の第一歩で爾來十五年半人生の約四分の一をこゝに過した、新任當時の最上級生であつた諸君は大抵効成つて既に退職せられてゐるが今猶校長で居られるのは本縣並に大阪市の第一流の校長ばかりである、御影第二の藤原君、魚崎の高谷君、本山の堂内君、伊丹の淵上君、大阪では酒井君、將積君等がこれである、實業界に轉じられた方で折々出會ふのは中井君、上村君、黒田君等であり南米に移住した治部君も此級である。之を思へば余も古いものである。余の前任は御影師範の博物教育を興隆せしめて名聲輝々であつた高橋憲一君で同君が廣島高師に急に轉任せられることになつたので岐阜高女に新任に内定してゐた余は俄に其後任に乗つたので余には頗る重荷であつ

た、併し其頃は少壯であつたから一の理想と意氣とを持つてゐた。博物教授に對する考は其頃も今も變はつてゐない、即三十年間余の考は何等の進歩をしてゐないから最早時代遅れの者である、余の中學時代には博物は生徒の嫌つた學科の一で支那歴史と化學に次で嫌はれてゐた、其時代の博物學は記述的學科で學問の縮少したものを教へるに過ぎなかつたから生徒が興味を持たぬのは當然であつた、教育者を初め世人は博物學なるものを誤解してゐる。教育學を初めて習つたとき博物學が記述的學科に分類してゐるのは氣にくはなかつた。教育學者は博物學の如何なるものであるかを知らずに講義してゐるのに驚いた。今でも上級學校の入學試験問題をみると單なる暗記學科として取扱はれてゐるやうに見えるのは遺憾である。

余は赴任當時から博物教授に於ては實驗觀察をもとにして眞の自然研究をなさしめ生徒に研究的趣味を養成せねばならないと思ふて初めて御影師範學校に實驗を課し其方針をやつてゐた、今から思へばそんなことは兒童でさへ知つてゐる當然すぎる考であるが三十餘年前の我國の博物科は國語科を去ることが遠くはないやうなものであつたのである。書物も其頃には少く且つ大抵外國書の縮少のやうなもので中等教育に於て日本の自然物を基礎として教へる爲の參考書はなかつた。動物學には博文館の會田龍雄氏の動物學があつたのみで植物には三好學氏の植物學講義其他二三に過ぎなかつた、通俗化し日本化し人間として役に立ち小學校教員としても適當なものにせんと思つたが調べる本がないので思ふやうにならなかつた。余一流の動物學を作つて教へたのである。それから見ると今日は長大足の進歩で動植物の圖譜なども多く出來たので非常に便利になつた、今日博物教授をする人は美しい感がある、草一つ調べるにも蟲一つ知るにも殆んど苦心は入らない、實に隔世の感がある、加ふるに其當

時は學問の内容が急激の進歩をして從來なかつた遺傳學なども出來た、そこで世の中に後れないやうに教授をするには貧弱な吾人には一生懸命に勉強せねば教へられなかつた、嘗て學生時代に丘先生から「教育者は少くとも數へる二十倍の知識を有せねばならない」「勉強をやめるときは教員をやめる時である」と聞いてゐたが名言であると思ふ。

心持ちだけは其積であつたが事實はさうはいかなかつた。御影師範の在職十五年半は實に奮闘の歴史であつた之は單に博物學が進歩したのみでなく生徒諸君がよく研究をして來て質問などをするので余も努力せねば教へて行けなかつたからである。數年前から自學自習とか創造教育とかを教育界の新思潮のやうにいつてゐるやうであるが御影師範の生徒は古くから自學自習であり創造教育をされてゐたので今頃そんなことをいふのは時世後くれである、生徒諸君が自學的的研究をして余の足らざる所を補つてくれた御蔭で面白く教授することの出來たのを感じ謝する、生徒の成績が悪るかつたり勉強をしなかつたりするのは、教師の教育が悪いからだ、生徒が出來ないとか勉強をしないとかいふのは教員自己の罪を生徒に轉嫁するものである、生徒に實力をつけるのが教員の仕事である、といふのが余の時論であるが、此論法を以てすれば御影師範の生徒が研究的興味を有しよく出來たのも余の教育がよかつたのかも知れない、呵々。

「人のいふことや書物はあてにはならない、實物について研究せよ」「ノートにかゝす頭にかへ」とは余の口癖であつたと思ふ、ノートに筆記する教授は感心せぬ、朗讀を筆記する教授に於ては殊にそうである、余は學生時

代に教育學や倫理學は先生の朗讀を筆記したが只つまらないといふ外何等の記憶も利益もなかつた、動物學や植物學は先生は草稿もなく生きた教授をせられたので教室で習ふことは其場で覺えられた、故にノートを復習する暇に學校で習はない方面の研究が出來た、其經驗から生徒に筆記するなといつたものだ、今でもノートを澤山持つて重さうに身體を傾けて通學する生徒をみると一種の悲哀を感じる。

余は博物學は其郷土の自然物の實際について説明が出來ないでは徹底したものではないと思つた、そこで縣下の自然物を集めようと思ひ先づ淡水魚の調査に着手して當時生徒であつた紅谷君にも手傳つて貰つて整理したことがある、礦物の教授は無味乾燥に陥り易いから縣下のものを基礎とするのが最も良いと思つて之を蒐集した、此事業は半途にして明石へ轉任したが今縣が郷土室の必要を感じて師範學校に之が出來たのは痛快である。近來初等中等學校では郷土研究が流行してゐるが吾人の從來の考が教育學者によつて理解されたことを感謝する。

吾々の在職時代の先生方は教育に熱心な人が多かつた、中には熱心過る位熱心家もあつて時間の取り合ひをしたり時間が次の時間にくひ込んで喧嘩をしたりする熱心家もあつた、今日世上の學校では時報の合圖で教室に入る人は少いやうに思ふ、遅いものは數分も後れる、先生が熱心であつたから生徒の研學心も強かつた、在職時代に勉強するのみならず卒業後も研究家が多く出た、すべての學科について例をあげると數限りないから余は博物に關するものだけをあげると御影師範を出て中等學校の博物又は園藝を受持つ諸君に神戸山手高女の藤原君、御

影師範の紅谷君、伊丹中學の武岡君、加古川高女の松本君、田中君、龍野中學の陸井君、尼崎高女の川向君、大阪府茨木高女の安井君、岡山縣に永岡君、東京に高瀬君等がある、何れも其研究に於て教授に於て拔群の成績をあげて居られる、本校職員中にも御影師範出身は國語科の藤原君、西村君、數學科の島津君、公民科及習字科の森内君があり何れも本校中堅人物として活躍し且絶研究を續けてゐる、從來我國の教育は學校時代に無暗に詰り詰め込み學校を卒業する頃には身體も腦髓も疲れ勉強はいやになつて卒業後は勉強せぬやうになる、學校では無暗に詰め込む必要はない。知的情操を養成すれば足る、學校を出てから研究をする人間がエライと思ふ、御影師範の教育はそれであつたのであらうと思ふ「人は一生の間學ばざるべからず」といふ英諺は尤もなことである。

x

x

x

余の教授上で最も困つたのは所謂焼き直し講習で手入の上で困つたのは學校園であつた、明治の終から大正の初であつたと思ふが卒業生の講習があつた、當時焼き直し講習と卒業生諸氏は呼んでゐた、其講習の内容を如何にすべきかに困つた、小學校の教材はよく研究されて居り實地の教授は我々よりも老練であるからそんなことはやれず、細胞の研究が進歩しつゝあつたがあまり専門的である、遺傳研究が追々進んで來たし教育者は遺傳の塊である子供を教育するのであるから遺傳學を知り且之を基礎とした教育をせねばならないことを余は常に唱へてゐた關係上遺傳の話をすることにした、處がまだ日本には遺傳學の書物がない、従つて余には其知識が足りない時恰も母校に博物の講習があつた、岡田先生に講習に行くことを無理に頼んで旅費は自辨、ぬけた授業は後で補ふといふ條件でヤット許可を得て東京に行つた、丸善で本を漁つてゐると數種類の遺傳の本があつた、之を買つ

て種本として講習を歪みに終へた、今は日本にでも讀み切れぬほど遺傳の本はあり内容も非常の進歩してゐるが其頃は日本に於てはまだ哀れなものであつたばかりでなく、世界に於ても遺傳研究は幼稚なものであつた、遺傳研究は千九百年になつて初めて研究されかけたといつてよい、遺傳を基礎とせぬ教育はいけないことを余は前から唱へてゐたが近年教育界では漸く氣がついたのか個性尊重の教育を叫び出した、兎角教育者は氣のつくのが遅いのを特徴とする。

學校園は中島君（現在親和高女の）に廣げて貰つて南館の南側全部を之にした、其後は手入れに持て餘した、地は砂土で日當りがよいので植物は植ゑても枯れる、殊に夏休には一學期かゝつて生徒に手入さしたのが、荒畑の如くなる、肥は足りない、灌水が難かしい。小木本を六甲山からとつて來て植ゑたのが漸くついたら喜んでると夏休中に枯れて仕舞ふので人知れぬ苦心をした、しかし其頃植ゑた指大の木が今は太くなつてよく繁茂してゐる、學校に行く度に之を見てなつかしい感がある、附屬との境の合歡が茂つて夏になると一面に花が咲いてゐるのをいつも電車から眺めて通るのである。

今年の夏も電車から見

植ゑたりし時思ひ出づ合歡の花

と下手な句を作つた、本校移轉の際に此等の植物を新校舎に移植して貰ひたいと思ふ。

x

x

x

先年或る研究會の席上で誰であつたか理科の受持時數が多いために教授が徹底しない、理科の教員は受持時數

を減少して貰ふ必要があるといはれたが時間は少いほど結構ではあるが多いがために授業がうまく行かぬといふことはないと思ふ、余が學生時代に週に九時か十時を受持つ先生の教授は下手で且徹底しなかつたが十數時間も持つてゐる先生の教授は上手で且徹底した例がある、故に教授の良否は受持時数には關係はない、余は御影時代には授業時数最も多く一週二十時か二十一時で尙神戸高商へ行つて四時間の講義をし准講の授業が二時乃至四時で都合二十數時間で舍監を兼ねてゐた、自分の力の足らぬのに怠けるので勉強も出來ず授業も徹底しなかつたが受持時数が多いためにとの感じを起したことは一度もなかつた、嘗て戸張竹風先生は授業の「折ゲーテ」は偉い、世界的の詩人で哲學者で解剖學者であつた、専門の學科が忙しくて獨乙語の勉強が出來ないといふのは怠け者である、といはれた、味ふべき言であると思ふ。

x

x

x

こんなことを追想すると限りがないが要するに御影時代の十五年半はすべて失敗の歴史であつて今から思ふと慚愧の至りに堪えなす。

舍監としての生活に至つては更に失敗の歴史であつていつもそれをいふから此度はいうまい、只余の光榮と名譽と思ふのは日本一の大校長和田先生に部下として仕へ、學徳並び高き岡田先生を主席として仰いだことである、其後校長會等で和田先生に會ふ機會が多く益其偉さを感じ先生の徳山高く水長きものを覺えたが此度教育者生活滿五十年を記念として教育界を退かれいよく落日の感がある。

御影師範も六十周年を記念として兵庫縣から退くことになつて寂寥の感がないでもない、余は生物學上の根據

から人生を七十年としてゐる、之に比べると御影師範の壽命は十年も短かい、學校としては實に夭折である、其光輝ある歴史と充實せる教育内容とが日英博覽會を通して全世界に知れ渡つた。まだびくともしない建築を残して兵庫縣師範となつて山に登るのは惜んでも餘あることであるが定めし舟夫が多かつたのであらう、希くは御影師範精神の永劫不朽を祈つて止まない。

猶終りに卒業生諸君の多くから時候見舞や年賀状を頂き衷心感謝しながら一々答禮をしない無禮を深謝します併し返事の入る御手紙は必ず返事することに致してゐますが萬一其れを怠る場合があればそれは忘れてゐるのであるから御遠慮なく御催促をして下さい、必ず返事を差上げます。

誠心でも變る現時の社會

山田春耕 鐵禪 捧居士

今熟々考ふるに世の有様は日日に進化しつゝある。御師も元は神戸町にありしものを御影村に移し、又今度住吉の山へ移る事に相成り段々閑靜なる山上へと移る此の次移ることになれば六甲山上へ行くかも知れぬ。或人の句の如く「浮草やけふはあちらの岸に咲く」が如く學問する適當の地に移轉することだ。養生は明治四十年三月長野師範より御師に轉任した頃は電車電燈も下宿屋も無かつた。只御師が廣々とした野原の麥島の中央に只一つ

廣大なる赤煉瓦の洋館が日本一と云はれる校舎が目にと止まつた。此の校舎より大學生も及ばぬ大選手が産れるとは心嬉しく思つた。海岸に出て見ると黒々とした酒蔵これが灘の生一本の銘酒の出来る酒蔵かと心中無慮の感に打たれた。又驚き入たのは三大祝日には食堂の中央に四斗樽が飾られて、職員も生徒も一所に祝杯を擧げ萬歳を唱へたものであつた。今思ふと喉も鳴るが其馥郁たる香氣が未だ鼻先きにある様だ。此の時代も昔と過ぎ去りぬ。世の中は段々進化するもので彼の天保錢も昔は一錢で通用せしもの今は八厘に値下げ二厘下落した。ウツカリ貯金も出来ぬ。耆生は其後貯金はせぬ。又今日では自由の權利で嫁を貰ふにも聲を貰ふにも兩親に一語も咄さぬ世の中だ。我儘氣儘一杯の状態に成つた。これも變つた。又大恩を受けた家僕でも主恩をも思はず弟子として師長の之恩を餘所にして唯我が身のみを知つて只冷々淡々たる心持になつて仕舞ふ。又現在腹を痛めて産んで呉れた父母兩親の大恩も忘却して仕舞ふ。誠心の缺乏したと云つても之れに上越したことはあるまじ。これも變つた又道を歩むにも老人が向ふから腰を屈めて來れば此方より先づ道を譲つて老人には善き道を通らせ我は道の悪い方を取ると云ふやうな心掛は人の人たる道である。汽車中電車の内でも同じ寸方に履行せねばならぬ筈だ。又労働者でも先づ先へ立つと少し働いて人の後蔭に廻つて多く働いた様な顔をして骨を折らずに金を多く貰はうと思ふ人が多くなつた。眞面目に働く人が無くなつた。これも一つ變つた。サテ現世の人は信仰心の缺乏其の上に先祖の命日も慕參する人も段々少くなつた。人格を修養する人は殆んど無いと思ふ。殊に美術家に於て最も多い、近來の畫家は一夜の甘酒屋が殊が多くなつた。帝展出品畫の如き、一ヶ月位で着色の變色筆力の缺乏これなり。今爰に書法に付て一言申す。叮嚀に學生諸君に告ぐ書は其の形體や位置は第二義にせよ、第一義に誠心誠意

より流れ出づる崇高なる人格の修養が實に基礎となるから確信の信念修養が必要の時だ。神佛に祈願して一心不亂に他力信心の力を借ることだ。書には自分の精神が書體に充實して巧拙以外必ず威嚴を保つべきだ、昔の廣澤や菱湖や菘翁などの先生方は筆致は書家として實に立派の方だ。一幅其當時千金を投ずるも惜まざるものであつた。けれども今日これを佛法修養信仰の出來た木庵即非乃至大徳寺派の一体、澤庵、江月、慈雲等の和尚方の書體に比すれば畢竟修養者に及ばぬこれが信念の不足により甲乙のつく所で、冀くは學生諸君よ、今より一大人格の修養國民道德の基礎を心から勉められんことを御勧め申す次第なり。枯木も山の賑ひ。大海や鷗飛び込む波の音一讀一笑呵々。

夢 見 る 鳳 雛

山 下 賤 夫

△師範の學生時代は教育者の雛時代である。

雛といふもの、短翼長脚、恰も大名行列の奴の様な格好でお尻を振り、黄色い嘴でピョ〜と親鳥の後から鳴りて歩く。だから、學生時代、茶話會や雄辯大會の壇上で、目を張り拳を振つて、滔々懸河の辯をまくし立ていかに名論卓説を吐いても、世の老成人は「何のヒョッコが」と鼻先であしらひ勝である。

△但し雛は雛でも御影師範——天下の御影師範の學生はシャモや家鴨の子に非ずして所謂鳳雛である。雛にして既に「東方君子の國に出で四海の外に翱翔する」概があるのである。
△開校以來茲に六十年。國家百年の計を夢みて、年々に巢立つて來た鳳雛はまさに五千幾百。盛んなるかな！
△夢は經驗の、時空を超越した斷片的結合である。故に夢は一面、理想であり、創造である。夢無き人生は無機物の世界である。

△颯爽として其の英姿を天下に現した御師の鳳雛は六十年の間に、いかに其の夢を實現化したか、教育者として人として、いかなる創造を人生に試みたか。

△世の老成人はいふ、「人の夢は年齢に應じて三變す」と。(一)青年期は勞力無視、黄金超越を夢とする時代。

(二)壯年期は勢力擴張、地位獲得を夢とする時代。(三)老年期は名利執着、生活安定を夢とする時代。

△吾人はいふ、「教育者の夢は年と共に變化せず」と。否、「すべきものにあらず」と。又いふ、「教育者は年齢を超越せざる可らず」と。御影卒業生諸賢、希くば永劫に青年たれ。

△今朝、論語を繙いて偶然左の節が目につれた。

「楚狂接輿、歌ひて孔子の門を過ぐ。曰く、鳳や鳳や何ぞ徳の衰へたる。往く者は諫む可らず、來る者は猶ほ追ふ可し。己みなん己みなん。今の政に従ふ者は殆し」

聖人を諷する狂人も居る世の中である。吾人は時に己を省みて箴める必要もある。

△御影師範が其の六十年といふ年月を超越し、創立當時の意氣を失はず、益々潑刺新鮮の力にあふれて、日一日

鳳雛養育の大任を完うせんことを祈る次第である。(以上)

御影師範時代の思ひ出

愛媛師範學校長 宮 澤 健 作

三月八日の佳辰を卜して御影師範學校が六十周年の祝典を挙げらるるに際して御案内を頂きまして衷心から祝賀の會を湧出すると共に過ぎし三十年以前に次ぎ次ぎと思出を繰り返しました。

御師は私が初めて師範教育者教師として社會に立ちました最初の道場でありまして、丁度卒業してすぐ學校へ参りまして學校の堂々たるに威壓されると共に學校にて永く御指導を受け且つは敬慕せる和田、岡田の兩先生が居らるゝので多分玄關から入らずに小使室の側から入つた様に覚えて居ります。爾來滿六年二月即ち明治四十五年六月急に長野師範に轉任する迄至極平和に専心教育道に修業をさせて頂いて参りました。其時代の生徒諸君を或は學者に或は教育者に中々進展されて居る様で今更ながら自分の年を重ねたるを思はれます。

在職時代唯々授業に校務に何等の餘念なく面白く務め來たのみで學校の内外に對し何事も顧念する事がなかつたのでしたが轉任して参つて所々を轉々するにつけて愈々御影時代の學校生活は大船に乗つて居つた感じで當時の校長和田先生及び岡田先生の偉大さを感じた次第であります。今でも其當時を思ふとき第一に胸に浮び出すの

は、

第一。ピンボンの練習を時の音楽の先生とやつて居りましたとき、和田先生が入つてこられて叱られたことです。試合の爲めひねり玉の練習をやつて居つたのをひれつことをやると叱られたのです。これが今でも身にしみて苟も卑劣の事を何事によらず潔癖的に忌みきらふ様な感じが起るのであります。

第二。御影師範の生活は一回啓發旗競走にまけた事があつたのですが其際和田先生はこれは學校共同責任の如くに考へられたのか毎週月曜に放課後四百メートル宛職員生徒一同かける事を初められた事です。御蔭で皆身體の健康の上に効果あつた許りでなく以後教育上参考資料となつて生きて居る様に感じて居ります。

第三。御影師範の寄宿舎に火災が起つた事が御座いますが、其際校長が出張以前に舎監に火の用心の注意をされ出張には小もどりして再び教務に火の用心の事を申された様でしたが、不幸出張其夜火災が起つた事です、矢張偉い人は豫感があるなど感じましたが、其後教職にあつてすべてに豫感を生ずる迄に熱心に校務に當らねばならぬと努力いたしました。

然かも火災の通知で歸校せられて火災場を一覽されて待ちにまつた職員に對し唯一言惜しい事を致したが致し方ない。これから自分の技倆を振ふ時だと申された其態度を職員が皆驚嘆した様でしたが校長としての此態度其後教職に自分として心中に常にくりかへして居る教へであります。

第四。恐ろしかつた事はたしか新潟中學で人見教頭が去られて其後任學科教師に行く様にと吉田彌平先生から申されたので郷里でもあり且又其時分何となく郷里近くと考へた時もありましたので（これは後で思ひ當つたの

で祖父が間もなく死去したので其感じか當時中々不思議位に起つたのですが）御宅へ參つて御話したとき大に叱られて恐縮した事です。

今一つは羽田貞義先生が浦和の小島校長から依頼されて舎務主任をさがされたとき自分と同期生で適當の人をとの事で丁度其際「タイプ」の反對の二人を心に畫いて居つたので先方の校長の性格によつて何れがよからうと思ふたので和田先生に校長室で小島先生の事を御伺ひ致したとき一言で叱られ校長をして居る位の方行く教師が如何なる「タイプ」でも何も云ふ事ない。小島の事聞きたければ柳澤に聞けとの事狐につまれた様で早々ひき下り柳澤君に聞いた處羽田先生は君の事で僕にたのんで来て居られたので校長に話した事があつたがだめなんだ。それは君をとの事だつたのだ。それだから叱られたのだとの事初めてわかつたのでしたが二度叱られました。

今一つは和田先生の故夫人に叱られた事です。御正月の家族會に先輩の先生は正月だし酒一本位はつけた方がよいとの座談も出、僕に御伺して見よとの事何の氣もなく御奥様に御伺ひいたした處早々相成らんと叱られた事です。

第五。御影時代は氣候の關係もあつた事と思ひましたが先生に病氣がない事はない理でもなかつた様でしたが病氣で授業が出来ない位でも學校へ出て居られたので、自然學校缺勤と云ふ事は一種の罪惡の如く生活中植え付けられまして、一種の習慣的感じとして今でも支配して居る事でありませう。

教員生活の第一步に御影に勤めさして頂き餘念なく教育活動に恐れなく働かして戴き、兩先生は勿論當時の諸先輩から直接間接意義深き指導を與へられましたので今に至るも御蔭で教育生活を續け無事に働いて居る事が出

來て居る事と感謝すると共に現在まで教員としては又校長として師範教育三十年の繼續の根本態度は主として和田先生、岡田先生に植ゑつけられた事と信じ深甚之感謝を感ずると共に、御影師範に對して感謝して居るもので御座います。

生徒諸君に對しては教授上指導上今から考へて頗る若氣で無理位であつた事を感じます。

思ひ出を記しますれば際限ないので御座いますか思出の深い御影師範も六十周年の齡を重ね莊嚴な然かも盛大な式典が擧げらるる事を思ひますと滿腔の祝意を呈したく且又諸先生、當時の先輩、當時の生徒今は堂々たる良教育者の方々にも御會ひ致し度い感じが山々で御座いますが、其意を得ません。唯遙かに御隆昌を祈ると共に舊知の方々の多幸を祈ります。

明治四十二年

東京高等師範學校教授 玉井幸助

私が御影師範學校に赴任したのは明治四十二年の四月でありました。今度創立六十年記念誌に何か書けとの御勧めを頂きまして、ここに思ひ出の一端を書いて見ようと思ひます。それを書くにつきまして、唯今其の頃の日誌を取り出して讀んで見ました。公私さまざまの思ひ出が夏の雲のやうに湧き出して胸一ぱいです。とても纏ま

りさうがありません。其の思ひ出の中に、はつきりと目の前に浮び出るのは、どつしりとした落ちつきのある煉瓦造の校舎の姿です。校庭には高いポプラの木が、いつも嬉しさうに葉をふるはしてゐました。私が終生忘れることの出来ない此の懐しい校舎に初めて對面したのは、其の年の四月三日、神武天皇祭の日でありました。

私は御影師範に赴任の事が定まりました時、非常な名譽を感じると共に強い責任を感じました。御影師範學校は光輝ある歴史を擔ふ學校である事を聞かされてゐたからであります。自分のやうな未熟な者が、此の名譽ある學校に赴任して其の職責が果せるであらうか、内心怖れもいたしました。併し其の時の校長は和田豊先生、教頭は岡田五鬼先生でありまして、兩先生とも新潟師範時代の恩師でいらされます。私が教育者の雛子として第一歩を、よち／＼と踏み出した時から手を取つて導いて下さつた先生方でありました。私は御影師範學校へ赴任するのではない。入學するのだ、兩先生が昔のまゝの御慈愛を以て教導して下さいは勿論、其の他の先生方も、私が従順に教を求めたならば、きつと導いて下さるに違ひない、かう思ひと力強い心持が致しまして、赴任確定の日から御影師範學校に強いあこがれを持ちました。その心持は嘗て新潟師範へ入學する前、東京高師へ入學する心持と、一脉の通ずる所があつて、しかもそれよりは一層の光明と希望とに満ちたものでありました。それですから其の時の生徒諸君は、私にとつて生徒として思ひ浮べる事が出来ず、どうも同窓生のやうに思はれ、又御影師範學校は私の母校のやうに思はれます。其の時五年後の級長が岩瀬升太郎君、廣瀬啓太郎君（これは私の記憶の誤かも知れませんが）で、一年級の級長は忘れましたが現在同僚である山本政治君がその一年生の一人でした。四年から一年まで 私の同窓生はみんな秀才ばかりのやうに思はれました。これはたまらない、愚圖々々してゐ

ては負かされてしまふぞ、かう思つて毎晩おそくまで下読みをした事が今でも思ひ出されます。かうして私は一年間御影師範學校で最も意義の深い教育を受けたのであります。

断片的な思ひを書いて見ますと、その頃學校は廣い田野の中に唯一廓を構へて、巍然と聳え立つてゐたもので、私は前にも申しました通り、此の學校へ生徒として御厄介になり來たのでありますから、寮の一室に、福田さん（附屬の訓導さんです）と一緒に置いて頂きました。初夏の頃には蛙の聲が夢を誘ふやうに聞えて來る――ああ、それにあの尺八の音、寮の二階の窓から、誰が吹いたのか、實にたまらない程の尺八の音が時々聞えしました。それは生徒の一人に尺八の名人が居たのです。ああいふ鳴物を寮で遊ぶ事は許されて居たのか、それとも隠れて吹いてゐたのか、隠れて吹くわけには参りませんから、やつぱり許されてゐたのでせう、それは此際問題ではありませんが、とにかく此の尺八の音は今も忘れる事が出来ません。

私は出不精であり外出は致しませんでした、湯が好きで毎日町の湯屋へ行きました。師範學校と云ふ山の中から此頃奇妙な怪物が町へ出るとでもいふ噂が立つたらしいのです。勿論御本人は少しも氣づかずに居ましたが、或日同室の福田さんが、此の頃町では師範學校の三奇人が一人殖えたと言つて居ますと言はれる。私は「その一人とは誰です」と聞くと、アハ、／＼と笑ひながら「大方先生の事だつしやろ」と言ふんです。どうも此の當らざる事甚だ遠き奇人説には私も驚きました。私は驚きの餘り其の一を聞いて其の三を聞く事を忘れて了ひました。三奇人は今以て分りません、惜しい事をしました。

明治四十三年三月の末になつて、急に東京へ歸らなければならぬ事になり、篤い御恩に預つた先生や生徒諸君

に別れる事になりました。僅かに一年間でありましたが、御影師範學校といふ立派な學校に置いて頂いて鞭撻を受けました事は感謝に堪へないことでもあります。創立六十年の光輝ある歴史が、此の後益々輝いて行きますやうに、心から御祈り申します。

回 顧 断 片

大阪府女子専門學校教授 前 田 正 民

○私の御影師範に在勤したのは大正六年五月から大正九年四月まで滿三箇年の間で、今更當時を顧みて懐しさに堪へぬものがある。

○赴任がきまつて岡田五鬼先生から、懐しく思ふとの御手紙を頂いたが勿論先生の御顔は知らず、先生も私を知つてはをられない。住吉驛で下車すると、木訥な中老の方がブラットホームへ出て居られて、前田さんちやありませんか、私は岡田ですといはれ、先生と知つて、全く恐縮するやら嬉しいやら、その時の氣持は永久に忘れる事の出来ぬ一つである。取りあへず高宮先生の舎監宅で泊めて頂いたのであつた。

○陰氣な北國から來て、のび／＼した生徒諸君の朗らかな氣分に接し、急に清新な氣を注ぎこまれた事は絶大な感謝であつた。

○あの英邁な和田校長の部下となつて、悠々と日を送り、柄にもなくラケットまで買求め、山鳥・永瀬・神谷・

高宮諸先輩の指導の下に、テニスコートで案山子役を勤めたこともあり／＼と思ひ出される。

○学校の運動會に、職員のリレーレースの仲間に引張り出され、生來走方の劣等生たる私が、他人のお蔭で入賞し、貰つたメダルは今も手許に記念となつて存してゐる。

○生徒對職員の野球仕合にまで顔を出し、特に此方面での劣等生なるが故に大いに人氣を博した事も思ひ出す。

○教務の方で出席調査の係を勤め、岡村先生や亡くなられた米野先生と相棒で、特にその御懇誼を蒙つた事も思ひ出される。

○外に格別事務の無かつた私は、その間に於て可なり十分な勉學の時を與へられたので、鈍いながら、曲りなりにも古典的な書を次々と讀了する事が出来た。これまた終生感謝に堪へぬところである。

○日常の小事件は寮長會議で處理されたと見えて、職員會議といふ様な事は、年に一度、修業卒業の成績會議があつただけで、平穩無事に過ぎてゐた。ただ一度、寮に日中失火があつた事は大きな遺憾事で、夢のやうに目前に浮ぶ。

○運動が盛んであつたが、向學心も随分旺盛で、檢定受験を目ざし、高級の研究を志す熱心家があつて、二三宅へまで押しかけて來られたのは嬉しい事であつた。

○私も何か少し纏まつた研究をしたいものと思つてゐた折から、生徒達の方から特別講義を始めてほしいとの申出があり、早速引受けて、先づ古典の代表的なものを片端から完結して讀んで行くといふ考の下に、毎週土曜日始業前三十分間、竹取物語、土佐日記などを講義し始めた。人數も十名内外のつもりであつたのが、我も

／＼と参加、百四五十名に達し、とう／＼講堂でする事になつた。今日のやうに手近な教科書もなかつたのと一つは經費をかけぬやうにとの婆心から、紙代と原紙代を出して貰つて、全部プリントにして用ひる事にした。輪講にするやうにしたらなどと思つてゐる中に轉任して終つた事は、申譯のない事であつた。

○右の講義は、當時の生徒諸君の熱に乗つてやつた事であるが、私も思はず感激の炎に熱したのであつた。その後數學の方も始められたといふ事を聞いてゐた。

○思ひ出すと、一つ／＼がまざ／＼と懐しく胸に蘇つて來るが、その中で特別に深く印象される以上二三の事を記して餘白を汚す事にする。昭和十一年二月二十九日

懐しき我御影師範の思出

陸軍歩兵大佐 松 山 李 友

天下の御影師範として赫々たる名聲を博し、約五千に近き卒業生を初等教育界に出して、國家社會に一大貢獻したる我御影師範學校も此三月柳芽吹く春に愈々創立第六十周年の記念式を最後として廢校せらるるとのことは洵に惜しみても餘りあることで、幾多多くの會友と共に返す／＼も残念に思ふ次第である。

之に關して多少の所感なきに非るも、今更申しても仕方がないから書くことを止めて、私が第二代目配屬將校として昭和三年四月より同七年四月迄滿四ヶ年間、お世話になり其間自分の教子で卒業されたる約九百名の卒業

生諸君が現教育界に於て花々しく活躍奮闘されつゝある點に對し心から敬意を表すると共に重大時局に鑑み將來益々健闘せられんことを此機會に於てお祈りする次第である。

次に私が懐しき我御影師範の思出として一生忘れる事の出来ない二つの事を若干述べるのも亦先輩客員や會友諸君に見て頂くのも共に母校に對する敬愛心の發露と信じ敢て拙筆を走らした所以を先以てお断りして置く。

懐しき思出の其第一とは何か。曰く聖教育家岡田五兎先生のことである。私は母校に岡田先生と云ふ大先生のあることを全く承知せず北海道旭川から遙々千十哩の御影に赴任して來たのであつた。着任早々前服務高木中佐殿から「岡田と云ふ先生は立派な人格者だ」と云ふ極めて簡単な話は申送之際承つたが、斯く迄立派な全國に稀な聖教育家であるとは當時夢想だになかつたのである。所が毎日／＼教務室で四ヶ年机を隣して先生の温顔を拜し親しく其言行に接し公私格別の御温情と御指導とに浴してからは全く父の如く又恩師として親しみと尊敬とを心から拂ふに至つた次第である。自分の如き修養不十分の者が奥底の知れない先生を批評することは却て先生の眞價を傷ける虞が多分にあることと恐縮してゐる次第であるが、私の終生忘れることの出来ない思出として先生のことを書かざるを得ないのである。

現在兵庫縣に於ては最も忌むべき教育疑獄事件が発生して世の識者を震憾させてゐる。勿論全智全能でない人間である限り多少の過失は免れないとしても苟も人間を善導すべき大責任を有する者が法に觸れる如きは甚だ恥すべき事であつて假令社會一般の惡風潮が如何様であるにしても教育者たる者は毅然として節操を全くしなれば相成らぬと堅く信ずる者である。宜しく世の教育者たる者聖教育家岡田先生を學ぶべしだ。先生は素より學識

も高く經驗も深き哲學者である。然し先生の偉大さ即眞價は決して其學識や經驗を指すのでない。其完成せる人格である。實に神の如く佛の如く廣大無邊と申すべく之を一言にして云へば即「愛の結晶」と申すべしだ。換言せば先生は「教育勅語の權化」であつて其言行は總て勅語の御精神に合致してゐるのである。先生には名譽も入らない。富も入らない。命も入らない唯神と一致すべき御理想のみであると私は見てゐる。之が先生の偉大さであり眞價であるのだ。先生の口より出する言葉も日々の行も皆其御理想の表現に外ならぬのである。少くも先生を知り先生の教を受けたる者は先生の此偉大さ此尊さに感激し同化され乍不及も之をお手本として修養鍛鍊せなければ先生に對する鴻恩の萬一に酬ゆることは出来ないのだ。世間多くの教育家が何等の理想もなく（失禮な申し分だが私には斯く見へる）教育を一種の職業と心得學問や知識の切實をなし自己の天職を忘れ一圓にても多くの月給に有りつかんとし或は他人を排除しても自己の榮進を希ひ手段を選ばずして暗躍を試みんとするが如きは實に許すべからざる罪惡にして自ら神聖なる教師の體面を冒瀆せるものと云ふべきである。

親愛なる會友諸君よ、教育程神聖にして永久不滅の偉大なる事業はないのだ。克く之を理解せられ所謂富貴に淫せず威武に屈せず自ら省みて直くんば千萬人と雖我住かんの概を以て常に理想に生き小岡田を以て任じ道義日本に要する堅實なる次代國民の養成に一路邁進せられんことを希望して止まない所である。

懐しき思出の第二とは何か。曰く會友諸君から恩師岡田先生に謝恩記念として住宅を贈られたる美舉である。聞く所に依れば先生の教子約三千餘名の士は薄給の身から三圓、五圓と云ふ零細な醵金をして其總額實に一萬數千圓に達し地を風光明媚なる魚崎横屋の勝地に卜し先生のお住に相應しい質實剛健なる新築を完成して贈られた

ことである。何と云ふ美しき事であるか、誰が聞いても感心しない者は絶無だらう。個人主義や自由思想に迷ひ歐米の物質文化を謳歌する我利我利盲者の多き現世相悲しきことながら武士道的精神は地を拂ひ、人情紙の如く薄き此社會相に於て獨り我御師會友諸君の此美學は實に一服の清涼劑として義理人情の美しさ尊さを我國家社會に垂示されたるものとしては私は衷心から感激と敬意とを禁じ得ない一人である。現社會には義理も人情も弊履の如く顧りみざる喇口者と云ふか否大馬鹿者が誠にいやな程多いのである。

世界無比の冠絶せる我國體に生を享ける皇國民は第一に君恩、第二に父母の恩、第三に師の恩、第四に社會の恩、即四恩を忘れてはならないのである。而して乍不及も日夜此四恩に酬ゆべく反省努力精進を続けねばならぬ。之が出来ないでどうして生甲斐のある人生が送れると云へるか、之を思ふ時多くの會友諸君が師恩に酬ゆべく協力一致の此大美學は洵に〳〵有意義な世間稀な結構事として私の終生忘ることの出来ない「岡田先生と教子」「岡田先生大人格の反影」として常に敬服感激してゐる所である。以上二つが懐し御影師範の思出として今尙新きしく記憶に存し終生忘れ難き烙印を私の心深く刻んでゐるのである。

嗚呼我が敬愛する御影師範は齡六十にして廢校せらる。思へば思ふ程慕情に堪へない。假令其校名は消ゆとも過去に残せる救々たる功績と永年培養せられたる傳統的精神とは必ずや新設せらるべき兵庫縣師範學校に傳承せらるゝであらう。否傳承させなければならぬ。茲に創立六十周年の記念號を發刊せらるゝに方り一面悲哀を感じつゝ他面新なる希望に燃えつゝ聊か所懐の一端を披瀝していつ〳〵迄も懐しき母校思出の資と致したいのである。

(附記) 小生事伊丹町字櫻ヶ丘に永住の覺悟にて尻を落ち着きましたから御通過の際は御立寄り下さいませ。

神戸時代の面影

回顧 明治十三年卒業 平井慶次

六十年前の少年に立ち戻りて其の體驗せし事實を喚起せしも材料頗る貧弱にして山の賑ひにもならぬ朽木の如く然り而れども義會の要求に應じ貧弱なる回顧を左に録することとなせり。期日經過の今日たるを以て没稿にせらるれば却て寧幸甚。

明治十年春西南戦争のありしとき本縣下各師範學校にて生徒を募集せられしが創立以來日淺くして應募人員甚少く止むを得ず十八歳以下十七歳、十六歳、甚しきは十五歳の數へ年の者迄も試験の上入學を許可されたり。吾々は其の甚しき一人なり。此くして數月ならざる中に師範校を一にして、神戸師範學校に合併せらるゝ事となれり。乃師弟數十人車を飛ばして神戸に向ふ。當時の交通としては汽車は東京・横濱間、京都・大阪・神戸間のみ其の他は車道又は人道なり。故に此の行三日二泊を要せり。

神戸元町に假用校舎(元の傳習所)あり、そこにて合併試験を行はれ其の結果年齢十八歳以上のものは元の級に止め年齢長じて學力佳良なる者は上の級に進め又十七歳以下の者は成績の如何を顧みずして今度限り特に豫備科一級を設けてこれに編入せられたり。故に吾々の級は終始最小年級にて在學年數二ケ年以上を費したり。

師範學校の修業年限は二ケ年にして半年毎に進級す。最初は四級に入學し、三級、二級、一級と進み、一級を卒りて教員となる資格を得、今日は別に免許状を交附せられざれば任用せられざる規程と大に異れり。

これより前方下山手通五丁目を卜して新に師範學校を建築せられつゝあり、竣工は暑中休暇後の豫定とす、校地は縣廳を去る西北數十歩今の高等女學校の敷地の一部にして四圍全く廣漠たる田野なりし當時の神戸は北は縣廳花隈長狹通橋通以南海岸迄東は三の宮を限り西は湊川を以て兵庫に接す。而も神戸港は汽船の碇泊常に三四隻に過ぎず。

合併後元町の假用校舎にては狹隘に依り榮町郵便局をも服用せらるることとなり、一部分移轉したるも授業開始を俟たず西南戦争の傷病兵を收容せらるゝ事に決定せられたると虎列刺病流行の爲暑中休暇を早め且つ延長せられたり。此くして愈々新築校舎に移りたるは九月上旬とす。

寄宿舎は本校の北と西部とに建設せられ東は附屬校に接し北は運動場たり、其の舎監は在校生にて拔擢せらるる事に改まり巽砂芳太郎氏、大谷竹吉、古塚莊三郎の諸氏其の任に當れり。

在学中の諸先生は山宮竹次、神矢肅一(校長心得)、土屋甚四郎、天野峻(校長)關谷清景(理科、後年地震研究の泰斗)前田吉彦(圖畫)永沼小一郎(理化)、伊藤正信、村田百合助、横瀬文彦(校長)、稻本海關、服部純吉岡尾某其の他數氏にして待遇は月俸十五圓以上三十圓位迄長は四十圓以上なり。

此くしてこの最少年なるクラスは明治十三年一月二十八日を以て第四回目を卒業し其の大部分は教育に従事することとなり。月給七圓乃至十圓以下の範圍にて教員たる契約をなしたる者の如く又某々は直に笈を負ふて東京

に遊學し或は私事を以て校事を辭せしものもありき。而して六十年後に於ける吾人は唐詩に謂ふ所の左の二句十言を以て完結するものとす。

宿昔青雲志 蹉跎白髮人。

回顧

明治十五年七月卒業 阿部市作

學校に關すること

特殊の研究會

學生の政治研究

私の少年時代神戸師範學校入學前には姫路市に於いて學生間に政治演說會を開いて居りました。それは明治十三年春頃の事でありませぬ。聞けば神戸師範學校に於ても政談演說會を生徒が主體となつては學校の講堂に開いて居つたそうです。それが集會條例の發布によりて一切こと止みとなつたのであります。

集會條例は明治十三年四月に發布せられました。當時政治熱の勃興は非常なものであつて停止する所を知らな

集會條例によると軍人軍屬。學生生徒。官吏教員。神官僧侶。幼少年及婦人は公衆に對して政治を講談論議することを禁じ又政治を講談論議する場所に立入ることを禁ぜられた。

當時關西にては京都の同志社の生徒が此の禁を犯して罰せられた事があつた。

此の集會條例の効力は塵の立ち揚がる場所に水を打つた様な心持がしました。

これからは學生生徒の研究事項がころりと變化して専ら學術方面に向ふ様になつたのであります。

私は明治十三年九月に神戸師範學校に入學しました。毎月とは云はないが三箇月に一度位は學校の講堂で學術演說會を開催して居りました。發起者は生徒が主體となつて辯士には鹿島秀麿、箕浦勝人、大江馨江、安部清五郎、甲斐織江等の諸氏のあつた事が記憶に残つて居ります。

五十餘年前甲斐織江神戸商業講習所長(縣商の前身)が師範學校の學術演說會に臨まれて、紙を透明體に造ることが出来たならば如何に文化が増進するであらうかと演說せられた。ああセロファン又(トレーシングペーパー)今日にては小學校の尋一兒童もそれが何珍らしいかと笑ふであらう。五十餘年を隔つると中等學校長の疑問が尋一兒童の笑と化する事を思つて今昔の感に耐へられぬ。

學問研究として風船はあつたが、飛行機のことには口に云ふものも無かつた。

石油燈時代であつたが、舊居留地に限り瓦斯燈を點じて居つた。彼等の文化の誇を目の前に見せつけられて居つた。電氣燈のことは白金線燈が唯一基のみ物理學新室の器械棚にあつたのを見受けた。

舊居留地には各國領事館があつて治外法權を振り廻して居るから神戸の土地には領事裁判が行はれ神戸裁判

所の判檢事は國際問題になると指を喰へて見て居られた。明治三十二年六月條約改正實施まで。

兵庫縣知事伊藤博文氏が舊居留地を埋立てして出來上るだけづゝ競賣に附して外國人の手に地所を賣り渡された。居留地明石町には行司局と云ふ警察署があつて英國人を主席として、警備に任じて居つた。伊藤知事のこの大失政この大失體、他地方に類例のない事である。五萬の神戸市民は西洋館を御屋敷と敬稱して幕政時代の大名旗本の御屋敷に敬意を拂ひたると同様であつた。

書生は天下の暴れものと云ふ諺もあるが學生の意氣は市民の事大主義とは反對であつた。それを標榜する爲に當時流行の書生流行歌の一篇を掲げて擲事する事とします。

神戸書生流行歌

本題の文句

「神戸諏訪山から 神戸の繁華を眺望すれば 神戸は繁華でよけれども 異人の跋扈を見る時にや

切齒扼腕慷慨する」

囃子の文句

「かい。かい。盡して言はうなら 大きな貝なら法螺の貝。小さい貝なら蜆貝。 當時はやるは懇親會。 又もはやるは演說會。 國會開設まだのかい。 戦するかい。死ぬるかい。 倒れて止め止め夢でくでしく」

合唱したるなん名倉健三郎君は二十四五年前に冥途に先立たれた。

右は五十餘年前の神戸の學生の流行歌であつた。今日の支那學生の意氣に似通つて居る點があるではないか。

今日の支那學生は北平に天津に南京に上海に國政の改善に熱狂して居るのである、恰も五十餘年前に我々の取つた政治熱に狂奔した態度と同一の事をして居るのである。支那の文化と日本の文化との間に五十餘年の開きがあると解釋すれば疑問は氷解するのである。

「時は萬事を解決する」

報告者の履歴

明治十九年卒業 佐藤健吉郎

小生は郷里尼崎に生長し幼にして尼崎小學校に於て所定の學科を修め稍長じて同郷の人威卿内田頼重先生に從ひ思齋書院に漢學を學び研究する所あり、明治十七年七月神戸師範學校に入學し規定の學科を修め同十九年七月制定の學科を履修し卒業の後尼崎尋常小學校訓導に任命せられ尋て尼崎高等小學に轉す。

明治廿年九月 尼崎高等小學に自ら採蒐せる金石標七拾四種を寄附せるにより兵庫縣知事より褒狀を賜ふ(兵庫縣)

明治廿三年四月 義務教育を了へ大阪市北區第一盈進高等小學校訓導に轉す、爾來十六ヶ年間同校に勤績す、同卅九年一月大阪市松枝尋常小學校長に任ぜられ同月負擔區學務委員を命ぜらる

明治三十六年十月 文部省より小學校教員普通免許狀を授與せらる(文部省)

同四十一年七月 松枝校の東隣莫大小工場より失火し直に學校に延燒し北區の過半を燒く、所謂北區の大火なるものなり

同四十二年三月 多年小學校教育に従事し成績優良なりしを以て金參拾圓を賞與せらる(大阪府知事)

同四十四年七月 本區教育に對する二十有餘年の功勞を多とし茲に銀杯一個を贈呈し以て之を表彰す(北區教育會)

育會)

大正四年十一月 大正四年勅令第五百五十四號の旨に依り大禮記念章を授與す(賞勳局總裁)

大正七年十月 勳八等に叙し瑞寶章を授與す(賞勳局總裁)

大正八年五月 學事視察の爲め朝鮮滿洲支那へ出張を命ず(大阪府)

大正九年三月 松枝青年團を創設し副團長に任ず(大阪府)

大正九年四月 大阪府大阪市松枝實業補習學校長に兼任す(大阪府)

大正九年六月 北區教育に従事すること三十年有餘に及びし廉に因り北區教育會より表彰せらる(北區教育會長)

大正九年八月 一級上俸支給(一八〇)

大正九年十月 第一回國勢調査に従事せる廉に因り市長より感謝狀を受く(大阪府)

大正九年十月 多年初等普通教育に従事し功勞尠からず依て銀盃壹個を賜ふ(賞勳局總裁)

大正十年四月 帝國在郷軍人會松枝分會顧問を囑託す(帝國在郷軍人會總裁)

大正十三年六月 月俸貳百圓支給(大阪府)

大正十三年十一月 大阪市教化委員を依囑す(大阪市長)

大正十四年八月 國勢調査員を命ず(内閣)

同年同月 失業統計調査員を命ず(内閣)

大正十五年四月 學事視察の爲め支那へ出張を命ず(大阪府)

昭和二年二月 月俸貳百貳拾圓支給(大阪府)

昭和二年三月 月俸貳百四拾圓支給(大阪府)

和年二年三月 小學令施行 規則第百廿六條第 號前段に依り退職を命ず(大阪府)

昭和二年三月 願に依り兼職を解く(大阪府)

昭和二年三月三十日 在職中職務格別勉勵に付金五千貳百圓給與せらる(大阪府)

松枝負擔區會の決議により金參百拾圓を加給せらる(同上)

昭和二年六月恩給法に依り年額壹千八百七拾參圓を支給せらる(大阪府)時に年六拾四歳なり

誠に天恩の忝きに感泣す。

● 昭和二年三月末退職述懐

四十餘年事育英 無功無過覺心平

偏歡恩澤疎枯骨 樂道悠々保老生

咏松賀松枝小學校新築落成

勁節堅心護序庠 經年六拾傲風霜

期他異日良材就 寄與邦家作棟梁

昭和六年二月武庫川停留所の東南一丁餘の地に一家を建設して住家とせり、地は川沙を以て埋立てたる水田地なれば一木一草の觀るべきもなく轉た寂寞を感じり。然るに佐藤會員等十數名寄寄り相謀り遂に東山の生駒石及日下の石燈籠を運び來り以て庭園を賑はし曩日舊藩主櫻井子爵より賜はりし五葉松の根元に据へ置きたり。因て返禮として各人に一詩を認めて之を贈る。偶々詩友豊田泰山氏來り遊ぶ、之を見て左の一詩を賦す。

舊主賜恩松幾株 雲根移石是門徒

爲斯石上松陰客 楣遍誰題德不孤

(中橋徳五郎筆)

豊田泰山 (元北區實科高等女學校長)

昭和十年九月、五十餘名の佐藤會有志は、三十餘年前の舊誼を懷想し、私の爲胸像を作製し以て之を贈れり、嗚呼何たる愛情の麗はしきぞ。洵に誠意の深きに感激せざるを得ず、是を以て之を見れば大阪人士の必ずしも人情の薄きに非ざることを知る。

或時親睦會あり、席上偶作左の一詩を賦す。

席上偶成

夙作燈臺下石拳 育英四十有餘年
出藍才子多伸志 恰似光明耀滿天

母校先生の餘光

横地石太郎先生は、物理及化學に於ては造詣深く、簡易機械の製作に妙を得たりと謂ふべきか。實驗を主とし理論之に次ぎ、説述する所頗る至る。將來私の教壇に立つて教授する上に於て先生に負ふ所のもの頗る多し。先生の鴻恩幾多の人士に及べるも、蓋廣大と謂ふ可きか。彼の大道や川上の藥學校や大學に入學せしも、全く先生の御恩と云はざる可らず。又望遠鏡を備付け天體の説明を聞きしは新知識を得たるものと謂ふべきか。又三橋先生は該博の知識を以て博物科を受持ち、又管理教育を擔當し、又首席として校務を掌る。屢々犬の解剖の實驗を爲し得る所頗る多し。又校務を處理し改革する等功績亦偉大なりと謂ふべし。前記峰内の北野中學や京都繪畫專門學校を卒業し、松代の洋畫に優秀なるも母校圖畫教師前田吉彦先生の餘澤に因るものか。

鹿兒島の風景 (石關寛之氏集抜粹)

神戸師範學校に私が入學したのは、明治十六年の三月であつた。入學前親しく交つてゐた宮下貞次郎氏を誘ひ共に受験に往つた。當時未だ汽車便の無い時で、姫路から神戸に來るのに一日を費した。入學當時講堂には福岡文部卿の教員心得が正面に掲げられてあつた。校長は山宮竹二先生であつたが間もなく退職になつた。時の兵庫

縣廳は知事が鹿兒島の人森岡昌純氏で、維新の功勞者三條實美卿とも親しみがあつたさうで、當時縣廳や警察には鹿兒島人が多かつた。學務課長久保春景氏は仲々士氣旺盛で、此の人が暫く校長を兼務せられ、其後川上彦次先生が月俸二十圓の御用係から一躍して四十圓の専任校長に任命せられたのであつた。

川上校長は初東京築地の外人學校に英語を學び、後留學生として上海に居られた事もあり、姫路軍隊の清國語教師をせられたこともある。久保課長も川上校長も森岡知事の眼に留つて甚だ低い處から異數の昇進をされたのである。先生は一意専心校風の改善に努められ、英斷を以て從來の教諭を其儘として、其上に中學師範卒業の三橋得三先生を聘して教頭とし、東京帝大應用化學科新卒業の權横地石太郎先生を聘して教諭とし、この新來の兩先生には受持時間も多くして大いに教育の刷新をせられたものである。從來の教頭教諭の上に二人迄も新進氣鋭の人を新任するといふ事は、校長も新任者も餘程の手腕家でなければ出來ない事だ。其頃文部大臣は森有禮氏で校紀を振肅するために、兵式體操を學生々徒に課し、高等師範には陸軍少將山川浩先生を校長に任命せられた頃であつたので、昔の漢學塾生風の學生生活は、次第にその規律を緊張する時代であつた。寄宿舎には入學當初舎長といふものがあつて、上級の優等生森本清藏、平岡好松の兩君が勤められて居り、吾々の監督と保護の任に當られて居た。其後舎監制度となつて、福岡の人久田道氏が就任せられた。此人は同人社の卒業で英漢の學に通じ漸く熟生風から今日の様に改まらんとする時であつたけれども、矢張木綿袴と云ふ服装で外形甚だ不規律なものであつた。夜十時には消燈就寢する事になつてゐたが、でも同級の優等生金尾辰治郎君の如きは、身體が健康だから夜半に眼があくと、直に起きて勉強した。高橋正之助君は押入の中に這入つて勉強してゐた。私は當時體が

弱くて眞青の顔をしてゐたので、度々校長から衛生上の注意を受けた。其頃同級の者が二三人學校で脚氣病などで死亡するものもあつたので、體操には最も力を用ひ、夜も消燈後に勉強する様なことはしなかつた。それで體操はいつか私が一番上手になつてしまつたので、何時も教師に代つて私が號令をかけたものである。處が森文相が視察に來られ、辻次官が來られた時も共に私が號令を勤めたもので、今から見れば何でもない事だが、當時珍しい兵式體操を其施設せられた當該大臣や次官が視察せられたので、學科の方をあまり勉強しなかつた私の何よりの光榮であつた。尤も兵式と云つても銃を持たず、和服に袴をやつたので不完全な感じがあるが、それが最初の兵式であつたのである。又科外に弘道館記述義の論講會があつた。之は水戸の藤田東湖先生が勤王の精神を鼓吹する爲に述べられた漢文の小冊子である。西郷隆盛が少壯時代藤田東湖を水戸に訪ねて、東湖の人格識見に感化された處が多かつた。川上先生の令弟は十六七歳の頃私學校に居られ、西南の役には西郷の部下として共に戦死せられた。先生は直接西郷の教育は受けられなかつたけれども、西郷は鹿兒島人敬慕的であつたので、一言も西郷の事を云はれぬけれども、其初に遡つてこの書によつて忠君の精神を養はれたものであらうと思ふ。其論講會の時分には、久保課長、久田、藤島兩舍監なども臨席せられ、生徒中にも漢學には相當に通じてゐたものもあつたので、盛に議論の花を咲かしたもので中々壯快なものであつた。誰か「孔子ノタマハク」と云つた處が、久保課長は「天皇ノタマハク」でなければならぬ。(孔子イハク)でよいと云はれた。これは山崎闇齋が今の腐儒は孔子を大將とし、孟子を副將として攻め來たなら、一も二もなく降参してしまふであらうと喝破した慨がある。藤島舍監は矢張福岡の玄洋社の壯士といふ觸込みで就職した人であるが、何となら亂暴漢の様に見える

人であつたが、實は漢學と擊劍に通じた好人物であつて、吾々は毎々此人に擊劍をつかつて貰つたものであつた。かく川上校長の連れて來られた三橋、横地兩教諭、久保、藤島兩舍監は何れも有力な人であつて、此の人々によつて神戸師範は非常に面目を改めたのである。

又、野太刀自顯流と稱する擊劍の先生藥丸氏四名を鹿兒島から聘して其擊劍を教へられた。之は丁度源義經の鞍馬山で自脩した擊劍の様なものでは無かつたと思ふ。前に私は度々校長から衛生の注意を受けたと云つたが、藤島舍監が「石關さん、やらうじやないか。やらうじやないか」と云つて擊劍をやる爲に誘ひに來られ、荻野君などと共々に擊劍をやつた事や、久田舍監が、「石關さん、體操を教へて呉れ」とて共々に體操をした事などは私や荻野などに對する親切なる個性教育であつて、當時私は十七歳、弱い乍らにも病氣に罹らなかつたのであると思ふ。又私はあまり學業の成績が善くなかつても、各教諭が誰も勉強せよと云はれた人も無かつた事を思ふと嚴格なる教育の内に極めて親切なる精神が含まれてゐた事と思ふ。或時三橋先生が犬の解剖をして見せられたが其時は森岡知事も見に來られた。斯く三橋、横地兩先生、及其他の先生によつて最新の知育をせらるゝと共に、弘道館記述義等によつて精神教育もやられたものだから、吾々時代の同窓は皆水戸學風と云ふべきか、鹿兒島の學風と云ふべきか。東湖先生や維新の元勳の精神を間接ながら養はれて居たのであつた。さうして文部省を初として他府縣に於ても、神戸師範が卓越してゐる様な噂があつたと聞き及んでゐる。故に造士館長島津彦男なども數名の隨行者と參觀に來られた事もあつた。島津さんは長髪で洋服であり、隨行人にはチョン髻に羽織袴に靴と云ふ人も見受けた。吾々は十八年七月に卒業したのであつたが、果然其後間もなく川上校長は文部視學官に

榮轉せられ、三橋先生は川上校長の後任校長に、久田氏は高等師範の舎監に榮轉せられ、森本清藏君は選抜せられて高等師範學校に入學せられ、君は此處でも一番で卒業し益々優秀の成績を示された。さうして當時の神戸師範學校卒業生の價値を高められた者である。後に川上校長は郷里鹿兒島の高等中學造士館長に榮轉せられ、横地さんも同様に教鞭を採られ、次いで山口高等商業學校長に進まれたのであつたが、之等は吾々の卒業後の事であるから此位に筆を止めて置くが、吾々は一校長名教諭の行届いた教育を受け、今日から見れば實に贅澤な程で皆立派に人格を造り上げて貰つた筈である。

横地先生懷舊談（石關寛之集抜粹）

私が神戸師範學校に就職しましたのは、東京大學を卒業しましてから間もない明治十七年の八月、二十五歳の時であり、同僚中の最年少者でありながら徒長よりも俸給は二三十圓も高く、諸教員の首席へ据へられて心苦しい思をしたが、借教室へ出て見ると、其頃は生徒の入學年齢は二十一年以上であり、且數年間教員をしてゐた生徒も少からざりしが故に、自分より年長の者も多く、中にも富岡昌造と云ふ生徒の如きは三三四であり、此席に居られる倉賀野君の如きも略々私と同輩で、しかも堂々たる體格の方であつたから、此様な連中を相手にして教壇に立つのは何だか氣まわりが悪いやうな心地がして夫に又間もなく縣下教員の講習會が開かれ、此中には白髮禿頭の者も少からず、最初は其の様な老人から「先生、先生」と呼ばれるのは實に恥かしい様な思をしたが、幾くもなく其學力の程度も分り、幼稚な質問をするので此方は次第に大膽得意となり、先方は理學士は何でも知つて居るものゝ様に想ふたのか、種々雑多の質問をする様になつたから、遂に課外に「何でも来い」と云ふ時間

を設けて満足を與ふる様にした。質問は多くは天狗、幽靈、狐付、鬼、夢、化者、火の玉、雷獸、地震、化石、流星等の類であつたが、中には藁で海鼠を結ると解ける譯や、青い澁い柿が熟すると赤くなる理なりを問はれたのには少々明確な答をなすに閉口した。兎に角知識欲の旺盛なるには感服して、遂には太陽熱の原因、星雲説、論理學の一斑等までも話したことがある。殊に理化學實驗には非常に興味を有して居つた様であつたから、貧弱なる設備を補ふ爲に往々自製の簡易機械を以て實驗した事もあつた。或講習生の如きは寫眞術に熱中して遂に教員を罷めて寫眞師になつた者すらあつた。學校の理化學機械の設備は實に不完全極まるものであつたが、其中の一つ此様な立派な機械がどうして此處にあるのかと驚かしたものがあつた。夫はフワインダー付の大なる天文學用の望遠鏡で、常に二階のバルコニーに据へ付けられて職員生徒が港に入る來る内外の汽船軍艦の名を讀む爲に用ひられて居た精巧なもので、空氣の澄んで居る時は大阪川口に掲げられたる牛肉屋の旗までも明かに見る事が出來得る程であつたから、私の宿直の晩には屢々之を運動場へ持出し、月の面や土星の輪、衛星其他諸遊星を寄宿舎の生徒に見せて説明した。斯る善良なる望遠鏡がどうして此學校に傳はつたものであるかを後に調べてみたら、明治七年十二月九日、金星が太陽の面を經過し、夫が本邦に於て見るので當時佛國のバリーの理科大學の星學教授ゼ・ジャンサンと云ふ學者が助手ドラクロワと云ふ者を伴れて夫を觀測の爲態々佛國より出張しに神戸の諏訪山に於て金澤人清水誠、明治三年に佛國に留學しジャンサンに聘用されて右觀測の助手となり、歸國して同年單獨で東京本所に新燈社といふ本邦最初の燐寸製造所を起し、同十三年始めて海外燐寸の輸入を全然防遏したる人と共に觀測し、好成绩を得たる謝禮の爲、其時使用したる望遠鏡を兵庫縣へ寄贈し、當時の同縣神田孝

平氏が之を師範學校へ保管轉換せしめたのである事を知つた。實に我國天文學上に貴重なる記念品である。ジャンサンが觀測せし場所は諏訪山の金星臺にて、當時記念の爲設置せし碑が今尙其處に現存して居り、和佛兩文で其事柄を碑面に刻し、其上に太陽面を金星が經過した通路を示す圖も刻してある。此現象は極めて稀有なる出來事で、私も當時郷里金澤に於て外國人教師に教へられて、油煙を掛けたる硝子板で肉眼觀測した事を記憶して居る。明治十七八年頃と云へば、まだ活動寫眞等は勿論なく、幻燈位が珍しい時代であつたから縣廳に請求して之を一組購入して貰ひ、一夕講堂に於て寫し初をすることになつた。之を聞いた當時の知事内海忠勝氏は家族や屬官連で見に來たので、幻燈計りでは餘り物足らぬ心地がしたから映畫の合間に色火を燃したり、化學實驗をしたりして大いに喝采を博したことがあつた。

之等四十餘年前の事を追想すると、實に隔世の感に勝へぬのである。爰に諸君と相會する好機會を得て、斯る追想に耽り樂しかりし舊時を語り合ふは私の最も欣幸とする處であります。

回 顧 錄

明治十九年卒業 倉 賀 野 胤 正

私は幼時父を喪ひ、母と祖母とに養はれて居つたので、東京へ遊學の志望を達する能はず。郷里姫路で漢文習字數學等を修め、檢定試験を受けて中等小學校教員の資格を得、十六七歳の頃から、小學校教員や校長を勤めて

居りましたが、實は當時兵庫縣神戸師範學校卒業生は皆中小學校教員の資格で、高等小學校教員たるべきものは、僅に東京大阪等の官立師範學校卒業生數名でありました。又高等小學校教員の檢定試験に合格するものは絶無といふべき有様につき、私も決心し郡薦生として遂に御影師範學校の前身なる神戸師範學校に入學し、三年の課程を二年半在學して、明治十九年夏、高等小學校師範學科を卒業しましたが、同級生八名の中で、今は私が獨り生存して居ります。今回御影師範學校創立六十周年記念式舉行に際し、回顧録を書けとのことにつき、此文を草せんとして、そゞろに往事を追懷して、感慨無量なるものがあります。今私は大日本古典會大日本健康會などで、常に百年長生説を唱へて居り、こゝに七十五歳の新年を迎へましたが、次第に舊友が死に行くのを見て、何となく心寂しく感じ、百年長生また難いかなと嘆息することもあります。毎朝早く六甲山麓の上人山に登つて神明を拜し、正身端坐鎮魂法、藥丸流、體操等を行ひ、ひたすら養生を勵行し、爲善最樂との格言を守り、何とか百年まで長生して、幾分にも國家に盡したいと思つて居ります。

卒業以來、既に五十年を経過せる事とて、神代選として考ふべからざるものあり。たゞ當時の記憶を辿りて、左の通り認めて、其責を塞ぐことゝ致しました。

さて大日本古典會は 明治天皇の

いそのかみ古きためしをたつねつゝ、

あたらしき世のこともさためむ

との御製に基いて設立したものです。今此文も溫故知新の意味にて、來る四月より新設せらるべき、兵庫縣師範

學校は勿論、其他一般教育者は勿論、一般有志諸賢の参考に供する積りで起草したものであるから、幸に少しでも世に利益を興ふことを得たならば、満足に思ひます。

一、當時の國語科は單に形式的であつた。

當時の國語科は不十分で、たゞ形式的に存在したもので、擬古文などを集めた、二三の讀本を讀んだ位で、國語の眞價を發揚する程のものではなかつた。ことに國文法はかの語彙別記にて教へられたが、私は從來國文法の素養がなかつたので、動詞助動詞の活用などは、はつきり判らなかつた。卒業後姫路高等小學校に奉職中、國漢文講習會を開き、國語は春山弟彦先生を聘して、土佐日記、源氏物語、國文法等、漢文は龜山雲平先生に頼んで、書經の講義を聴きました。姫路高等小學校が東西二校に分れしを以て、明治三十五年伊丹中學校に奉職して國漢文習字を受持ち、専ら國文法を研究しましたが、明治三十七年文部省國漢文檢定試験の口頭試験には、簡易な小學讀本を出して、種々國文法を問はれ、少年の時よりの素養がなかつたので、咄嗟の應對に一寸まごついたが、漸く僥倖で合格しました。序に相當立派な教育者等から、手紙などをもらひますが、國文法などの間違つて居るものが随分多いから、師範などでは、しつかり國文法等を教へこみ、漢字の點畫なども正確に練習しておく必要があると思ひます。更に師範學校では徒然草、枕草子、古事記、萬葉集、古今和歌集、源氏物語、祝詞等の全部又は拔萃を教ふる必要があると思ひます。是等が大日本精神作興の根元となるものでもあります。

二、當時は割合に漢文科が盛んであつた。

明治十六七年頃の生徒は、入學前に既に日本外史、十八史略位を讀んで居つたものが多かつた。私の同級であつた篠山出身の安間銀次郎氏などは、朝夕よく明治維新の志士雲井龍雄の、キヤヘニ生當雄圖蓋四海シフカイなどの詩を朗吟したものです。學校でも舊藩時代に漢字を修めた方が教師を勤めてをられた。私は入學前に少しは漢文を讀んで居つたので、教科書の文章軌範などの試験問題には別に苦しまなんだが、支那歴史に通鑑要などの相當大部のものが教科書であつて、例の漢文の先生が歴史兼務で、餘りに有名でない人名などを問題に出されるので、漢文の素養の乏しかつた生徒は、随分閉口したものであつた。又舊篠山藩の老儒渡邊弗措先生を聘して、校長教師などが列席して、論語の講義を開かれたこともあつた。夜間には川上校長久保學務長などが來校せられて、生徒と共に藤田東湖氏の弘道館記述義の輪講などを開いて、精神修養には相當に効果があつたと思ふ。當時小學教員の講習會などにも、弘道館記述義を教科書として、討論研究が随分盛んであつた。今日の所謂國體明徴などには、此書を講明する必要があるから、師範學校其他教員講習等の教科書にも、此書を採用すればよろしからうと思ひます。又當時小學校にも中等科には近古史談、高等科には十八史略を讀本に用ひ、貝原益軒先生の初學知要を修身に使うて、隨分漢文の書が行はれて居りました。

いつかも徳富蘇峯翁が、今日の青年等には漢文を讀ませるがよい。修養に益があつて、思想も堅實になるといはれたが、私も同感であります。十八史略などにある揚震の四知とて、震が推舉した王密が、夜中金を懐にして震に遣つて、暮夜なれば知るものなしといふたが、震は天知る地知る我知る子知る、何ぞ知ることなしと謂はんとて、賄賂を受けなかつた有名な話がある。教育家は勿論一般の人々も、かく清廉であらねばならぬ

と、今日の時勢を見て切に感ずると同時に、教育者にも漢文の智識が必要と思ひます。是を以て私は師範學校等では、せめて日本外史、十八史略、四書、唐詩選、其他漢作文作詩法の一斑位は、何等かの法で教へておく必要があり、又小學校教員諸君にも漢文の研究講習を御勧め致します。

然るに徳川時代の漢學儒學には研究に實行が伴ふて居つたものであるが、今日の漢文はとかく訓話の學に流れて、字句の詮索とか事實の考證とかに力を入れて、學問は學問、實行は實行と兩者相離れて、所謂知行合一の意氣に乏しいのは嘆息に堪へぬ。又儒學は山鹿素行氏の學風の如く、之を大日本精神的に説明研究すべきに、とかく支那的で左様には參らぬ、かゝる漢學者が多いのは遺憾である。私は大學始め師範中學等の漢學の教授の主義方法を、大に改革する必要があると同時に、なるべく學徳の高い漢學先生を養成するのが今日の急務であると思ふ。

三、當年の習字科について。

私は幼年の時に姫路で、井上松香先生に就いて少し習字を稽古した。先生はお前は習字に熱心であるから、わしの後を繼いでくれといはれたことがあつた。又神戸師範學校では松原貞幹先生が習字教師であつたが、當時は別に習字手本も確定して居らなかつたので、私は勝手に王羲之や、顏真卿、趙子昂などの法帖を與へて、相當の點數を得て居つたが、全く習字教師になる考はなく、小學校長教員の方が、其の責任が重く、又仕事も面白いと思つて居りました。序に當時は書道の理論とか筆法などの説明研究はなくて、たゞ手本を習つて練習したのみです。今日では師範學校でも小學校でもたゞ手習をするのみならず、點畫法とか理論などを教授する必

要があります。

以上の通りですが、私は書道には趣味をもつて居つたので、姫路高等小學校長を勤めて居る時は、非常に多忙であつたが、時々手習はして居りました。姫路高等小學校廢校の後、明治三十五年伊丹中學校に奉職して、其夏に文部の習字檢定試験を受け、翌年國漢文の檢定試験を経て、伊丹中學校教諭大阪廣島陸軍幼年學校教授となり、後には御影師範學校で習字教師となつたのは意外に感じました。

さて私は御影師範學校に奏職中に日本人支那人について、幾分か和様唐様の書道の理論を研究し、今古の法帖を習ひましたが、かの篆隸などは別として、今日は楷行草などには一般に理論にも筆法にも外れた、柔弱で氣力が乏しく且つ癖のある書風が流行して、かの王羲之や顏真卿などの崇高で謹嚴で品位のある筆法が、段々衰へるのを悲しみ、従つて新興國民の氣力にも影響することゝ心配して居ります。

序に書には美術的と實用的との二つに別れて居りますが、美術的の書は別問題として、實用的の書風を起さねばならぬと思ひます。徳川時代には御家流にて全國の書風を一定させて居りましたが、明治維新後は此風が廢止されて、一般に唐様が流行し、暫くして菱湖風の村田海石氏の書が小學中學等に行はれました。其後日高秩父氏の顏真卿流の書が教育界を風靡させました。又假名は一時小野鶯堂氏の書風が行はれましたが、今は行成流の書が勢力を得て居るやうです。私は漢字の楷書は顏真卿流に、行草は王羲之趙子昂流に、和様の假名は加藤千蔭流を主として、菱湖風などを渾和して楷行草假名共に實用的の雄勁なる昭和維新時代の日本的、實用書風を起して小學中學高女等に流行させて書風を一定するやうにと思つて居りますが、何分にも自らの及ばざ

るを嘆いて居ります。

終に身心を正しうして端坐して、正確に筆を執り、筆法に従つて手習を爲すは、大に修養の助けとなるものでありますから、小學中學等でも實用に兼ねて、修養の二法として練習せしめられたい。又書は人生の實際に必要缺くべからざるものであるから、師範學校などでは、理論と實際とを教へ、且つ行草などの書方、崩し方等を習熟せしめて、小學校教師たる資格を得させたいと思つて居ります。

四、當時の教育學について。

明治維新後は専ら米國流の教育制度を輸入模倣し、従つて米國流の教育學書、即ち單に教師心得の如き書物が翻譯せられて大に流行し、其後に英國のスペーサーの教育書が勢力を得ました。明治十七八年頃には獨逸のヘルバルト派の教育學が入りました。是は哲學を基礎として組織されたもので、理論がよく整頓して居りました。當時富津教諭が此の譯書によつて、教育學を講義されましたが、何分にも非常に早口であるので、私も辛うじて筆記をして居りました。其後種々の外國教育學説が輸入されましたが、私は昭和の初頃より、大日本古典會を起して、萬事を日本的に改革して、速に歐米の崇拜模倣の夢より覺醒せねばならぬと思ひ従つて教育學も大改革を爲すべき時と考へて居ります。

先年大日本古典會では、御影師範學校に於て、福本義亮氏を聘して、吉田松陰先生の教育法の講演を承りましたが、其翌日某氏が私に向つて、先夜はベスタロジの教育法の話があり、昨夜はまた吉田松陰先生の教育法の話があり、教育法は何れに従つたらよいのですかと問ふたものがあつた。私は君の國籍は如何と問ひまし

たら、無論日本人であると答へましたから、私は吉田松陰先生は日本人で、日本人を教育されたのだから、日本の教育は無論吉田松陰先生の法に従ふべきであるが、彼のベスタロジは歐洲人で、歐洲人の教育を施したのですが、日本人の教育にも参考に資すべきものではないと思ひましたら、よく判つたと答へました。世間ではとかく日本人を教育するに、歐洲人を教育する法を用ゐるものがありますのは、誠に嘆息に堪へませぬ。

五、當時の科學

私に在學時代の科學教授は誠に幼稚なものでした。動植物學などはたゞ書物を読んだだけです。三橋得三先生が赴任して、犬の解剖をやられて評判となりました。同先生は千葉縣の出身で、イヌをエヌと誤つて發音されたので、三橋先生のエヌの解剖といふて名高くなりました。又横地石太郎先生が東京大學の應用化學科を卒業して來任され、始めて盛に物理化學などの實驗をやることになりました。

私は入學前に姫路城南小學校で、高等小學校の生徒に、ロスコの小化學の譯書によつて化學を教へ、水素瓦斯の實驗をやつて、フラスコの栓が飛んで天井に達するなどの失敗を招きましたが、後に文部省より特に城南小學校へ物理化學器械を下附せられたので、姫路中學校の先生に就いて、其の使用法を一通り學んで、物理化學には多大の趣味があつたので、師範學校では熱心に研究したものです。當地横地先生がロスコの大化學書によつて、講義せられたものを筆記したのが、今にも残つて居ります。又森文部大臣が理化學實驗室に臨まれて、わしも英國で化學の實驗の際に怪我をしたなどの話があつた。當時横地先生の星雲説の御話が有名でありました。

然るに今は國漢文習字健康法などに趣味をもち、時にはつまらぬ詩歌などを作りて、物理化學などには全く心を傾けませぬのは、今昔の感に堪へませぬ。序に三橋先生はとくに故人となられたが、横地先生は今に健在で京都に住んで居られます。

六、當時の圖書科

私の在學中圖書の教師は、前田吉彦先生で、元は擊劍家であつたが、後に西洋畫を學んで、神戸師範學校に奉職して居られた。私は圖書の素養がなかつたので、城南小學校に居つた時に、高等小學校生徒に圖書を教授するには随分閉口して、俄に姫路中學校の先生に就いて圖書を習つて居つた爲に、師範では相當に圖書には勉強したが、少年時代の素養がなかつたので、餘りに進歩は見なかつた。當時は鉛筆畫が主で、外に木炭畫とか水彩畫を習うたが、油繪には手を着けなかつた。之に比して今日では師範でも中學でも小學でも、圖書の教育はよく普及整頓して、特に寫生が進歩してゐるのは、全く隔世の感があります。私は今後毛筆畫でも鉛筆畫でも、總べて歐米の模倣を離れて、日本的圖書の發達するやうに致したいものと熱望して居ります。

七、當時の體育衛生法等。

私は明治維新後に生長したので、擊劍柔術等は稽古せず、今の所謂健康法治病法などは知らなかつた。城南小學校で高等小學校生徒に、松山棟庵氏譯初學人身窮理を授けて、始めて生理衛生の概要を知りましたが、該書に食後に水を飲む時は、胃液を稀薄にして健康に害あるなど、西洋流の學說を信じて居りましたが、豈に圖らんや、今日では清水は非常な良藥で、人身にはことに有益なるのみならず、種々の病にも効能の多い良藥である。

ることを悟りました。師範在學中學校では健康法とか治病法などを教ふる設備もなく、教師もなかつたが、當時病人は割合に少く、夏季に脚氣患者が少々あつた位と思つて居る。

又私が師範學校入學前に、城南小學校に奉職してをつた時に、普通體操は無論なかつたから、陸軍の體操練兵を學んで、小學生徒に課せばと思つて、或る軍人に相談しましたが、小學校先生の身體では、とても陸軍の體操練兵などは、堪へ得る所ではないとのことで、實行しませんでした。

然るに明治二十年に姫路高等小學校では木銃背囊等を備へて、下士上りの教師に依頼して、兵式教練を開始しました。又明治二十一年に日本で始めて東京の村尾幡太郎氏と藤井文藏氏との發起で、有馬に於て夏季講習會(サンマースクール)を開催されたので、私も出席し、翌二十二年私が兵庫縣私立教育會に建議して、同年夏神戸姫路豊岡にて夏季講習會が開かれ、姫路では特に歩兵第十聯隊に依頼し、士官下士が來りて、四百名程の小學教員の講習員に、始めて兵式體操の教授を施し、相當の成績を挙げました。

然るに私が神戸師範入學後、松岡彪氏が、東京にて坪井玄道氏より普通體操の講習を受けて歸り、學校にて徒手、啞鈴、球竿、棍棒等の教授を始められた。私が卒業後森文部大臣の意見で、師範學校に於て嚴格に盛大に兵式教練が行はれ、寄宿舎も兵營と同じく陸軍式となり、小學でも追々兵式教練が行はれるやうになりました。

其後宇垣陸軍大臣の時に、軍縮の結果、多數の將校が淘汰せらるゝといふ噂を開き、私は一、現役士官を多く備へて置くは國軍の強味なること、二、陸軍將校を各中等學校等に配屬して、兵式教練を完備すること、三、

各郡市に現役將校下士を駐在せしめて、在郷軍人、青年團、各小學校に於ける兵式教練、軍事の指導等を爲さしめたらばとの意見書を認めて、私の知遇を受けて居つた、故川村元帥の手を経て其筋へ建議し、更に直接宇垣陸軍大臣畑陸軍次官へも二三回建議しましたが、其の爲めか否かは判らねども、ともかく各中學校専門學校大學等へ現役將校を配附せらるゝ事は實現しましたが、各郡市へ駐在軍人の事は出来なかつた。

私が師範に在りました時に、島津珍彦男が鹿兒島に造士館を設立せんとて、東京の諸學校を參觀し、歸途神戸師範學校にも立寄られた。其後川上校長が島津珍彦男の話を傳へられた。即ち同男が東京の諸學校の教場に參ると、諸生徒は何れも參觀人の方にぎろ／＼と眼を注ぎて、授業のことはお留守であるが、(當時お伴の二三人の従者は何れもなほチョンマゲであつた)流石に陸海軍學校生徒は一意専心教師の講義を聽いて、參觀人眼を着けるものはなかつた。教育はかくありたいと嘆賞せられたと聞きました。其後私が兵庫縣教育會を代表して東京に參り、中央幼年學校を參觀したが、漢學の先生が、椅子に坐し首を傾けて講義して居らるゝも、生徒はきちつと端坐して講義を謹聽せるには敬服して益々姿勢を整頓することの教育上必要なるを悟りました。私も其後姫路高等小學校にて、生徒姿勢標準を規定實行しましたが、三十年來、正身端坐鎮魂法を實行するに従ひ、愈々姿勢の端正が修養にも健康にも治病にも必要缺くべからざるを知り、此次の大日本古典會の會報はその姿勢標準を掲載して、生徒姿勢の端正を圖りたいと思つて居ります。

又此程東京の同窓尾河鐵太郎氏より左の文が參りましたからこゝに掲げます。

神戸師範學校の運動場の西北隅に砂場を設け、如何にも簡素な道場で、力を極め聲を揚げて、朶を打ち込み、

又は打倒す一種の劍術が行はれた。如何にも薩摩風な豪快な劍道と思ひます。今時の御面御小手を打つて、其の巧妙を氣取るやうな劍術とは別種の味があつた、たゞまつしぐらに前敵を打倒す意氣の盛んな遣り方は、面白いと思ひます。現時此様な劍道は無いやうですが、中學師範などに遣つたら効果があらうと思ひます。以上は尾河氏の文ですが、私は少しく補うて説明します。是は藥丸流ヤクワンリウといつて、鹿兒島から郷原カウラといふ教師が來て教へて居られた。其法は直徑二寸五分位の木に、四十五度位の角度の枝を生じた、高き二尺位の圓木を、五尺位隔て、砂場に相對つて植て、之にユスといふ柔かき直徑五六分位の細き木の棒を、六七本集めて其の兩端を麻繩で縛りたるを、かの相對して直立せる木の枝に懸けて、一、生徒は袴を着け跣で、エーの懸聲勇ましく、渾身の力をこめて、木刀で何回も打込むのである。二、直徑二寸位の太さで、一間餘のユス木を砂場に直立せしめて、例の木刀で斬り込むのである。三、砂場にユスの直徑七八分位、高さ五尺位の細き木、十本程の根を削り尖がらせたるを、砂場のこゝかしこに突き立て、之に昔の足輕が戴く圓錐形の笠を、其の棒の尖端に被らせて、之を例の木刀にて、勇ましく次ぎ次ぎに斬り倒して廻るのである。此法は専ら攻撃のみで、防禦は少しもなくして、日本の戦法の如く、亂軍の時などには効果多かるべし。且つ體力意氣を練るには、今日世に行はれて居る擊劍よりは有益と思ふ。

往年川村元帥にこの藥丸流の事を話したら、鹿兒島藩士の各家庭では、何れも朝早く起きて、青少年が練習して居つたもので、彼の野津鎮雄、同道貫の兩將軍などはことに熟達して居られたと。小森慶助氏なども同様に話された。

又福岡市では杖術といふが行はれ、姫路の小學校でも實行してをる。是は一本の木杖で、擊劍の型を行ふもので、道具も至つて簡單で、體育上には効果が多く、且つ大に氣力を養ひ得ると思ふ。私は尋常高等小學校中學校師範學校などでは、かの藥丸流と共に杖術を實施してよろしいと信じます。杖術は女子にも差支ないと思ふ。非常時の今日では、誠にかゝる日本的武術體育法を實行して、尙武の氣風を養ひたいものです。

又尾河氏の文に

始めて兵式體操が師範に入つて、第一に赴任せられた兵式の教師は、慥か少佐位の人でしたが、此の教師が練兵の時に、鐵砲の擔ぎ方がまづいといつて、「そんな擔ぎ方では條約改正が出来ぬ」と言つたことを記憶して居る。當時は條約改正でやかましかつた折柄ですから、かくいはれたのでせうが、今日ならそんな擔ぎ方では世界の陸軍國と戦へるかといふところでせう、一寸氣骨の閃きがあるところが嬉しい。是で生徒が此の教師中々話せるといふ氣持で、喜んだのでした。教育の要諦がこゝにあるやうに思はれますと。

又尾河氏の文に

晩方食後運動場へ生徒が出て居る時に、縣廳の久保學務課長や川上先生が來られて、二十人三十人の生徒が長蛇の陣を造り、先頭には川上先生が頑張り、久保課長が鬼で、尻尾を捉へる遊戲をした事などがあつた。さすが鹿兒島人文に磊落で豪快なところがあつたと。

私が廣島幼年學校に勤めた時に、似島で泳泳を練習して居りましたが、鹿兒島出身生徒に限り、晩方には砂場に集つて相撲を取つて楽しんで居りました。是等の遊戲は今日も教育界に盛にやらせたいものです。私は明治維

新の際に、なぜ薩摩には西郷大久保等の豪傑が、雲の如く澤山に出たことについて研究して居りますが、以上の事などもまた、たしかに人物を出した一つの原因でありませう。

八、同窓會の設立

是までは同窓會といふやうのものはなかつたが、私共が首唱して會則の原稿を作り、たしか明治十九年の春頃か、當時の校舎の講堂で全校生徒の集會を開き、職員各位も列席せられて、會則を決定し、始めて同窓會が出来ました。是が今の御影師範學校の校内にある校友會に變つたものか、又は今の同窓義會の前身か、其の沿革は判りませぬが、誰か記憶の方もあるでせう。

九、楠寺招魂碑の建立につきて。

明治二十年に東京高等師範學校在學の森本清藏氏(先年病歿)が、私に手紙を以て、川上先生の意見で、神戸師範學校生徒の死亡者の招魂碑を建つるやうに致したいから、周旋してくれとの事でした。當時私は姫路高等小學校に勤めて居つたので、師範學校在學の尾河鐵太郎氏へ依頼して、遂に楠寺へ建つる事となりました。私は此度東京の尾河氏へ當時の様子を尋ねにやつたら、左の通り返事がありました。

建碑の件は何分昔の事で記憶も乏しいが、唯當時碑文篆額は川上先生に御依頼することに相成つてをつたが、中々參らぬにつき、遂に師範在勤の土屋鳳洲先生が碑文を、松原先生が篆額を書かるゝ事となつた際に、私はそれでは川上先生に對して相濟まぬと申出たところ、土屋先生が私を呼んで、世間には代作が多くあつて、決して違例でないとの御話であり、左様の義ならば其事に決定しませうと御答して、諸事相運びました。山

岡光太郎氏でも生存して話も合つたら、思ひ出す事もあらうと存じますが、山岡氏も既に死にしにつき、今は致方がありません。

私は此度補寺に至り碑文を寫して左に掲げます。

十、文部省視學官正七位川上彦次篆額

嗚呼死生有命乎。天於秀才。何生之促也。兵庫縣師範學校創設以來。十有二年于茲。縣下俊秀之徒。多來受業。而其在學中。若卒業就職後。病歿者凡二十有五人。何其多也。方其在世時。概志操卓然。砥礪忘身。以普及教育爲己任。而今如此。豈不悲哉。天嘉苗雖植。雜草易茂。騏驎罕出。鶯鷗遍天下。美質之寡。而枯落之速。萬物皆然。何獨於人疑之。況諸子雖蚤夭。其後繼其志。則比之世之遊學無成。老死於田畝者。其榮辱果如何哉。但同窓諸友每雪晨月夕。追悼不已。於是相謀建碑。以吊其魂。諸教官贊之。而屬余爲之文。余嘗疎於辭意固辭不獲。乃記建碑之概。使刻之於碑面。

明治二十一年三月

兵庫縣尋常師範學校長 野村致知撰

同校教員 松原貞幹書

此文によつて考ふれば、尾河氏の手紙にある通り、土屋先生の手に成つた代作の文を、當時の野村校長の撰とし、篆額及び碑文は松原先生の書かれたものと思ひます。

土屋先生は森田節齋の門人にて學徳高く、ことに文章に長ぜられ、後に學習院教授となつて、先年死なれま

した。私は反覆此文を讀みましたが、誠に立派な文章で、流石は森田節齋の衣鉢を繼がれた大家と思ひました。私の少年の時に學んだ松平楳山先生は、矢張森田節齋の門人であつたから、私は此文に對しても大に趣味を感じました。序に當時の病歿者は僅に二十五人なるが、今日は物故者客員に於て八十靈位、會員八百八十六靈位であるのは、誠に驚くべきことである。

十一、日本の教育學の組織實行を望む。

我が大日本皇國はいともかしこき 神勅によつて國家が成立した、君民一體の神國で、世界無比の國體を有するにつき、此際斷然として彼の歐米の自己の欲望と功利と搾取とを目的とした、唯物主義、個人主義、自由主義の教育學を排斥して、新に大日本惟神道に基きたる大日本精神によりて、實に日本的儒學佛教其他歐米の教育學等を參照して、躍進日本國民を指導すべき、日本の教育學の成立せんことを熱望します。

日本の教育學の組織は勿論必要なるが、更に實際の教育法教授法も歐米の崇拜模倣を改めねばならぬと思ひます。其方法の一端は大日本惟神道に基く大日本精神によるべきはいふまでもなく、日本の歴史風俗習慣等を參考し、更に陸海軍及び陸海學校の教育精神方法を研究し、且つ吉田松陰先生の秀才教育法、中江藤樹先生の庶民教育法、越前永平寺、京都妙心寺等の禪學修業法、其他徳川時代の寺子屋、漢學塾等の方法を融和合渾し、嚴正にして實行を重んずる、所謂知行合一の日本の教育法授業法を確立せねばならぬと思ひます。而して之が根本となるものは、偏に教育に従事する教師の學徳健康にあるにつき、師範教育は特に日本的に改良振作せねばならぬと痛感に堪へませぬ。

十二、結 尾

又尾河氏の手紙中に私に對する逸話がありました。

或時學校の裏の賄方の井戸の傍に、澤山の松薪が乾かしてあつた。それを貴君が食後斧を以て割つて遊んで居られた。其處へ私が行つて、そんな薪を割るのは六ヶ敷で、中々割れるものではないといふやうなことを申したら、貴君が庖丁が牛を解くやうに、此薪を割るには、其の木目即ち木理に従はゞ、たやすく目的を達し得るものであるといはれた事が、當時竊に私の胸を打つて、今に記憶に残つて居ります。教育は正式の教室内ではなくて、かゝる咄嗟の不用意の間に行はれるものであつて、私は偶然の教育を貴君より受けて、今に胸臆にあるのです。

附記 尾河氏は篠山出身で後に東京高等師範學校を卒業し、地方の中學校長等を勤め、今は東京にて謠曲團碁繪畫等を樂んで暮して居られます。

私は全く忘れて居りましたが、これは少年の時に松平先生から、莊子の講義を受けた養生主の篇に、庖丁が牛を解くことがあるから、かう説明したものと思ひます。

私は總て人が物事を爲すには、かの庖丁が牛を解くやうに、宇宙自然の理法に従ひ、純眞至誠公明正大にして、少しも無理がなく、専ら大日本惟神道を信奉し、宗教的信仰信念情操を涵養し、造次にも顛沛にも、大日本精神によりて行動し、朝から晩まで、晩から朝まで、いつも神の心を心とし、神の行を行とし、善を爲すを樂まねばならぬ。大日本は神國なりとは、既に北畠親房卿が神皇正統記の卷首に叫ばれた通りでありますから、

我が一億の忠良なる臣民は、一身一家一國はもとより、延いては全世界全人類をも、清く正しい神の道に導いて、平和安寧なるやうにせねばならぬと信じます。是は大日本皇國永久不動の根本國策であります。以上の考へに基いて、去る昭和三年から、大日本古典會大日本健康會を設立して居りますが、其の精神は五十年前に尾河氏に話した通りで、總べて木理に従つて行動する意味に外ならぬのであります。たゞ學徳手腕が乏しい老人で、萬事が心に任せず、誠に恥ぢ入りたる次第であります。同志會の諸君にも切に御賛成を仰ぎます。

五十年の回想

明治二十四年卒業 稻 田 春 治

私達の入學は、明治二十年四月十五日なり、明治二十年と言へば、師範教育に劃期的大革新の行はれたる年にして、本格の軍隊訓練に入り、服装は洋服となり、自習室は椅子テーブルとなり、寢室は寢臺となり、時鐘はラツパとなり、私達は夏休みに洗濯仕立の眞白い小倉服にゲートルを巻き郷黨に對し軽いブライトを感じたるものなり。

校長は偉大なる體格莊重なる言動實に堂々たる野村知致先生。教頭には精悍そのもの、如き三橋得三先生、その他古儒者を偲ばしむる土屋鳳州先生、理學士大石保吉先生、農學士秋山保先生等多士濟々孰れも懇篤熱心に教

授指導を賜はり、私達は斯くてこそ私達が教育報國の重任を負ふべく運命附けられたる責任を感じ感奮興起したるものなり。意氣や壯なり。

かゝる雰圍氣内に於ては、私達學生は何等の不安なく不平なく天下泰平に懸命の勉強が出来たことと思はるゝが事實は然らず、私達には若干の惱みなかりしにあらず。

その一 教育が劃一的詰込主義なりし事、今日に在りて我が國教育を論ずるもの、劃一詰込の弊を言はざるなし、五十年の往時に在りて亦然りしを思へば、轉た長大息を禁ずる能はず。

その二 生徒の訓練軍隊的訓練の衝に當る指導者の人を得ざりし事なり。當時寄宿舎に舎監なる職員あり。二名の舎監が交迭に宿直して生徒と起居飲食を共にし、生徒を訓練し監視し且つ批評して人物の等級を附しての人物評が卒業後の待遇を左右する制度にして、舎監は實に重要な師範教育の職制なりしなり。然るに舎監なる人々は上流の教諭にあらず二人共陸軍の退役下士にて、青年學生の師表たり指導者たる素養なく素質なく、單に軍隊にて仕來りたる階級的命令的に行はれたる營内生活を、その儘に學生心理の了解もなく理解もなく只管寄宿舎内に行はんとしたるものなり、その成績や知るべきなり。

その三 先生方の待遇素質に非常なる差等あり。下級教諭の或る部分には自己の受持課目の生徒成績を見る自信なきものゝ如く職員室の茶飲話に於ける上級教諭の批評のまに／＼自己の受持課目の點數を左右せらるゝ疑あり。學生の砂上偶話が、多くこんな事より發せられ折角の軍隊訓練の効果を收むること能はざるの憾みなしとせざりしなり。

以上述べ來りたる不安不平なりし事柄は五十年後の今日に在りて、今日の學生に亦然るものあるを認む。故に教育は制度よりも、形式よりも、教師の人格に在るは、千秋萬古の鐵則なり。

私達の共に入學せしは二十七人なり。外に異期入學二人あり、滿四年後手を携へて卒業したるは十六名に過ぎず、この内若干の變種あり、傑物あり。

N君 白哲豐頬の好青年、卒業後期年ならずして姿を隠くし杳として消息を絶ちしが、昭和六年四十幾年月にして邂逅すれば君は茶人として嚴然たる大家宗匠として存在せり。驚くなかれ變化の甚しきを。

K君 師範出身者の唯一の登龍門たる、お茶の水に向はず自力發奮藏前高工に進み窯業科を卒へ瀬戸多治見邊にて徒弟を養成し今や輸出組合顧問として大御所の觀あり。

F君 ヌーボーにして人を喰つたやうな男なり。明石郡視學を以て兵庫縣と絶縁し、御用商人となり滿洲浪人となり、復活して縣視學となり郡長となり、轉じて私立高等女學校々々主兼校長として押しも押されぬ存在となれり。

M君 押し強い氣の利いた社交的好漢なり、武庫郡視學を最後として實業界に轉入し、世界戰爭當時には青島方面にありて、目覺ましき活動をなせり。

以上NKFM四君は、或は師範道の反逆者なりといはれんかなれども孰れも平凡を破りたる好人物にして見方によつては優良卒業生なり。然るに揃ひも揃ひて當時の所謂軍隊訓練舎監教育の尋常見たるなり。

試験生

明治二十九年卒業 下 仲 幸 吉

入 學 制 度

僕は明治二十五年の入學生である、我兵庫縣尋常師範學校は生徒定員二百名だつたと思ふ、當時の入學制度は年齢滿十八歳以上二十歳未滿の男子に限り第一種(郡選出)、第二種(直接)の別があつた。第一種生は郡役所で入學試験を受け第二種生は學校で試験を受けた、合格すると假入學を許される、假入學の期間は三ヶ月である。卒業後は一種生は必ず選出郡に歸り二種生は命ぜらるゝ何郡かへ行く外義務に待遇に何等異なる所はない、僕は川邊郡の選出(中退三名と共に)だつた、樽谷明吉君は八部郡、西見芳宏君は揖原郡(武庫と改稱前)の選出だつた(縣下には揖東揖西飾東飾西郡等があつた)。

文 化 の 一 端

師範學校は縣下最高學府で中等學校は姫路に中學、神戸に商業學校の外夫れ以上の學校は縣下に勿論なかつた師範學校に這入つたら今の大學よりも持てたものである。僕等と同時に京都顯道書院の小林君、京都高等中學から尾崎君、鳳鳴義塾の四年から金井君石橋君、姫路中學から田中君、各種漢學塾等より入りし者等尠くはなかつた。當時に於て故郷を離れて遊學せるものは郡村に於ける俊才であつたと思ふ、是等が多く師範を希望したも

のだ、大學生の如きは一郡に一兩名否無かつた郡が多かつた。縣下の鐵道は大阪神戸間の外に神戸廣島間の山陽鐵道(私設)のみであつた、尼崎町から池田町まで軌道馬車があり僕は之に乗つて神崎で汽車に乗り替へた、同行の有馬郡出身の下山作治郎君が西宮を過ぐるころ頻りに「海が見へる海が見へる」と珍らしそうに言つた、三田以北丹波路からは天王寺越で但馬は生野越で來たものだ、美方城崎などの者は冬休みには雪で歸れぬ寄宿舎に居残つた人も多かつた、淡路の人が風浪のため歸郷を延ばし始業に遅れた例も覺えてゐる、定めし通船も少く安全性も乏しかつた事と思はれる。

入學の前晩今の裁判所前の播摩屋といふ宿に泊つた姫路の田中孝雄深津精一の兩君が同宿して居て互に交はした挨拶が双方極めて丁寧いんぎんで到底今の學生などの想像もつかぬ態度は其頃の青年の眞面目さを表現せるかのやう今以て忘れ得ぬ所である。

入 學 の 第 一 日

殆んど和服で洋服を着たのは誠に珍らしく彼方は何をして居つたのだらうとひそかに語り草になつた位だ、多くは頭髮は丸刈で一寸位も延ばして平氣である、一同先づ講堂に集まつて先輩が残して出た古洋服帽子古靴を彼是と背格好に合せて着替へ自分の着物を風呂敷に丸めて翌日外に持ち出たなど兵隊さん其儘である、小倉の上着のはげたの、ひじの破れたもの、ツボンと色も違ふなど見悪くけれど身にさへ合はば上の部なり、帽子の過大にして或は眉深く或は過小頂に垂るかの如く、靴だけは足に合はねば歩かれぬと言つた形、翌日外出を許され彼の丸めた風呂敷包を知人の所へ預けに行く途申たゞ師の帽章のみ心強く何となく優越感を覺ゆるのであつた、正服

に着替へて講堂の腰掛に列ぶと舎監殿及週番什長殿より寄宿舎の心得など承り指名點呼の後所屬の室に案内され
後各科教室寄宿舎の隅々まで案内せられた。

起居進退總て喇叭の合圖、三度の食事就寢起床時の人員點呼夜分の自習時間（一語も嚴禁）等嚴格な規律の下
に行動するが何となく嬉しくもあり窮屈にもあり一種異様の感があつた、上級生に對する禮儀を粗かにしてはな
らぬ（新入）とは試験生時代の代名詞であつた、随分遠慮せねばならなかつた（新入）が不評判を取ると本入學が覺
束ないと一途に聞かされる、家庭に在りしころの自由に引替へ軍隊式規律の下に於ける行動が自ら眞實なる心を
顯現すべく環境に置かれたと後で思つた。消燈喇叭が長く尾を引てタ、タ、ターと響くのが寂しく慕郷の念を呼
び起すのであつた、氣の小さい者はシクシクと歎いたものもあつた、餘り自由に育つたものは窮屈に堪へないで
自暴自棄となつたものもあつた。

授業時間

各科擔當の先生は殆ど毎時採點簿を携帯せられ豫習復習の状況を試問又は不意打に臨時試験をせらるゝなど三
ヶ月間は名の如く試験期であつた、たゞ數日後に答案を採點して返さるゝので大體本入學の成否を豫知すること
が出来先づ安心を得たのだつた。體操時間は試験生期は四年生（四年生の半分は教生）の半分が教授に當る、各
個教練柔軟體操執銃體操駆足機械體操である、十人内外を一分團として二三人宛の教官だから行届いたものだ、
少しヅルイとでも見込まれたが最後柔軟體操の「前腕ヲ平ニ動セ」など幾遍遣らされるかもしれぬ、手も足も頭
も腰も一所に動くやうにヘトヘトになつて漸く「止め」となる、執銃の「前腕ヲ平ニ動セ」「腕ヲ平ニ曲ゲ動セ」

などヘトヘトになるまで遣らされると涙も一所に出る。

寄宿舎

大體前記分團毎に一室あり寢室も略々同様の組織で分團長（四年生）、副長（三年生）で一二年數名宛收容、寄宿
舎全體は舎監を助けて週番（什長一人伍長一人）が指揮監督命令傳達人員點呼等に當る、炊事は全く自治制度で
週番什長は授業を休んで炊夫を監督し献立を實行する（一週間づゝの豫算の示達を受けて）一二年生から食事當
番十人内外を採り食卓整理給仕の任務をさせる、湯呑場喫烟室圖書閱覽室浴室等夫れ／＼掛あり入浴は上級生か
らの順が慣例になつてゐる。

外出

毎週水曜の放課後と日曜日の朝食後に外出を許される、午後五時が門限で外出時には舎監から門鑑を受けて門
衛に渡し歸校の時は此逆をする、もし五分でも遅れるものなら懲罰として週番室に呼出され謹慎を命ぜらる、品
行點も一ケ年百點として此内三點でも五點でも引かれると懲罰を受けた印となる。

一ヶ月に二三回か無定期日に校外散歩と稱して夕食後舎監又は什長引率の下に隊列を組んで軍歌を高唱しながら市中を練り廻つたものである、「敵ハ幾萬アリトテモ」「四百餘洲ヲコゾル十萬餘騎ノ敵」など大流行であつた。

編入式

斯の如くにして三ヶ月を経過すると再び身體検査を受け期間中の學科心性等を考察して本入學を許される、之
を編入式といつて宣誓もする、宣誓の要旨は「師範生徒ノ本分ヲ守ル」「放校ノ場合學資ヲ返還スル」等である、

僕等の同輩は八十幾名かの假入學で本入學の時六十數名に減じ卒業は四拾八名であつた。

明治三十年卒業生の追憶

明治三十年卒業 杉野精造

余等の一群は明治廿六年四月に入學して螢雪の功を積むこと四年、明治三十年三月に卒業してそれ〴〵教職に従事したのである。其の學修した學校は今回六十年記念祝賀會の一事業として設立された 明治天皇臨幸聖蹟碑のある神戸市の中央にある兵庫縣尋常師範學校校舎である。

懐かしい校舎

其の位置は神戸市諏訪山の下兵庫縣廳の後にある現在兵庫縣神戸第一高等女學校の建立されてゐる處に建てられてゐた。今日から見れば粗末であつたが當時では輪奐の美を備へたと稱せられた洋館であつた。諏訪山道路筋の西に本館、自修室、寢室、炊事室、特別教室、附屬生室などが設けられ、東は道路を隔て、運動場附屬小學校單級校舎があつた、當時本校の南にはメソヂスト教會、神戸港長マルマン氏邸、西は陸軍中將高嶋勲之助氏の別邸、北は有名なミツスハウ氏の經營せられた頌榮幼稚園、南技師の宅があつた。今では南全部は學校の敷地となり西は縣知事の官邸北は幼稚園は取り拂はれて全く其趣を異にしてゐる。東部の附屬運動場は昔の儘残つてゐるが南には警察部長の官舎があつたのが縣會議事堂になり、附屬小學校は警察部長の官舎になつてゐる、東部に大

角堂の縣議事堂があつたが今では盡く縣官舎になつてゐる。桑海の變といふ感も無理ではない。本館の前は蘇鐵の庭園であつた、講堂教員室理化學室などあつた、入口の上が露臺で此處には明治七年佛國ジャンセン博士が諏訪山金星臺で太陽面を通過する金星を觀測した際に用ひられた望遠鏡が神戸港長マルマン氏の手を経て學校に納められ小林鼎先生によつて組み立てられて茅海の眺望を恣にしたことがある、これも學校の寶物の一つである。今では全部變つてゐるが東部運動場の周圍にあつた松の樹のみは依然として昔の面影を談つてゐる。

慕はしの恩師

入學當時の校長は元氣潑潑たる山路一遊先生で養氣曆などを設けられ天地浩然の氣に觸れて國士の士風を奨勵され演習によつて會下山大楠公陣地の舊蹟に練武したこともあつた、時としては富士登山の氣宇の爽快なことを演説されたことが猶耳に残つてゐる。しかし暫くにて轉ぜられ濃厚篤實の稱ある伊村則久先生が校長になられて卒業證書を渡して貰つた。御影師範といふ大規模の學校が出来たのも縣會にも受けがよく同先生の濃厚な徳によつて出来たと噂されてゐた。教頭田中勝之丞先生は理科出の先生だが文學の造詣が深く國士の風があると稱せられた、同先生は豊岡中學校長に轉ぜられ附屬の主事士井龜之進先生が教頭になられた熊本土風の親切な先生であつた。數學の先生には幾何には瀬川彦四郎先生キビ〴〵と教授される、代數算術は寺尾氏千本氏など教科書で佛國式の新流で佐伯先生が秩序よく教授される植物は小村知止先生、齋藤氏の教科書地歴は奥山章次郎先生特有の教授法で教へられた。小林先生が中學校長に奥山先生が銀行家に轉ぜられて有名なる教育家吉田彌平先生棚橋源太郎先生が新進鋭氣で嶄新な教授法で教鞭をとられた、之れはエライ先生だと思つたが果して日本の教育家とし

て發展せられた。漢文には明石藩學儒梁田悅崑の裔たる梁田邦彦先生國語では大學出身の竹村鍛先生であつた、梁田先生は錦江と稱し詩書共に善くされた。竹村先生は有名な俳人碧梧桐先生の令兄で詩歌が上手なばかりでなく發音學はじめ文典の説明が甘いので生徒に敬服されてゐたが不幸短命であつた、岩手縣師範學校長に轉ぜられた小林鼎先生は化學の先生で實驗指導をされて分析や實驗でイヂメられたが學校教師になつてからはこれが大に役立つた。土井先生の後任は其後北海道、新潟の師範學校長として令名を馳せられた柴垣則義先生で目尻が下つて三角形だからとて生徒等がツライアングルといふニツクネームを呼んだ先生であつたが才氣の勝つた先生であつた。圖書の先生に堀越先生といつて鉛筆畫の先生であつたが同先生は教授法が實に上手であつた。習字の先生は徳望高かりし松原貞幹先生であつて訥々の雄辯の中に生徒を指導された。圖書とか習字科といふ様な學科は人が氣休めといふ様にサボル學科だが筆の流れの薫陶は實に争はれぬ存在を有してゐる手紙を見れば一見松原流の筆蹟を見ると直に御影出身の生徒だと知ることが出来るほど馬鹿にならぬ。隨意科は英語が磯部、奥宮先生、手工が大阪市民博物館長として有名であつた堀居左五郎先生、農業は淺尾重敏先生であつた。體操の先生は入學當時美聲の持ち主であつた關良三郎先生、銃槍の名手であつた楓龍齋先生であつた。此兩先生に率ゐられ時恰も日清戦争が起つて補社の前に武裝して 大元帥陛下を始め奉り出征軍團を歡送したので其の記念が深い、楓先生が召集に應じて出征された跡に的中尉が赴任された。楓先生が出征に際して田中先生が太刀一振を送られた雄壯な劇的光景もあつた。音樂には元橋義敦先生で美聲な上に詩吟劍舞の名手であつた。僕等の卒業する以前には全國的に有名な田村虎藏先生がお出になつて二重音三重音の合唱といふ音樂黄金時代を生み出したのである。以上舉

げた余等の恩師の外に功勞ある書記さんが二人ある一人は村上平右衛門氏といふ中尉の書記さんで他の一人は池田孝輔氏である。村上平右衛門氏は曾て生徒が校長の處へ直訴するとか騒いだ時に兩手を開けて「此の平右衛門が生命のある限り此の門を一人たりとも通さんぞ」と威容を張つた豪傑で後日清戦争に戦死をされたと傳へられた。池田氏は學校の生字引といふ様な人で長州人であつた關係か乃木將軍を敬慕するのみか妻子に先き立たれて感ぜられたか一杯を傾けると金州城外立斜陽の詩を吟ぜられた。兩氏は兎に角異彩ある書記殿であつた。

親しき友垣

余等の一群は當時の制度に原づいて入學生は一種二種と分れ一種は各郡から検査の上選抜推薦された所謂郡薦生であつた、言はゞ郡の秀才である。二種は學校で直接試験の上で入學を許可されたものである。共に初めは假入學生で第一期凡そ四ヶ月は試験生と稱して操行學力體力共に教員に適するや否やを見られて適當と認められると本入學否らざるものは入學解除されたものである。從來の入學者は食費の外に毎週十錢位の手當を支給されたものだが、余等の入學の時からこれが廢せられて小使金自費生となつたのである。入學當時は約四十七名位であつたが自然淘汰されて卒業の時には二十九名であつた。即ち

阿部常次 藤井績 杉野精造 林辨吉 朝原慶 富永三四郎 大西常三郎 岡田廣吉 眞多令治 中野秀藏
武田眞一 北垣又六 北瓜謙吾 柳生佐用治 淺井長壽 朝倉景信 田邊鹿藏 武中久七 井上敏 南都虎次
小原七三郎 久保井信 廣田利直 山田秀次 下野龜治 田島熊太郎 竹内治郎 八木廣吉 阪東芳之助

の諸氏である。

在學中には甲乙の兩組に分れたが武装して湊川擬戦を行つたり、有馬地方へ行軍したり、蘆屋に露營の夢を結んだり、日清戦争に軍隊歡送迎をしたり、奈良京都の歴史を探つたり、廣島まで山陽鐵道が通じたので宇品まで見學に行つたり、京都の博覽會を觀たり、赤十字社總會の折には小松宮彰仁親王殿下の學科御巡覽を忝ふし、當時の第四師團長たりし北白川宮能久親王殿下の本校生運動の臺覽を仰いだこと、教生時代に當時の西園寺文部大臣今の大元老の巡視を受けたり、赤穂義士傳を讀んで追慕會を催したことなど今でも當時の日記を繰いて追憶の種がなか／＼盡きない。しかるに今日では

藤井績 朝倉景信 武田眞一 武中久七 北垣又六 小原七三郎 大西常三郎

山田秀次 廣田利直 阪東芳之助

の十氏は己に此の世を去られ楠寺過去帳裏の人となつた、藤井、北垣の兩君は自己の修養によつて中等學校の教員となつたが何れも短命であつた。武中、大西兩君も卒業後間もなく逝去された。朝倉氏は東須磨校長から生命保險會社に轉じて逝き、小原七三郎氏は在學中無錢旅行で名を擧げ縣視學から社會教育の講演に廻つてゐたが病を得て没した。淡路生れの坂東君は身體が弱くて早く没し武田眞一君は縣會議員として參事會のある時初段格の腕前で圍碁中腦溢血で倒れた。廣田君は河井町長、縣會議員、會社員と活動したが本年此の世を去つた。山田秀次君は二見に閑居して町村議員を勤めてゐる中に昨年没せられた、一々追悼の念深いものがある。

屈指すれば卒業以來四十年。母校の六十年祝賀といふから年齢は殆んど六十歳の連中である、今生存せる人々を擧げて見ると阿部君が愛媛女子師範、鳳鳴、伊丹中學校長を経て灘中學校に教鞭をとつてゐる。眞多君が兵庫

長野の工業學校長を経て打出に於てロープウエーの研究をしてゐる。神戸では富永岡田の兩君は早くから教育畑から實業畑に轉じて成功者と稱せられてゐる。朝原、久保井の兩君は最近まで小學教育をつとめて有終の美をなして今は風月を伴としてゐる。井上、下野の兩君は商業界に出没して虎視眈々將來の發展を期して元氣旺盛である。南部君は長田に閑居して釣魚を楽しみ。淺井君は出石校長を退き兵庫縣廳内の教員共濟會に勤務してゐる。竹内、柳生、田島諸氏は故山に起臥して村長さんに擬せられてゐる。何れも二世が活動の時期に移つてゐる。中野君は郷里で醬油醸造を營まれ、田邊鹿藏君は舊里で孟子の研究をして世道人心に功獻せんと努力してゐられる。北爪君は播州豪農伊藏邸の小作方面の事業に従事せられ其の名の如く「謙吾(健康)」で暮してゐるとの報があつた。最後に僕は山手高女の理事や神港中學の顧問をはじめ教育社會に餘生を捧げつゝ何れも下手ながら詩と碁と畫とを楽しんでゐる。

阿部君が寄稿を頼まれたが同君が忙しいので僕の處へ廻されたから拙いが一筆三樂莊中でペンを走らせた。

今昔の感

明治卅一年卒業 藤本三十郎

予等の師範に入學したのは明治廿七年の大昔で當時兵庫縣には神戸に一つの師範があつたのみである、其當時を追想して見るに當時師範學校に入る生徒の種別に二種あつた、一を第一入學者即ち郡長推薦の入學と一を第二

種即ち直接師範學校に入學受験して採用せられる者との二つであつた、郡薦の者は卒業後其郡に歸任する義務を有し第二種の者は卒業後自己の欲する處に就職する事と定められて居た依つて予も郡薦にて入學せんものと郡役所の都合を聞かせて見ると生憎加東郡には明治廿七年の入學に郡長推薦の必要なしとの事で取合はれなかつたので止むを得ず直接師範學校長宛に願書を提出して何でも四月早々受験の爲めに神戸に出て來たのである、其年第二種志願者は約八十名位あつた事と記憶するが三日間の試験の結果一日と落伍者を發表せられて結局最後に残つたのは僅かに十五名であつたと記憶する其他に三名補欠として採用せられて居た、愈入學の當日となり入學したものは確かに第一二種を合して四十二三名位かと記憶してゐる、處が第一學期間は所謂假入學時代でまだ本當の入學生ではない、第一學期間幾度も考査を執行せられて一學期の末に入學を解除せられた者が三四名位あつたと覚えてゐる、當時の學校は今の縣立第一高女の在る處で今日の現状と比べて見ると縣廳附近の状態はすつかり様子が變つてゐる、只昔も今も變らぬのは運動場だけである、其後四ヶ年間の後卒業したのであるが卒業の人員は僅かに三十三名であつた、爾來星移り年去り今日にては同時卒業者の内既に十名の死亡者を生じ餘命を保つてゐる者は僅かに二十三名に過ぎない、當時紅顔の美青年は今皆頭に霜を戴き苦勞の皺を幾條となく顔面に漂はせて居る、當時卒業生の相場は最上十五圓で十四圓と十三圓との三階級に分れて居た、洋服も此迄は軍服風の詰襟服であつたのが明治卅一年の卒業生からは服制が廢せられて予等は皆洒々たる折襟の洋服となつたのである、思へば誠に今昔の感に堪へないものがある。

四昔以前の懷古

明治三十三年卒業

藤

尾

耕

助

四昔前の懷古記事を出せとの命令、ところで在學中の日誌や、筆記類は一昨年郷里で祝融の爲に煙滅、それに五十周年記念號を拜見すると、三十三年生の君から随分と詳しい報告。何か取り残しでもなかるうかと拾つて見たのが次の一、二稿。

一、四十年前の校舎と寄宿舎生活

1、寢室　今思ひ出してもぞつとする、吾々後半期時代の寢室：さと來たら、確か奥行が一間半に間口四間、天井の高さが一間半足らず、それに兩側には衣服雜品、背囊、劍等の整頓棚に銃架までが、兵營式に設けられて居た。日光も通風も良くない、見晴しもなければ、裝飾なんて薬にしたくてもない、元より電燈の設備もなく、夜間の點燈用具は蠟燭とマチスのみ。

此狭苦しい陰氣な部屋に八、九の寢臺が押し詰められて居た、之が血氣盛んな青年時代の吾々が一日の疲れ切つた心身を休養さすべき唱一の慰安場、汗の香する濕つばい空氣が鼻を衝くのは不斷のこと、雨漏りさへすると云ふ保健的の室もあつた。

2、教室と展望臺

入學前に師範學校の物見臺と來たら「茅海一目」と云ふ豪氣な建物であるぞよと、先輩

から聞かされて居た。

成程、場所が山手な丈に大阪灣は見えるには見えたが三昔近くの建築物、吾々の後半期頃から「危険出入注意」とか「出入禁止」の貼紙さへ見出された。

講堂もあつて優に在校生を收容し得た。物理、化學、博物、圖書の教室以外に普通教室も八、九、それに演武道場も備つて居た。創立當時こそ神戸屈指の建物でもあつたらうが、もう寄る年波に、此世からお暇すべく申し出て居る物許り、何處を眺めても煤黒い、明朗さなんて、みぢんもありやしないものであつた。

3、外出と不時呼集 偶の日曜には浩然の氣でも養ふべく、殊に假入學時代なんか、神戸見物もせんものと外出する。慣れない事として上級生に會つても、うっかりと舉手注目と禮を忘れると、さゝ事だ、「下級生のくせに師範生の本分を守らない」「上級生に對する禮儀を知らない」とか、什長會議の問題になる………仲々と外出も出来やしないと吾々の繰言ばかりではなかつた。

有禮式の兵式主義が未だ消え残つて居た時代のこととして深夜に不時呼集の喇叭の音が熟睡の夢を破ることが時折あつた。少し遅れてでも出ようものなら、分團の恥辱だぞと、怒鳴らるゝからたまらない、假入學時代なんか夜も碌々得休まなかつた者もあつた。

訓練一式の軍隊なら知らないこと。六現の準備でもなからうし、さりとて年々二回や三回の訓練で武士道式の發揮されるものとは思はれない。師範生として青年だもの、潑刺たる氣分の持主だもの、硬化し切つた形式主義の下に抑へられ、歪められては立つ瀬がなからうではないか。

若しも教育と云ふ仕事は文化の傳達擴充とか人間生活の向上にありとするなら、大自然の夫れの如く絶えず進化した向上せんとする青年の氣分を彌が上にも自由に圓滿に伸展せしむる事が其の重點であらねばならないではないからうか。規律とか服従とか軍隊式訓練素より大切ではあるが其半面に劃一的となり箱詰式となり眞に生きた生活には到達し難い結果となる事に留意しなげやならないと思ふものである。

斯く云へばとて吾々は校舎に對する感謝、諸恩師に對する感恩報謝の念を決して忘れて居るものではない、是等周圍の感化が其の勢力却々に偉大なりしを物語つた迄である。

二、當時の縣官への感謝

大森知事、武田書記官、有吉參事官、何れも教育に熱心で吾々を愛せられたものであつた。眞に愛せられたものであつた。殊に武田千代三郎先生（後の大阪高商校長）は體育講義に實地の指導を有吉忠一先生（後の兵庫縣知事）は吾々クラスの爲に法制學講義を毎週一回であつたか。吾々は其時間が待たれたものであつた。

師範校舎の御影移轉、改築問題其他萬端に付多大な御心盡しを願つたことは申す迄もない事で、御影師範にとつては一大恩人たることを忘れてはならない。

三、日本の師範學校

御影に日本の師範校舎建設の議が確定した時の吾々クラスの歡びはどんなであつたらう。吾々は歡喜と同時に内容共に日本の師範學校を得たいと祈願した。然し其の内容の第一要件は人だ、何といつても人だ、そして吾々の覺醒だ。

吾々は苦しんだ、どう動くべきか、どう進むべきか、果して断行可能か、歩調一つに進み得るか。幾夜となくクラス會を開いた。

然し吾々は存外強かつた、自覺的にも決斷的にも、そして沈靜に、血氣にはやる者なんか一人もなかつた程に。自分の利害なんか考ふべき時ではない、不惜身命に猛進しようとして協議一決、決死的！ クラス全體が。

誤解されたら命はないもの、然しほんとに命よりも得たかつたのは日本一の師範學校、事の詳細は書くべく紙面が許さない。唯代表數名が知事邸を訪問した事だけは知る人もあるであらう。

三十二年の新學年は來た、吾々クラスの半數は御影の今の附屬玄關上の廣間に陣取つた、實地授業を練習すべく、六甲山鳴動と云ふ樂隊入りで、残りの半數は神戸の舊校舎で第四學年第一學期の授業を受けた、眞に生々した氣分で以て。

伊村學校長は廣島縣視學官に榮轉された。松尾貞次郎先生が徳島師範から新學校長として赴任された。

三十二年七月御影校舎第一期工事完了し校具機械類一切移轉。同第二學期から御影の校舎で教育開始貳百名近くの一年の諸君が入學して來た、前波仲尾先生が姫路中學から榮轉して見えた。間もなく伊賀駒吉郎先生も赴任なされた。兼附屬主事として日本一の師範段取りが着々行進を始める。

明治三十三年の三月は來た、吾々の實社會に飛出す時は來たのである。校舎も出したくはなかつたらうし、吾々出たくはなかつた。吾々クラスの御影師範に對する母校愛は、他のクラスのそれに比して特異なもの、あらねばならない事を記して擱筆

御影時代の面影

御影校舎最初の入學組

明治三十六年卒業

戸

出

熊

造

(明石女子師範學校)

私共はこの懐しい御影校舎最初の入學組で、明治三十二年九月に入學して明治三十六年三月に卒業したものであります。四月に入學すべきであつたのだが完成してゐなかつたので一學期間遅れて九月から入學したのであつた。爾來今日まで年を閲すること四十に垂んとしてゐる。今回御影姫路兩師範合併統一のため母校御影師範は廢せられ縁り深い校舎も新校舎落成と共に形骸のみを存することになるかと思ふと、實に名殘惜しく感慨無量であります。今回六十周年記念誌を刊行せられるについて不肖私に在學當時の模様を記せとの命を受けました。併し前の五十周年記念誌を見ますと澤田君や加藤君が麗筆を振つて當時の模様をよく髣髴してをられますから今更蛇足の感がないではありませんが黙止しがたく思ひ出すまゝに綴ることに致します。

入學試験

當時の入學試験は年齢に於いて満十七歳以上と云ふ制限があつたので今日よりは年もとつてゐて中には妻のあつたものもあつた。郡役所で豫備試験を受け神戸の校舎で本試験を受けたのである。准教員の資格あるものは本試

験のみを受けるのであつた。試験問題に教育の問題が出ることになつてゐた。私の受けた問題に 一、發問ノ要件如何 二、硯ヲ見テ筆ヲ思フハ如何ナル心意ノ作用ナルカ と云ふ様な問が出たことを記憶してゐる。私どもは入學に際し教育問題のために苦勞したもので私も峯是三郎氏の管理法とか谷本富氏の各科教授法などをよんでヘルバルトの教授段階などを研究したことを覚えてゐる。

當時給費の情況

私どもの時はまづ全部給費されたもので制服制帽として身に纏ふ頭の帽子から服肌着足の先まで支給せられた。學用品も筆紙墨まで貰へたものだ。私は卒業後あの晒してない木綿生地シャツ、ズボン下など佩いた位で毎月貰ふ毛筆用の礬水紙など澤山餘つてゐた。休暇時に歸る汽車賃も戴くし或は小使錢も貰つたかとも思ふ。洗濯も無料で洗濯屋へまはして戴くし病氣の時は之も無料で診断して戴き醫藥も貰へた。私ども僅かの頭痛でもすぐ當時の校醫田所先生を煩はしたことも何としても辱きことであつた。今日の師範生は二部は全部私費で一部生のみ三分の一の員數だけ月額七圓位給費せられてゐるのみだ。當時は七ヶ年の義務年限があつたと云へ何としても感謝せざるを得なかつた。

寄宿舎生活

九月假入學を許された私ども百五十名は二階建の長い棟の寄宿舎に收容せられた。一棟は上下十三室位に仕切られてゐて下が自習室その直上が寢室となつてゐた。當時の師範は總てが軍隊式で起床食事など喇叭の合圖で起床と就寢の際には點呼があつた。室には什長と云つて四年の人伍長と云つて三年の人があつて取纏をしてゐた。

掃除は一二年がすることになつてゐた。誰も困つたのはランプのホヤのよく破れることで朝火を消してランプ室に入れておくと俄かに冷えるせゐで自然に破損してゐる。その取替へを舎監室に貰ひに行くかどうかどうして破つたと責められるのは恐ろしかつた。三十五年に姫路師範が出来て御影師範に入學する人員が少なくなつたので私どもは三年になつても掃除をすることになつた。従來の慣例とは異つてゐたので文句を云つたりして見たが所詮せなければならず卒業までやり通した。

食事も今から思ふと随分御馳走で營養食だつた。よく牛肉飯など戴いたことを覚えてゐる。三大節には茶瓶トクリ茶碗酒で祝杯を擧げることになつてゐた。上戸黨はほろ酔機嫌で騒ぎまはつた。喫烟もなか／＼やるものがあつて所嫌はず陰で吸ふので危険だとなつて新聞縦覽室を喫烟室として兼用されることになつてゐた。外出は最初一週間に木曜日と日曜日との二度位しか許されてゐなかつたが後には毎日放課後から夕食時迄許されることになつた。當時の舎監は最初佐伯先生で後には佐藤先生であつた。

當時の學風

當時の學風は自由創造の學風であつたと思ふ。この氣風を招來したのは、定期筆答試験の排止せられたに起因する。私ども入學後一年程してから筆答試験がなくなつた。之がため教科書のみに離齟として點取虫にならなくともよかつたので眞に學問そのものを楽しむ風が生れて自分の好む科目は深く研究しようとの念に燃えたのであつた。それがため或は英語に熱中するもの數學に没頭するもの博物に主力を凌ぐものと云ふ風に思ひ／＼に研鑽してゐた。和歌の會が生れたり雄辯學會が出来たりして賑々しく研究会が組織せられた。それも生徒の反發的で

あつた。畏友加藤君、深井君などは和歌俳句に秀でてゐるのも「みるめ會」同人として活躍してゐたからである。併し一面その弊として音楽を眞面目にやらなかつたり。畫を書かなかつたりする様なものも出来て圓滿な修業と云ふ點には如何かと思はれることもないではなかつた。今日の師範學校にも増加科目が出来てゐることを思へば當時自然にそのことが行はれてゐたことは進歩した學風であつたと云へよう。之は試験制の撤排の生んだ影響だが今一つこのために私どもの氣風として氣宇闊大と云はうが自然と人物が大きく養成されることになつた。今日教育界に智識偏重を排せと叫ばれてゐるが試験制度を改革して人物考査の重點を改めなければならぬと思ふ。卒業後私どもは又一様に月俸十八圓也を戴くことになつた。之も試験制排止自然の歸結であつた。當時學校の考人は社會の試験を経て評價されるので單に學校の試験にのみよつて評價しておくのはよろしくない。在學中の成績が如何はしいと思つたものでも社會に出て大に教育のために貢献し立派な教育家として手腕力量を認められるものもあるとの考であつたらしい。之あるかな。今日私ども同窓のものを一瞥してもその然るを實證してゐる。

當日の先生方の教授振りと見識

私どもは松尾、小森、奥田の三校長に薰陶せられたのだが私が今から追憶すると當時の先生は何れも學識豊富で氣概のある一粒選の先生方であつたことに敬意を表する次第である。

前波先生。當時職員中で中樞として活躍して居られた先生は忘れ難い特異の存在であつた。先生には國語漢文は勿論英語法制經濟などを教はつたのである。先生は文科方面にかけては蘊蓄の深い見識の高い人で積極的革新家であらせられた。當時中等學校の國語の先生と云つたら落合直文門下の先生で擬古文家に屬する人が多かつ

た。教科書も同先生のもので中古文や擬古文の寄せ集めであつた。私どもも落合先生のであつたが前波先生來任と同時にやめてしまはれた。先生は夙に口語運動に着眼して自ら五十音を離れた口語の文典を組織して日本語典を著はされた。之は日本に於て口語文典の先驅をなすものである。先生は國語は現代生きた雅馴な口語を收得しなくてはならぬと云つて、中古文などを排して私どもには口語文からとて紅葉の金色夜叉の文をとつたり坪内逍遙の小學校の國語讀本の文をとつたりして批判鑑賞したりして教へられた。文を綴るにも分別書き方や句讀法などに注意せられ。俗屈な漢語や曰くづきの故事熟語などを使用することを嫌はれた。文の形容にしても紅葉を普通錦を飾ると云ふがそれよりも友禪をかけたと云ふ方が新味があつてよく情趣を表すと云はれてゐた。明治の四十年代に自無主義の文學の勃興するにつれ無技巧の技巧と云ふことが叫ばれたが先生は十年も前にこのことを叫ばれてゐたのであつた。

先生は又漢文に對しては日本に漢籍傳來と共に創造せられた訓點讀はよろしくないと云つて、棒讀み譯解式をとつて教へて下さつた。例へば孟子の牽牛篇に

齊宣王問曰齊桓晉文之事可得聞乎とあるのを音讀して後「齊の宣王が問うて云ふには齊の桓公や晋の文公の事を聞きたいが聞かれるか」と云ふ風に譯解して下さつた。

先生は英語も亦當時行はれた。直譯と意譯と云ふ様なやり方を離れて英文法と口語文法と對照して旨く譯された。之もむづかしいリーダーを讀むより會話を主すると云ふ遣り方で稲本メリー先生を雇うて發音によつて耳から入る英語を主として下さつた。教科書もなく英文はジャバンタイムスの新聞切り抜きを私どもに與へて譯解

をさせられたのであつた。

先生は社會の進歩は理科學の普及進展によつて來すもので語學は知識を得る方便的のものでまづ國語にしても英語にしても現代實用を主とせられたのであつた。其後國語讀本に現代人が重視せられるやうになつたのを思ふと、私は先生が見識には感服せざるを得ない。併し、私どもが教はつた分量と云つたら僅少で教材として教へて戴いたと思ふのは、國語では金色夜叉、漢文では孟子の牽牛篇位之が教材の全部と云ふべき位で、當時の社會の實情と餘り懸絶してゐたので多少犠牲になつたと思ふ。私が今日國語の教師として師範教育に従事してゐるのも師範在學當時教へられることの少なかつたのが原因で中古文など古文などを研究しかけたためである。三十年後の今日在學當時の前波先生の見識を懐しく感じぬ。

其他の諸先生のことも詳しく書きたいが餘りくどくしいことを長談義するのと思ふので簡単に止める。

伊賀先生。博學多識の伊賀先生の教育の講義快氣焰忘るゝことが出来ない。先生も亦理想家で其見識は時流を抜いてゐた。其當時先生の感情教育論は、小説中の人物の心境などを引例して平明に面白くかゝれたもので面白く讀んだことであつた。今日先生はなほ鑿鑿として樟蔭専門學校長として活躍されてゐられるが最近の宗教論の著述をよんで先生をなつかしく感じたのであつた。

西川先生。先生の物理も非常に明快によく分つた。物理上よりの音樂理論は小學教師たるべき私どもに對しての心盡しであつた。今先生は松本高等學校長として大をなして居られる。

高橋先生。先生の進化論は面白く拜聴した、先生は一言の冗言はなく整頓した教授振だつた。

大山先生。化學には造詣深い先生のこととてイオン説だの電離説だの詳しくお話下さつた。頭の悪い私どものこと反覆教授を願つたことなど忘れ難い思出である。

曾我先生。地歴の先生親切な先生として感謝の心が湧き出るのを禁じ難い。

松原先生。先生の筆蹟の美しかつたこと私どもに逆に手をとつて教へられたこと、など忘れ難い。

佐伯先生。中西先生の數學など何としても實力のある先生であつた。

若宮先生の棍棒體操の美しかつたこと、岡村先生の美術史の講義等、數へ來ると當時の先生は有能有爲の先生の結合によつて職員が組織せられてゐたことを思ふと感謝の懐しさの湧出するを禁じ難い。茲に物故せられた先生の靈を弔ひ現存の先生の御健勝をお祈りいたします。

啓發旗競走の思出

京大に於ける啓發旗競走は御影師範の名物であつた。第一回より引續き優勝したからで、私どもの折は、兩澤田君が出場せられたので私もこの仲間入をして卵と渡菰草を食して六甲山などに駆け登つたことなども忘れがたい思出である。

卒業後の級友の活躍振り

學期試験撤廢、在學中に餘り高下の評點をつけない卒業後一様の對遇と云ふ平均的な取扱を受けて卒業した百五十名の級友は、前波式の革新氣分を受けて縣下各地に擴がった。どんな成績を表はしたか。到る處で校長の意見の衝突を來たらしい。誰云ふとなく三十六年式として敬遠の群を刻みつけた。併し自由創造の教育を受け

氣宇瀾達の中に凜乎として何物にも恐れざる氣概をもつて活躍したので早くから校長となり視學となつて教育界に主きをなすに至つた。一時は縣下郡視學中の半數は三十六年組だと云はれた位であつた。三十年後の今日日本の使命に従つて小學校教育に従事してゐるものに、精道の仲本君、西灘の常見君、再山の澤田君、人丸の久保君、明石の野澤君、加古川の林君、飾磨の深井君、船場の高谷君、網干の三田君、龍野の土橋君がある。中等學校には、栃木師範の前田君、九州に梅田君、淡路に脇村君があり小野に林君がある、多紀青年學校の西羅君がある、一時神戸で羽振をきかした中安君は市教育主事として活躍してゐる。脱線組としては鐘紡の工場長だつた井口君は目下洋行中であり、淺野セメントの武田君、東京で波伯部君、などが數へられる。其他町村長として丸尾君、大野君外數名あるらしい。最近では、柏木君が代議士として當選したことは喜びに堪へない。以上は私の記憶するまゝに揚げたのだ。遺漏もあらうと思ふ。將來を囑望せられながら天死したのに田寺君、横山君其他多數の方々に對しては弔意を表して擱筆する。

入學當時の印象

明治廿七年卒業 神 谷 怡 之 吉

(尼崎高等女學校長)

入學當時の印象と云へば、池田書記の校長かと思はす程の態度言葉つきと松尾校長のまんまるい感じのする頭だけで後は皆寄宿舎の事ばかりである。

明治三十三年四月十二日、第四小團の第五分團かに入れられた。此の棟が竣工するのを待つて入學させられたのが木の香新らしく未だ鋸屑が散らばつて居つた。室員は什長(四年)が森順平君、伍長(三年)が土屋志摩稻君、二年が横田肇君大西橙太郎君吉田芳太郎君、一年が玉田龍君菅野茂一君と私であつた。

什長伍長と一年生の關係は治者被治者の關係と云ふよりは貴族と平民の感じがした。新生から四年の人等を見ると年もとり人格も出來上つた一かどの紳士と云ふよりは寧ろ親爺じみて少しも學生なんかの感じがしなかつた。めつたに言葉なんか掛けて貰ふでは無く、たまに呼ばれると週審什長室に届を出しにやられる位のもの、其さへも幾分有り難いやうな感じがした位であつた。

週審什長は黄色い紐を週審伍長は赤色の紐を肩に掛けて居つた。其赤紐の内に出石出身の澤田君も居つた。あれは出石出身の人だと新生の一人が云つたのを聞いて但馬からも豪い人が出たもんだと思つた。

入學間なしに開校式の準備だつた。二年生の人等は伏見宮様を御迎へする爲のアーチを玄關前に造つた。吾々

は其手傳をさせられた。丁度其年の五月十日には 先帝陛下の御慶典が擧げされた。國としては慶びに満ち、學校としては日本一の師範學校の誇りで歡びに溢れ、殊に二年の人等は吾々新入生が入りたてだと云ふので得意満面、五月の陽光を浴びながら

千代のとも鶴なき渡る、春の宮居ののどけさよ、

と御慶典の歌をいとも朗らかに聲高らかに歌ひながら緑門を造つたあの光景はいつも母校玄關の前に立つ度に思ひ出されるものである。

當時の學風と云へば試験全廢の時代であつた事も一原因だと思はれるが、コツ／＼學科を勉強すると云ふよりは各々其得意の道で脱出して誇とする風が盛だつた。梅謙次郎の法學通論の愛讀者があればパーマーの萬國史を繙く人あり、明星派の驍將あれば一かどの俳人を以つて自ら任ずる人ありと云ふ風に様々の豪い人がある事だと新入生の眼を驚かした。英語を外に習ひに出る位の人にはざらにあつた。其頃、隨意科は英語、農業、手工の三部に分れて居つたが、卒業後英語の先生になつた人は多く農業手工の科であつた。今から考へて見ると、あの頃の勉強がほんとの自學自習であつたと思ふ。今自學自習がやかましく叫ばれて居るし、又大いにやつて居ると吹聴して居る所は澤山あるが生徒の眞の氣持を云はせたらどんなに云ふであらう。あの頃の學習法には眞似の出来ない良い點があつたと思ふ。

斯くして一學期も終りに近づけば、恐ろしい假入學解除だ、伍長會議だ、什長會議だ、職員會議だと毎日胸を痛めさせられたあげく。完全に本入學許可とも宣告されず兎も角も眞白の洋服を着て天晴れ御影師範生として

最初の歸省を両親に喜ばせたのである。

三十年前の思出

明治卅九年卒業

藤

原

優

(武庫郡御影第二小學校長)

明治三十五年の師範學校入學生の募集は、姫路が御影より一ヶ月も受験日が早かつたので、私は先づ姫路を志願しましたが、私の郡からまゐりました六名の内私は他の一名と共に筋骨薄弱といふ理由で身體検査で不合格になりました。即ち六名の内四名が入學し二名がはねられた譯ですが、身體強健で入學を許可せられた四名は在學中及び卒業後早逝いたしました。今は一人も生存していませんのに、身體薄弱ではねられた私と他の一名は今に生存してゐます。體格検査といふものは測定又は計量出来る範圍の事に止つて、人間身體の内部に宿つてゐる健康度、生命力といふものの強弱は計れぬものと見えます。實に皮肉な實例でありまして、皮肉といふ言葉が皮、肉とからだに因んだ文字であること等を思ひ合せて一層皮肉に感じます。私は幸に其の年の御影の試験には合格いたしました。御師同窓生たるの光榮を獲た譯で、因縁といふものの不可思議さをしみ／＼感じます。

當時は假入學の制度がありまして、假入學中の緊張ぶりは大したもの。殊に什長(四年)の威光は非常なもので、注意人物は什長の會議によつて假入學解除の厄に遭ひますのですからたまりません。敬禮、掃除、食事當番、寢具の世話等がとかく問題を起しやすい機會でありますので随分緊張した譯です。しかし私は上級の圖畫の

宿題をかいやつて、よほど危難を緩和されました。

和田先生が校長としてお越しになるまでの我が校の空気が、自由で放任で随分氣儘が出来たものです。しかし其の時代の卒業生には随分立ち入った勉強もして中々の逸材があるやうに思ひます。

和田先生の御就任と共に急激に學校の空氣がひきしまつて來たので一同よほど面喰ひました。試験はどしどしある。成績が悪いと學期末に忠告がある。忠告が度重ると落弟、退學、簡易科がある。さんくんにせめつけられて、私の年次のごとき七十餘名入學して完全に卒業したのは四十二名だつたと記憶してゐます。

随分ひどくやられたせいか、私共の同期は從來に見るやうな濃瀾型の人物が乏しく、穩健中正ともいふべき四捨五入型が多いやうに思ひます。

どうも私共の學年が校風改善の過渡期にあつたやうに思はれます。

明治三十七八年の戦役は私共の三四年時代で、當時全國民は緊張の極に達してゐました、學校においても出征兵の見送り、慰問、戦捷祝賀等は實に盛んにやつたものです。當時寄宿舎は四棟ありましたが最北の寮の二階に上れば鐵道迄は目をさへぎるものがありません。出征兵輸送の列車が通る時には、物干竿に窓かけの布をしぼりつけ日の丸をかけた即席大國旗を造つて二階の窓からつき出して、ふりまはしたことを思ひ出します。

當時の御影町は舊國道以南でありまして、師範學校の赤煉瓦がボツンと田圃中につつたつてゐた譯です。東の方をみますと正門から一丁ほどへだて、長い寛のか、た水車屋がみえる丈で、はるかに住吉神社馬場の松並木がながめに入ります。寄宿舎の東側に岸澤といふ靴屋がありました。校舎の南今の高架の邊にはあまり家があり

ません、木柵から道をへだて、南に下宿屋風の家が二三軒あつたばかりです。阿彌陀の貧乏くじをひいて、夜、柵の中から、そらまめやアンパンを買ひにいつた家もその邊にあつたと思ひます。

北の方では郡家の神社附近には家がだいぶありましたが、六甲山麓は一二の別荘の外は何もありません。上石屋のお寺の近くに小さい家が二三十軒位ありましたせう。

學校の西の方では小網の本宅酒庫等が近くにあつたのみで石屋川迄は何もない田圃です。今の第一校附近に水車屋が一つあつたきりです。阪神電車がついたのが四年の時位でしたかと思ひます。神戸行も徒歩です。國道筋もときれとぎれに家があつた程度です。

虎屋の饅頭、其角のうどん、甘玉の菓子等が私共の空腹を犒つてくれる唯一の慰安でありました。相場は饅頭五厘、うどん二錢、アンパン一錢といふ見當です。

三十年間の戸口の増加と文化の發展は田圃の御影を大都市と變へてしまいました。今御影の町を通つてみると舊國道以南では昔の面影を見ることが出來ますが、それ以外では全くどこがどこやら分らない程度に昔の風物を抹殺してしまいました。

運動部は野球、庭球、漕艇、擊劍、柔道、徒歩等でした。私は主として野球、庭球、徒歩に關係してゐました。何れも選手として相當活動したのですが何しろ氣が弱いので平素の練習では相當やるのですがいざとなると常に負けた譯です。當時の庭球はまだ平行陣で氣長にうち合ひをするだけです。魔球で敵の虚をつか、敵の失策を待つといふ原始的方法です。しかしラケットでひどくすりあげてカーヴを出すことは中々工夫されて發達して

みました。前後衛に分れて戦ふやうになつたのは私の三年の時位かと思ひます。

徒歩部は其の當時も中々盛んでありまして、特に啓發旗競走は當時の呼物であり、我が校が連戦連捷して來てゐたので其の練習も中々猛烈を極めました。所謂アブラ拔練習法の實施であります。

私がアブラ拔練習法に参加したのは四年の時でありまして、同級の柏原彌三次君と共に選ばれた譯ですが、私の體格ではとても駄目ですので、部長高宮先生にお断りをいたしました。どうしてもお聞入がありませんので餘儀なく練習に加はりました。

十一月三日の出場に應ずるため十月始めから練習を開始いたしました。水を飲むな、菓子を食べな、果物もいけないといふのですからたまりません。飯、卵、ほうれん草、花かつをの一點ばりです。

十月の始めといへばまだ暑いのに、冬シャツ二枚、冬服、冬外套、しかも外套の頭巾を深くかむつて手拭で其の上から首をしめる。動かないでも汗がにちみみます。それで今日は、西宮往復、今日は六甲山頂の縦走、須磨の往復、舞子の往復と、駈歩の猛練習です。

それのない日は、大また練習、競走、時間とレース等一日も休養しません。十日も立つと眼が凹む、肉がおちる、顔が黄色くなる、小便が赤くなる。紅顔の美青年一朝にして羅漢の相貌です。體重のひどく減じたものは一貫五六百匁、私でさへ十四貫二百五十から十三貫になつて骨皮道人の相貌を一層如實ならしました。

いよ／＼出場といふ事になつて詮考の結果、正選手柏原彌三次君、菅原貫治と定まり、私と菅野宗一郎君と補員として参りました。

二府七縣の選良が晴の場所で輸贏を争つた次第ですが、日頃の難行苦行空しからず我が兩君の技量は拔群でありまして、他校の選手を十米もぬいて、肩をつらねて一二着となりました。特に菅原君が他校の選手を牽制し、先輩柏原君をまもりつゝ悠々第二着に入つた態度等涙ぐましい場面がありました。いよ／＼京都に向ふの日校門を辭するに當り主將柏原君が見送りの全校生に對し悲痛な面持で「勝たざれば再び諸君にまみえない。」と最後の自信と決意を示したこともいかにも青年らしい情景でした。

御影師範の名聲は嘖々たるもので、選手一同は錦を着て母校に凱旋、湧きかへる歡呼にむかへられて大に男をあげたものです。

四年の前半は發火演習を終りとして教生々活に入ります。私の級の茶目連中數名が銃器を返納する際掃除をしないで返してゐました。教官堅田先生が數度督促しても中々掃除をせず、「空氣中には酸素があります。さびるのはその酸素と鐵とが化合するのであります。」などと超然としてゐます。堅田先生は困つた揚句岡田先生に報告されました。そこで數名は岡田先生に呼び出されました。先生は一同に向つて、「諸君は忙しいとみえて銃器の手入をしてゐないさうですね。私も手傳ひますからここへもつてきなさい。」

一同は「すみません。すみません。」で引き下つた等の滑稽もあります。

當時紅顔の青年、今はすでに人生五十の峠にあへぎ、形容枯槁して昔日の面影もありません。

春風秋雨幾反復、時はうつり人はかはれど、嚴として變らざるものは六甲山の威風、茅渚の海の溫容、さては赤煉瓦の雄姿です。

此の間に醸された甲陽精神は數千同窓生の氣魄となつて、過去數十年本邦教育上に偉大な貢獻をいたしました。近く形式的に母校の名は消えますが、氣魄は永遠に存して後進諸生を薰化することとせう。

思ひ出すことなど

明治四十年卒業 岡田 良太郎

(神戸尋常小學校長)

私が御影を出てからもう三十年になります。光陰矢の如し申しますが、實に早いものです。當時を回想すると、淡い夢のやうな追憶が走馬燈のやうに駆けてゆきます。人生五十功無きを啣つ身には、階前の梧葉既に秋聲の感も致しますが、胸にかゞやく金釧に唯理由もない喜びを思ふたり、口笛吹いて田圃道をそゞろ歩きた若かりし日を振り返ると、それが如何にも遠い昔の出来事のやうにも思はれて、限りなく懐しまれます。

行く雲の色に詩を想ふたり、流れる小川のさゝやきに唄を聴き、さては六甲の秀嶺に端坐して、自然の悠久を咏嘆したのも、此の頃のこととあります。希望に燃え、理想に憬れる青年時代程人生に感激を思ふことはありません。青年時代の思ひ出がどれ丈け今の私に安慰と人生の奮ひを與へて呉れるか知れません。

其の頃の校舎は美しいものでした。今でこそ御影一帯が住宅地となり、宏壯な邸宅が出来、美しい文化住宅が建ち並んで、當時の面影を微塵も残してゐませんから、煉瓦造りの校舎も行人の足を留めるやうなこともありませう。しかし三十年以前には甲南の異彩として君臨し、朝日に描き出されるスカイラインと夕陽に映ゆる色調

とは、たしかに御影のもつ一景物として、人目をひき懐しまれたものでありました。獨り御影の師範たるに留まらず、日本の師範學校として其の繁榮を誇つたものです。

寄宿舎の窓に映る六甲の山容のみは今も變らないでせう。けれ共ロープウェイやケーブルカーが設けられた今では、其の内容に文化的意氣が加はつて、私の印象にある六甲とは餘程の隔りが出来ました。田園の中、東西に長く走る一條の鐵道、彼方に聳える六甲の峯、それが當時の印象です。其の間殆ど眼を遮る何物も無かつたと云つてよい位で、裾までがはつきりと眺められました。既に故人となられた恩師の面影や、不歸の客となつた知友のことなどと思ひ合せて、誠に隔世の感が致します。

その頃のことです。此の鐵道を毎日のやうに軍用列車が走りました。滿洲へ出征する爲です。昨日も通りました。今日も通りました。毎日のやうに之が續いたことがあります。その度に寄宿舎では北の窓が一齊に開かれ嵐のやうな萬歳が起つた。列車では帽子や旗を振りながら切りに之に應へる。我々のなし能ふせめてもの心盡しだと言ふので、窓のカーテンを外し大きな日の丸を、インキで描いては盛に振つたものでした。話の種のやうであります。當時の私達にとつてはそれが眞剣な生活でした。

日露戦争の前後に亘つて四年間在學した私の師範時代は正しく日本の非常時でありました。今日も切りに非常時日本を叫びつけてゐますが、確かに今日以上の非常時であつたやうに思ひます。日清の役もさることながら日露の役は正しく國力を堵しての戦でありました。條約改正に成功して稍自信を深め稅權法權の回復に自ら慰めるものはありまして、遼東還附の公憤は永く民族の血にたぎつて、日につのりゆくばかりです。かてゝ加へて

隣邦ロシアの暴慢不信の外交は、私の平和的交渉を蹂躪して、國際危機に拍車をかけるのみで、國民の輿論は極度に興奮し、忍ぶべからざるを忍んで來た義氣はも早や猶豫が出来なくなつたのです。「之以上忍べば三千年の光輝ある歴史を如何にせん。」それが此の結論でした。白人專制の惡夢より醒めしめ、極東に至大至強の雄邦ある世界に提示せんが爲に、正義の大旗をかざし、皇軍は勇躍して滿洲に出征しました。何と云つても相手は當時獨逸と共に陸軍の精銳を誇つたロシアです。世界の眼は等しく極東の天地に注がれた。壯なりと云へば壯であります、今にして思へばむしろ悲壯でありました。

やがて平和の曉鐘が朗々となり響いて、世界の中心漸く東洋に移らんとした時の歡びは又想像以上でありました。今日の國勢と思ひ比べて實に感慨無量なものがありません。追憶を辿ると、號外の鈴の音が尙新しき響を傳へるやうであり、よく口ずさんだ軍歌が耳底から若き日の魂に叫びかけてゐるやうであります。恐らく師範時代の印象は征露譜と共に生涯忘れ得ないであります。

二十八年前を追憶して

明治四十一年卒業 田 村 忠 治

(神戸市長田小學校長)

明治四十一年三月廿七日、追憶限りなき日!

日露の風雲急を告ぐるの時、殆ど八百名の志願者中から選ばれた百名のものが七十五名生き残つて新らしく巢立

つたその日!

もうそれから二十八年も暮れた今日實に感慨無量である。

願書宛名は時の視學官小森慶助先生、入學して見ると今を時めく、全國師範學長中の校長として仰がる和田豊先生、刷新と建設、全く更生の御影師範であつた。自由から嚴肅へ、校風維新のハタメキを見る、

「君達は眞に私の生みの子だ、和田の長男だ。爲すことなくば再び校門をくゞつてはならぬ。」と

聲涙共に下る和田校長の訣別の辭、まるで武門の生に育ちそのまゝの四一組であつた。

「實力のない教育者は廢物だ、口先きの教育者に非常時局を託することは出来ぬ。飽くまで鍛鍊一路で精進するのだ」と

の立場から、運動と考査、これが四ヶ年在學中の生命線となつた。

命がけで鍛へるのだ、新しい御影師範の名譽はこゝに生れるのだ。腹を造れ、腹を据えよ、區々たる小事何するものぞ。

かうした教育が涙ある和田教育であつた。

今し、懐かしい校門を辭する同窓七十五名の胸底には、シカとこの烙印が押されてゐたのであつた。

やがて希望の花は、咲き初むるのであつた。

「そろ／＼と梅の香りや春の風」

和田先生から贈られたのが丁度五年後のことであつた。

かくて幾春秋、御影師範は遂に再び師範教育の王座を占めんとするに至つた。

たしかに運動熱は燃え上つた。勝ちに勝つた。庭球も端艇も武道も、全國學生界を驚かせた、慶應何者ぞ、早稲田何者ぞ、況や全國師範何者ぞ、たしかに運動王國建設の礎は築かれて來た。

人物も出た。高師に勢を得、帝大に勢を得而も又全縣下活躍の根は下されて來た。

愈々御影魂、武庫魂の花は咲き初めた。而もそこには、御影師範と和田校長、和田校長と四一組、の親しみ深い感激の交流が見られるのであつた。

かくて健氣なる若者の群はグン／＼頭を擧げて來た。而しながら敢て小策を弄するものはなかつた。對立分立の愚策をもつて勢を争ふものはなかつた。明るく正しく、強く一路を精進するのみであつた。

「大御影の面影」を培ふことのみがその信念であつた。

たしかに、物を言ふの一切は、和田教育に培はれた實力そのものが言はしめたのであつた。事を爲すの一切は、和田教育に培はれた實力そのものが言はしめたのであつた。事を爲すの一切は、和田教育に培はれた實力そのものが爲さしむるのであつた。

これは實に、四一組の信念であつた。

それもその筈である。

随分考査に苦しめられて來た。キャンドルも生き貫くための最後の手段としてやむを得ないものであつた。

随分運動に苦しめられて來た。「ヤケ貫」の尊稱が全校に響いたのもその時のことであつた、死んだ筈の菅原は

やつぱり六甲の谷底に信念の人として生きてゐたのだつた。

それに、御影始めての大火、寄宿舎の大火、時の消防隊長であつた自分は、思ひ出すだに身振ひがする。

働き貫いた四一組、時の最上級、殆んど在學中の全資財を焼きつくしたのであつた。行李一つさへ無かつた四一組、でも、遠く丹波路から急遽歸神せられた校長、和田先生の

「一切は自分の罪だ、自分の責だ、すまぬ、許せ。」の

あの一語に感激の奉仕を献げつくした四一組、嚴冬を雨天體操場に凌いで只管涙の奮闘史を編み上げた當時を思ひ、丸焼けになつても尙焼き切れなかつた四一組の魂は、たしかに殊勳に價ひするもの。

而も、時は國難來の眞只中、日露大戰の火の手はつた眞最中、非常呼集の喇叭は時もなく響き渡る。出陣の見送り、負傷軍の慰問、全く晝もなく夜も無かつた。

得意の大山元帥、兒玉總長、傷ついた小川將軍、桂隊長、住吉驛の酒樽、白衣の將兵、北側寄宿舎のカーテンは一つも無くなつてしまふ。やがて凱旋、狂喜の旗風に亂舞した當時を追憶し、身を忘れて學び、身を忘れて鍛へ、身を忘れて献げ、身を忘れて喜び、全く健闘と奉仕の師範生活四ヶ年を多忙のうちに過したのであつた。

而しながら、そこに自ら愛校の一念と、愛國の大義が體驗し得られたのであつた。

殊に、その間に於て嚴父和田先生の内助役として終生を御影師範へ奉仕せられた、慈母岡田先生を拜ますには
ゐられなかつた。

「師 聖 岡田先生」

これ以外に先生にさぐる最高至純の誠意は見出せない。

御影師範を語る最後の幕は今將に下されんとす。

而しながら、岡田先生の無量の慈恩は、私達の胸奥深く尊像として永遠に刻まれて行く。

同時に、當時、親しく育くみ給へる恩師先生の面影の凡ても私達の前途に無限の光明として輝く。

時は過ぎ行く、花は散る、

されど思ひは深し、母校御影師範、

追憶思慕の念は愈々胸に迫る。

かくて、二十八年後の今日、七十五名の動靜如何を思ふ時、實に感慨無量のものがある。

あまりに強く過ぎたものもあらう、あまりに男氣を買はれ過ぎたものもあらう。

或は、健闘に疲れて、あはれ果敢なく散り果てたものもあらう。尙、健在、孜々として育英聖戦の陣頭に活躍しつゝあるものもある。

その何れにしても、人生の半ば以上をこの道に精進せる同窓の面影や尊くもかしこし。

母校よ、天下の御影師範よ、

今や將に創立六十周年の意義ある最後の日！ 而も榮ある歴史にその一頁を加へんとして熱涙の降るを覺ゆ。

あゝされど新生を孕んで無限の歴史創造の一大轉機に直面せるを思ふとき敢然として、再び健筆を握つて四一組の健闘を祈らずにはゐられぬ。(昭和十一年一月三十日)

記念誌編纂資料

明治四十二年卒業

平 出 眞 九 郎

(豊岡高等女學校長)

1、當時の教授の模様

約三十年以前のこととして教授の内容は殆ど頭には残つてゐないが、先生方の熱心なる御教授振は今も尙感銘新なるものがあり當時を追想していつも感謝して居る。我々を教ふるために前日に周到なる準備をされ夏の日など夜にかけて蚊帳の中で細密なる教授の案を立てらるゝと言ふ有難い先生もあることを聞いて居た。併し實際教授の方法も我々の教室での勉強の仕方も技巧的な處無く平凡であつた。文部省の大島視學官が視學に來られたことがあつたが、數學の時間に前方に席を占むる自分の處へ來て「ノートを見せよ」と言はれ「ノートは作りません」と答へたことを記憶して居るが、ノートなど餘り作らなくても困らずにやつて行けた。一年に入學した最初松井先生の周到なる國語の授業を受けた。一點一畫も八釜しく假名遣も細かに注意され常に「そんな事では人の子を害ふぞ」とのお言葉に田舎育ちの粗大なる頭の我々は尠からず蒙を啓かれた。數學の柳澤先生の要領よき御授業、教科書に捉はれずに要所々々を確實に生徒の頭の中に叩き込み、後はどしどし生徒自らやらざるを得ないといふ巧みな御指導振りである。英語の脇屋先生は特に發音に御注意になり、御自身は發音のために學生の時から酒も煙草も一切禁じて居ると仰言つたことがあつた。當時の師範學校は英語は隨意科で而も毎週の時數が少いたために

課外に非常なる御指導を賜つた。音楽の米野先生は嚴格で間違つたことを歌へば幾度となくやり直すと命ぜられ調子の合はぬ吾々にとっては苦手で「始めつから」の御連發。一日同級の某君授業の合間に鍵のかゝつてゐないのを幸ひ、教室のピアノを一二度弾いた所を見つづられて忽ち一喝「お前方の觸るものでない」と爾來ピアノの普及した今日に至るまでピアノは貴重なものとの印象が深い。地理の會我先生はいつも統計を基にしての正確なる御教授振り。板書を遮る面積を少くするため板書さるゝ時塗板に直角の姿勢をとられた歴史の原田先生はお話が上手で芝居を見て居る様な感じがした。上級になつて和田校長に修身と法制經濟を教へて戴いた。諄々たる教へ方、吾々の下手な質問にもいとも懇切なる御答解あり、殊に生徒の動向には御注意深く、或る學期末試験勉強のために運動場が寂れて居るのを御覽になり、「自分の學科は試験を止めるからせめて其の時間の分だけでも放課後に運動せよ」とのお言葉に一同感奮し平常運動せぬ自分までもラケットを持つて運動場に出たことを覚えて居る。實際先生のお言葉にはいつも我々の感銘の深いものがあつた。博物の山鳥先生は吾々の入學と同年に御影御赴任でアツサリとしたよい先生で何を尋ねても決刀亂麻の明答には一同感服した。岡田先生は吾々よりも五ヶ月後れて明治三十八年九月に御來任になつた。先生の御言葉には難解のことも少くなかつたけれども吾々はいつとも温い先生の懐にあり最もシンミリと至誠奉公の魂を養つて戴いたのは先生である。自分はいつともかう思つた「先生の如き崇高なる人格と燃ゆる慈愛とを以てすれば假令意味の分らぬことでも精神は充分に通ずるものである、方法の末にのみ捉はるゝは愚の至りである」と、體操の高宮先生も圖書の岡村先生も若くて元氣よく克く我々を導いて下さつた。教へる方も學ぶ我々も肝膽相照して學々として奮勵した。雑誌「甲陽」の創刊されたのも此の

時期である。内容に於ても形式に於ても天下の御影師範となつたのは實際我々の學んだ時代であると信じてゐる。

2、特殊の研究會のこと

數學同好者の會博物の會、などがあり何れも盛なやうであつたが、自分は之に加はらず、初年級の頃より脇屋先生の英語の特別指導を仰ぎつゝあつたが、其後英語の好きなものが相集り御影教會にて毎日曜日に聖書の講義を聴くことにした。尤もそれまでに校内にて一年上の森又雄君等が肝入りしてゐた同じ目的の白羊會といふのがあつたが間もなく講師カミング師が歸國せられたので會は無くなつた。そこで光聲會といふ名の下に關西學院のヘーデン博士やガーナー女史を聘し熱心に研究した。吾々の意志が聖書の内容を知るといふよりも語學の研究にあることを博士も女史も諒せられ、懇切献身的に教へて下さつた。今は山口高商教授の菱川精一氏が當時學院の學生で兩師に附添ひ何くれとなく世話をしてくれた。自分は下手ながら英語を少しづつ聞き嚙つたが、其後英文で何か書く必要の起つた場合頭に浮ぶ言葉には當時聞き覺えたものが少くなかつた。大阪英文毎日が創刊された頃時々拙いながら寄稿したが筆をとる度に昔の恩恵の感謝した。この會は卒業後も繼續したらしいが自分等より以上に此の會が役に立つた經驗を持たれた方が少くないことと思ふ。

3、寄宿舎の生活

三年頃の寄宿舎全焼までは大寄宿舎制であつた。舎監長柳澤先生以下四名の舎監指導の下に寮長四名副寮長四名炊事長一名炊事委員二名、其他購買部委員、休養部委員、警備部役員各若干名あり。建築物は中央に談話室

舎監室、寮長室、食堂、炊事室、それ等を挟んで寮舎二棟づゝあり。生徒の室は各棟十二室づゝにて上は寢室下は自習室であつた。各室定員室長以下八名づゝで喇叭の合圖により毎日規律正しく生活した。入學式の時上級生代表の挨拶に「舎は階級制度では無いが秩序は正しく保たねばならぬ……」の意味の言葉があり動作と言ひ整頓と言ひ整つたものであつたが、尙從來の弊風が残り下品な言動も無いではなく下級生の時一部の者は無意義なる制裁を加へられたりして見るに見かねたこともあつた。自分等の上級の時この弊風打破に同志の者が相當力を盡したが及ばぬ點もあつた。四年の終り頃新寄宿舎が建設せられ、神戸より持越しの南京虫も居なくなり弊風も跡を絶ち、和田校長岡田先生の温かなる膝下に居心地よく薫陶を受けることが出来た。

4、教生々活

同學年甲乙丙の三組が一ヶ學年の三分の一づゝ練習生として附屬學校に行つた。たしか關引でその先役を定めたりやうに思ふ。小學校の各組に一名若くは二名づゝ配當せられた。主事の中野先生は鷹揚で人格高く而も綿密な人であつた。老練なる樽谷訓導氣骨ありし玉木荻野澤田の諸訓導其の他の先輩諸君に懇切にして忌憚なき批評を受けつゝ實地練習を行つた。人を教ふることは六かしいと始めて悟つた。本校の教室で先生に小言を言はれると「これでも附屬へ行けばうまくやります」などつまらぬことを言つた連中も實地教授には屢汗をかいた。本校先生方の御親切と御指導がつく／＼身に沁んだ、時間のあとで受持訓導及時々他學級の訓導から批評を受ける外に各一回づゝ研究授業をなし、本校からも關係學科の先生の御臨場を仰ぎあとで盛なる批評會があつた。「個性を考へよ。右するも左するも何れでも差支無きことまでも一律に拵げて一方に揃へるやうなことをするな」など

と教育の時間に教はつたが、實地の應用は六かしかつた。それでも子供は有り難いもので吾々にもよく懐いてくれた。

5、御影式

母校に育つ者は御影式の特徴を持つてゐた。純真で街氣無く率直で術策を弄しない。即大和心の特色を濃厚に持つてゐた。故に一般に偏頗無く包擁力豊かにして眞摯で淡泊である。後東京に居た頃嘗て母校の先生であつた吉田彌平先生やら西川順之先生等までが失禮な言葉ながら同じ型でいらつしやる様な氣がした。「一社會の指導者の精神をよく理解して、その社會の使命のために行動する各員は、その指導者と共にその社會の歴史を構成する」といふ意味のことをする人が言つたとのことであるが、母校も先生方の御指導の下に大勢の手によつて光輝ある歴史が作られ立派なる傳統も築かれた。素より尙洗練を要するものありとするも、この御影式眞精神が永遠に宣揚せられて行くやうにと希ふものである。

そ の 頃

明治四十四年卒業

谷

口

幹

治

(神戸市山手小學校長)

卒業後滿二十五年の春を迎へた。

「免狀がものをいふ。」世の中なので、たつた一枚の小本正の免狀きりで、既に二十五年の勤績をして來た。轉

職もせず、向上もない。意氣地が無かつたのであるし、偷安になれ過ぎたのもあつた。併し、小學校の先生を養成する學校を卒業して、只管に小學校教員に終止して居る事は、尺寸の功なしとするも、申譯だけは立つ様に思ふ。

【一年時代】

上下する窓——入學當初から羅紗に金釦の制服を着せられたのは、恐らく自分共の一年生が始であらう。學年を表示する羅馬數字の襟章を用ひたのも、さうではなかつたか。その頃の書物の廣告に「金文字入總クロイス」の文句があつたのを思ひ出す。

何しろ田舎の貧家育ちが、石造の一階、赤煉瓦の二階、堂々たる本館校舎に、洋服を着て學ぶことの驚異と光榮は、三十年の昔を知る人になら、察しがつくであらう。田舎の學校しか知らない者には、窓といふものは硝子障子と引違ひとのみ思ひ、教室の机は二人連用のものとのみ思つてゐたのに、上下する窓と一人専用の机には恐れ入つた。

何故か黒い木柵と、絲を垂れた柳とが、はつきりと思出される。

スリツパ——當時の寄宿舎は勿論、教室へも常用すべきスリツパを、確か食堂脇の先用購賣部で買った様に思ふ。スリツパといへば洋風の上履と心得て居た者に、所謂麻裏であつたのが異様であつた。

入學間もないこと、夕食後自習に取かゝる頃、寮長（當時は四年生の週番）の大きな聲が廊下に響いた。

「新入生は直に談話室に集れ。」と。

何も知らずに薄暗い談話室に上つたのだが、抑々これがこの始であつた。百何十疊敷といふ廣間に、寮長用の提灯が四張だけの明るさ、ハッキリしないが前の方には怖い四年生がズラリと並んで、其の前へ新入の一年生が座らされて居た様だ。後れて入つて自分共は後方に席を占めた。

「後の方にスリツパを懐に入れて居る者が居るぞ。」

暗い處で脱ぎ捨てゝは、見失ふ惧があると思つて、實は懐に忍ばせて居たのであつた。併し、此の一言にギツクリしたのは、必ずしも自分だけでは無かつた様である。

通 知——喇叭による起床から消燈迄の一切の行動、寢臺に寝ること、朝夕の人員點呼、ランプ掃除、門鑑を掛け外しての外出等々、霜降の夏服を着る頃には、寄宿舎生活にも相當馴れて來た。

かツコメの喇叭で集合する食堂にも、一年生には一年生らしい感懐があつた。朝の味噌汁、三度の漬物にも挿話がある。一番印象づけられて居るのは、

「通知。」といふ一種張上げて週番寮長の聲である。カチ／＼と瑛瑛皿に箸を置く其の音である。

全生に對する舎監又は週番からの令達乃至は通告が發せられるのが通例であつた。

二階から飛ぶ——突如、非常喇叭の音。

寮内に響渡る不時呼集。

豫ね／＼聽いて居た夜間演習か、それとも近火出動か、一年生は跳ね起きて着服、ゲートル迄はめた。（當時

のは無数の釘止)

「寄宿舎が火事だ。」

ドク／＼と亂れた足音、異様な叫聲、煙、焰。

「非常搬出。」「避難。」

相次ぐ傳令、夢中で舎外に飛出したが、四寮三室に居た内藤強二君、平山銀次君、鈴木胖治君等は、此の時二階の窓から寮庭へ飛降りたのだ。不思議と怪我も無かつた。

豪壯を誇つた三階建五棟の寮舎も、瞬く間に焼失した。一面の火の海は手の着け様もなかつた。

十二月十六日、置く霜白き早曉、積の如く一變した其の焼跡を見て、實に感慨無量なるものがあつた。三年以下の生徒は即日歸休、何分通知を待つことになつた。

非常時——應急對策は神速明快に講ぜられて、三學期は所定の日から授業を受ける運となつた。一部の教室や講堂に、疊が敷かれて宿舍に當てられた。不自由の中にも非常時らしい氣分が漂つた。

かうした中にも、「山邊も野邊も霞み渡り……」と、卒業生を送る送る歌の稽古も始つた。

うがつ——「應援團」「MNの三角旗」「フレール」「穿つたよ。」「那家へうねる。」「バー」「直角」「キャンドル」等々記憶に甦るものがある。

【二年時代】

熱心家——在來隨意科目とせられて居た英、農、手の三科は自分共の年次から必須科目に加へられた英文法の失策や、茶ツ葉を蟲に食はれた話や、本工の差込組に木屑を糊詰にして提出した等、今猶苦笑を禁じ得ない連中が相當あつた。

世間には、「師範の英語位知れたものさ。」と安價に評する手合も居たかは知らぬが、茶谷茂君、岸田興三君、習田敦君、築谷福治君、富田辨司君、恩地鬮平君、岡本繁雄君等錚々たる權威を擁して居たのであるから、決して侮る事を許さないものであつた。時間の少い割に多士濟々であつた事は、脇屋先生の御苦心の程が察せられる。英語會の外に、博物館といふのもあつて、山島先生を中心の研究會で、日曜毎に胴亂を携へて、植物採集に出かける熱心家に山崎重幸君があつた。

共同運動——一年時代にはどの運動部にも輪番でやらされたが、二年からは志望別の部に參加した。庭球、野球、劍道、柔道、漕艇、徒歩等の各部があり、一週二回出席點檢をしての實施制度であつた。(蹴球部は三年時代以後だつた様に思ふ)

正科の教練や體操の外に、此の運動競技を課せられた事は、青年期の教育として極めて適切な方針であつた。心身の鍛鍊を行ひ資質の向上を圖る上に、有力な手段でもあつたし、後に各部が近府縣中等學校間に、壓倒的制覇的な優位を占むるに至つた基礎でもあつた。

その秋——茅渚の浦田の秋高き十月、帝國の艦艦をみそなはず大觀艦式が行はせられた。神戸港外から魚崎沖へかけて、恰も數學教室乙を宿舍とされて居た自分共は、一眸に之を大觀する事を得、輝かしいイルミネーシ

ヨンの夜景をも満喫したのであった。

甲陽の創刊——當時青年日本の文壇に、其の聲名を馳せて居られた先輩、七里重恵氏、玉島孝次郎氏、森脇卯市氏によつて、新設された學友會に雜誌「甲陽」が生れた。

永瀬先生が主事として御指導になり、松原先生が雄勁にして雅味ある表紙の文字をお書きになつた。清楚な其の氣品、充實した其の内容……立派に特色づけられて誕生した。

【三年時代】

羅漢廻し——自治と協同を眼目に、家庭的な潤に満ちた新寄宿舎が完成して、夫々の學年半數單位に八寮へ配置された。自分共の學年は山鳥先生の寮に收容せられた。ごんた盛りであつた爲に、随分先生方に御苦勞をかけた事と泌々思ふ。自分共でせねばならぬ清掃整理の仕事等を、先生の御手を煩はして恐縮した覚えもある。今は亡き勇内信次君が、率先整頓の實踐をやつて呉れたのも其の頃であつた。

無邪氣な騒ぎ方で、「羅漢廻し。」といふ遊びが、迎も人氣を博して、宿舍のあちこちを賑はせた事があつた。

人生への開眼——學校長和田先生に論語の講義をして戴き、岡田先生に「人生の價值」と顯して聽かせて戴いたお話とは、今だに生活信條をなして居る様に思ふ。一は徳操への開現として、一は人生への開眼として、泌々と深い感銘を抱いたのであつた。

漢文は永瀬先生であつた。いつぞやの試験に外史の白文を出されて、「詣」といふ字を窮通の理でイタルと讀ん

で當つた事を思ひ出した。國文研究に興味を有つ者への課外講義として、「秋の姿」で有名な玉井先生に、「徒然草抄」の手ほどきをして戴いたのも三年の時だつた。

大任先生の立體幾何を解しかねた自分共ではあつたが、宮澤先生に三角の課外講義を願つたのも、此の頃だつたと思ふ。

農業の試験の一問題に、「農場の廣さを問ふ。」といふのがあつて、何でも見當外れの答であつた爲、逢阪先生に「三年も知らぬ男と交際し。」と川柳でひやかされたのも三年の時だつた。

大野先生の物理、神谷先生の化學、山鳥先生の博物、何れも講義と共に夫々の實驗をして戴き、専門學校生らしいノートの出来て行く悦や、眞摯な學校らしい研究態度を嬉しく思つた。

曾我先生に地理と地文を教はり、地圖の描方や模型の作方を傳習して戴いた事が、卒業後どれだけ役立つ事か。歴史はずつと三幣先生であつたが、此の頃の西洋史よりも東洋史の方が興味があつたのは、自分共が史情に通じ易い故でもあたらうか。

妙案令——後には確か御法度になつたと思ふが、休を控へて歸郷に際し、購買部の何品に限らず掛賣をした様である。好評を博したもので、名づけて妙案令といつた。

夏休の族——此の年の夏休に、佐々木周治君、北内久幸君、高橋勢多君、自分と四人連で、京都、滋賀、奈良和歌山方面へ、史蹟巡りと探勝の旅に出た。實に楽しい自分等のみの初旅であつた。交通機關も今日の如く完備しない時の事、無邪氣なダブルの彌次喜多であつた。

大阪北區の大火を京都で聞いた。

鶉といふ——學友會に學藝部といふのが出來て、前年出來た雜誌部の外に、談話部が新設せられた。

初夏の夕、講堂に辯論會が發會せられた。細田敬一郎君が「優等生を鶉といふ。」なる名論を吐いたのは、其時だつたと思ふ。

脂肪拔——御師傳統の走法鍛鍊に、五十日間の脂肪拔といふのがあつた。我が啓發旗選手が晩夏から仲秋へかけて、連日の猛練習は實に御苦勞だと思つた。田岡新君が京大の運動場へ、晴の出場をしたのは此の年であつた。

【四年時代】

各部の陣容——御影の運動は歴史的強味を有つて居た。記憶に誤も多からうが、漕艇部には藤本君、松本君、平井君、酒井君、長澤君、鳥羽君、伊藤君、笹倉君等の猛者揃ひで、常勝軍の名を擅にして居た。野球部には高見君、上原君、廣田君、瀧本君其の他があり、高見芳一君の捕手振と來ては、當時の中學球界を震撼せしめて居た。庭球部には神戸君、仲野君、石野君、塚本君、宇野君等があり、關西庭球界に重きをなして居た。

柔道部には長島君、近藤君、仲野君、田中君等の強豪があり、劍道部には内藤君、岡本君、稻津君等が道場の雄であつた。運動各部がOY團長だつた北垣君に蒙つた幹旋と厚意は、忘るゝべからざるものがある。

學藝部には、篤學瀟瀟の士、習田君、伊藤君、谷口眞一君等があり、想華と詞藻との豊かさを湛へて居た。

修學旅行——遠足や見學は勿論、四年生の教生旅行等は在來許されて居たが、縣外への宿泊旅行は未だ認められて居なかつた。先輩の諸賢の熱望と運動により、學校當局の英斷と相伴つて、遂に東京への修學旅行は、幸にも自分共の時に實現せられた。

時しも名古屋市に開催中であつた共進會の開期中にと願出て、六月上旬に出發する事となつた。

伊勢大廟と熱田神宮への參拜、名古屋の共進會見物、雨の箱根越、江ノ島鎌倉の觀光、憧れの東京見學、日光中禪寺の探勝等々、二十六年昔のこと、旅費實に十八圓也の大旅行であつた。

教生と教官——「教生先生」といふ珍妙な呼名も、一向不思議ではなかつた。自分共の組は第二學期の練習生であつた。高等一年男生に配されて、仲野榮助君と共に福田先生の御指導を受けた。なか／＼確りした生徒が澤山居つた。今でも相當その名を覚えて居る。先日六十周年祝賀會場で、福田先生を御見かけしながら、御挨拶をしそゝくれて、洵に残念であつた。

第一と第三學期には、當時の一年生諸君の高宮先生の御教導の下に、號令練習やら體操の實地指導研究の機會とせられて居た。「教官のバー」までして貰つて、偕てどんな指導をした事か、今思つても冷汗ものである。

鶉と鶉——咽喉の名人で琵琶歌に興味を有つた上原常三郎君、吉川榮之助君等を中心に、鶉會といふのが組織されて居た。一方に習田君、高見君、北垣君、神戸君、佐々木君、勇内君、岡本君、伊藤君、谷口等俳趣味の連中で鶉會を興し、運座等も試みて居た。何しろ師匠なしの句會だから、隨分如何はしい句もあつたと思ふ。それにしては殺風景だつた寮舎の柱に、句の短冊が吊されたりしたのであつた。

奉送迎——筑紫平野の陸軍特別大演習を御統監あらせられる爲に、行幸遊ばされる 明治大帝を、神戸の波止場近く奉送申上げた時、畏くも御馬車に拜した龍顔は、今も猶神像の如く髣髴する。

李王世嗣殿下が、御修學の爲東上せられるのを、住吉驛に奉送迎したのも、此の年次ではなかつたか。

愈々卒業——掲示せられた和田校長先生の戒告、「未ダ雨ラザルニ先ダチ……」の名文、岡田先生が音楽教室へ自分共を集めて、諄々と胸を抱いて自重した。

「四歳の月日限りぞありける。」

終に自分共も卒業期を迎へたのであつた。

校歌禮讚

大正二年卒業

今

井

清

(神戸市荒田尋常小學校)

すめおほぎみの	みことのまゝに
いやひらけゆく	まなびのみち
ゆくてはとほし	ちぬのうみ
なみかぜたかく	すさむとも
いさやもろともに	こぎいでばや

卒業式の日、無量の感に打たれながら、涙で歌つた此の校歌を今も尙、私は忘れる事が出来ない。

★ 海外に在留する日本人の、最も懐しいものは日の丸と君ヶ代と日本語であるといふ。私どもも、其れと同じ様な意味で、星の校章と校歌と御影といふ言葉の有つ響きに、無限の慕しさを感じる。

大正二年に卒業して以来、既に二十餘年の歳月を過して來た私どもであるが、其の間に催された私ども同期生の會合では、常にプログラムの最後には、必ず校歌合唱が編まれてあり、且つ忠實に實行されて來たのである。今プログラムといつたが、勿論その様なものがある譯ではなくて、互に久潤を敘し、清祥を賀し、往時を語り合ひ、現在を談じ、和氣霽々たる數刻を送り、尙、會の幕を閉ぢ得ぬ時に、有髭無髭の親爺の口が、昔懐しい校歌の合唱に統べられて行くのをいつたのである。安坐から全員起立に、それ迄の暢達な気分は一轉して緊張に變るこの一瞬間程私どもが、母校を愛慕する心情を端的に表現する場合は尠いと思ふ。

★ 最近の出來事であるが、私どもの同期で、現在東京高師教授である山本政治君が、獨逸へ留學する途次、横濱から神戸へ寄港した。其の夜は、同期生によつて盛大な送別宴をなし、翌朝同君を、突堤に見送つた。なか／＼盛大なる見送りであつて、それらの人々の中には、岡田先生はじめ、母校の新舊職員、同期生十數名その他多數の先輩後輩の顔が見えた。渦巻く人々に取巻かれた同君は、輝く希望を面に漲らせ、一々挨拶を交はせてゐたが、廳て出帆の銅羅が鳴り渡り、まさに船が鹿島立せんとした瞬間であつた。どこからともなく、又誰の口からとも

なく、あの懐しい校歌の合唱が流れて来た。私も歌った。私の隣の人も又その隣の人も、いや皆歌つてゐた。此の歌のもつ莊重な氣分が、遠い異郷に遊學せんとする私どもの舊友を送る此の場面に、一層びつたりして、鎮つた興奮を送る人、送られる人に與へたに違ひない。私どもは、いや少くとも私は、校歌を歌つてゐた間に頭の中をかすめたものは、送られる人、山本君の姿でも、照國丸の船體でもなかつた。たゞ御影師範學校であり、御師時代の思ひ出の數々であつた。恐らく舊師舊友によつて歌はれる校歌の饒をうなだれて受けてゐる山本君の胸裡を去來するものも、勿論、母國を離れゆく憶ひでもなく、私どもの姿でもなくて、過ぎ來し方の御師生活の一つ／＼であつたのではあるまいか。私は山本君の双つの眼に白く光る涙をさう解した。

★

校歌は何時きいても嬉しいものであり、何時歌つても楽しいものである。例へ學校が新しくなり在來の校歌が用ひられなくなつた場合でも、私どもは常にこの校歌を忘れず歌つて行き度いものである。仄聞する所によると、この度、六十周年記念事業の一として、校歌をレコードに吹込み、同窓生數十名に頒布するとの話であるが、まことに時宜に適したよい企であると、双手をあげて賛成したい。

現今の教育界では、私どもの年配になると、どうかすると老年組に入れられる。これは甚だ怪しからぬ話であつて、例へ幾人もの子供の親にならうとも、又、頭髮が薄く疎らになつて來ようとも、意氣に於て缺くる所がなければ青年と變りはない。況して私どもはまだ／＼若い。御奉公はこれからである。校歌レコードによつて、何時までも、御師時代の熱と意氣を心身に躍動させつゝ、棘の斯の道を進みたい。

母校の六十周年は吾等の二十周年

大正五年卒業

足

立

悦

治

(兵庫縣廳社會課)

吾等の組は此の邊だらうと、會員名簿の後から、三分の一程の所を開いて見ると、こは如何に、昭和五年とある、是れは年號が一世紀後だ、こんな筈は無い、もつと若いつもりだが、と稍不満らしきものを覺えつゝ、前へ繰ると、何ぞ、大正五年は、半分よりもまだ前の方だ。成程考へてみれば無理もない、吾等の入學許可證には明治四十五年三月と書いてあり、大正年代の第一回入學生である、そして今年は、早くも卒業後滿二十年を經過し、社會的に獨立して既に二昔にもなるのである。

卒業記念の、アルバムを出して見ると、何れも可愛い、美青年揃ひなのに、それが、今回の二十年記念寫真を見ると、何たる偉大なる紳士揃ひである事よ。薄白い頭、圓かつた筈の顔が長くなつたの、頭顔の境界線不明瞭なもの、中には電燈の光を反射して、ハレーションを起してゐるのさへある、物凄いい光景、どう慾目に見ても古以上の逸物である。

吾等第一部の入學生百名は、半分は北寮一、曾我先生の寮へ、半分は西寮一、永瀬先生の寮へ、そして三年間、師として、親として、餘りにも、十分に、親切な、お世話と、御指導を受けた、時には亂暴もした、命令にも反した、そして幾度となく叱られた、けれ共それは、慈愛の親への駄々であり、又愛する子への誠めであつた、

それが今は、言ひ知れぬ、懐しき追憶の印象である。

後の一年は、和田校長と、岡田教頭の寮へ半年づつ、これぞ最後の磨きであり、仕上であつた、思へば思ふ程、懐しきものは甲陽村の生活であつた。

斯くして九十一名が卒業したのであつたが、それが今は幽明境を異にして、他界せし者、十五名、残る七十六名中、本来の使命を全とうすべく、専心初等教育に従事して、國家教育の爲に奮闘しつゝある者は、僅かに五十六名と成つてしまつた。人生の線香を中から二つに折つて、前半を小學校教育に盡し、後半を、己が欲する方向に轉じて、人間生活を擴充し、更に進んで國家社會に貢献しつゝあるものが二十名。

昭和十一年三月八日、母校六十周年記念の日、神戸に於て、吾等の二十年前記念大會を開いた、此の日集つた同窓同志、四十一名、お互に顔見合せて、「ヤア」の一言忽ち寄宿舎時代の昔に歸つて思ひ出す「バー」の氣分。此の日、和田、岡田、永瀬、會我、山鳥の五先生が、お出で下さつて、親しく膝を交へて痛飲快談、昔嘶に花が咲き、何ともいへぬ嬉しさと、懐し味を感じた、そして恩師を園んで、腹から高唱した「すめ大君の」一同は感激の涙に胸一ぱい。嗚呼、御影師範の名よさらば、光輝ある歴史と傳統の精神甲陽魂よ、何所へ行く、校名は變るとも、吾等は之の魂を體して斯界に飛し、永遠に傳へて教育精神の眞髓となさん事を誓つて止まぬものである。

大正四年度から、第二部が設置せられて、其の第一回生が吾等と一緒に卒業した三十四名の兄弟がある。内二十四名は今日も尙教育に従事して、大いに功績を收めつゝあり、二名は惜しくも物故された、同じ道を辿る同期卒業生、お互に相提携し協力して育英の道に精進して來たのであるが、今後は尙一層、力を一にし、親を密にし

て、相共に斯道の爲に精勵したいものである。

過去二十年を追憶しつゝ、思ひを六十年の昔に馳せながら、吾等大五組の現在を考へ、將來を祝福すると共に、母校の進展、新兵庫縣師範の發展を祈つて止まぬ次第である。

たゞ一言

大正七年卒業

福

井

一

雄

(美方郡村岡小學校長)

恐らく、當時の諸先生にも、上級生にも、下級生にも、ひよつとすると同僚達にも、その存在すら認めて貰へなかつた自分である。

甲陽村在住四ヶ年、一體、何處で、何をしてゐたのか？ 今ふりかへつて、まこと漢として夢！ 自分にも分らない位だから、まして、他人様に分つて貰へる道理はない。

だが、いひ得る事の唯一つ

「自分も甲陽村民の一人であつた。」

年甲斐もなく、些か感傷めくが、かう決然といひ切ると心氣とみにたかぶるを感ずるから妙だ。

卒業來十有八年、又夢の如し、何處で、何をしてゐた。といはれると、又返事に窮する。が、とに角生活の原

動力となつてゐるものに所謂甲陽精神なるものがあることは否めない。——ひよつとすると、もつとお、えらくなれなかつた所以もそこにあるかもしれない。——

甲陽精神とは？　なんて吟味は、凡そ、日本精神とは？　なんて科學的に究明し様とする以上にむづかしいかもしれない。が、まあ、最も手近かな周囲を見ることだ。仲間には仲間の魂が脈打つてゐる。これだ。

校舎が移轉しようが、合併しようが、連綿として生し立てて行くべき精神であることにはかりあるまい。

思ひ出づるまゝに

大正七年卒業

藤

井

寅

吉

(尼崎中學校)

◇理想に生きる多感な青年期を憧れの師範學校に送つた我等同窓生は母校の創立六十年記念を迎へて誠に喜ばしく嬉しい。殊に母校卒業後引續き附屬小學校の訓導となり本校の教諭となつて、人格修練の青年期をこゝに過し、今尙朝な夕なに巍然たる母校々舎を眺めつゝある私にとつては今六十周年を迎ふると共に近く光輝ある歴史を閉ぢんとするに當りては誠に感慨無量のものがある。

◇私が母校を卒業したのは大正七年三月である。校長に嚴然として偉大な人格の和田先生、教頭は慈父溫情の君

子を偲ばしめる岡田先生であつた。講堂に於ける論理透徹明快なる和田先生の法制經濟や倫理學の御講義、人格其のものゝ表現である岡田先生の國民道德や教育の御講義、懇切丁寧反覆措かざる曾我先生の教授法御講義、國語讀本の漢字と假名遣に御得意の永瀬先生の御授業、解剖と其の圖の御上手な博學の山鳥先生、怠惰勝ちな私達も飽かず興味を以て學び「理化は實驗の科學」なる事を悟らしめ下さつた大野神谷兩先生、もう當るぞと待ち構へた石坂先生の數學、お話上手に眠氣を醒された中島先生の農業、黒板畫の岡村先生、鐵棒や木香で御情點を戴いた高宮先生、先輩として御慕ひ申した若き松本先生、息ぬぎの時間に當てゝゐた山田先生の手工、嚴格な米野先生等々の御教授は懐しい楽しい思出である。それと共に恩師の絶えざる御厚情を有難く思ふ。お仕へ申した和田先生堀先生曾我先生の御厚情は申す迄もなく、大正七年二月附屬小學校に勤めよと御勧め下さつた岡田先生を始めとし、大野山鳥神谷杉本其の他の諸先生が今尙私共に種々御厚情を賜る事に對して衷心感謝してゐる。殊に附屬小學校在勤中御多忙な岡田先生が私共訓導の爲めに特別の御講義を下さつたのには感謝の外はない。

◇私が附屬小學校にゐた頃は世界大戰後の好景氣で「百圓や二百圓の小月給取りが」など言はれた時代で經濟生活は樂ではなかつたが、其の勤務は眞に楽しいものであつた。口角泡を飛ばして教授法など激論しても翌日は互に仲よく愉快に談笑した。同窓なればこそである。

◇附屬小學校訓導に就任の當初は暫く寄宿舎に御厄介になつてゐた。よく和田先生が私共の廊下の塵を御拂ひ下さつて恐縮したものである。其の頃の舎生の生活について規律・秩序・禮儀・協同等に就いての色々感じ家庭味のある寄宿舎の美點を知り、又後日師範教育に携つた經驗から師範學校生徒は一度必ず寄宿舎生活を體驗するが

よいと思つてゐる。トーマス・アーノルドがラグビー公衆學校で寄宿舎制度を採用し、自治訓練による基督教的紳士の養成に成功したのも故ある哉と思ふ。

◇大正十年頃から財界に反動の徴は見えだが、實業界へ轉職する教員は引續き多く、加ふるに義務教育年限延長の準備もあつて、正教員を多量に養成する必要を生じ、神戸市では夙に教員養成所を設け、縣でも明石女子師範學校に高女卒業生を收容する尋正養成講習を年三回開き、或は縣下三師範學校に二部一學級を増置し、或は男女師範學校に中學校卒業生を收容する尋正養成短期講習を開き、又別に豊岡にも中學校卒業生を收容する教員養成所を設ける等諸種の方法を講じたので、大正十四年師範學校規定改正後數年間には、縣下師範學校本科一・二部専攻科の卒業生だけでも年々實に合計六百有餘の卒業生が出た。其の意味に於て堀校長御在任の頃は校運發展隆盛の時代であつた。

其の後の不景氣が漸次深刻化して就職難の時代が到來した。年々の師範學校卒業生を消化し切れない程の状態となり、他の事情と相俟つて遂に師範學校學級減、御影姫路兩師範學校合併論が唱へられ、縣會でも議決せられるに至つた。

◇今や我が母校は一箇月後には新師範學校となる。思ひ出多い學び舎・寄宿舎・私が準備研究に當てゝゐた教育研究室、其の他の準備室夫れ等師範學校として完全に近い設備も數年後にはどう變る事か。併し名は變り位置は移つても其の校風其の精神は何等かの形で永へに残るであらう。

抑々校風は學校の傳統的精神で其の學校の歴史恩師先輩等の文化遺産である。これに依つて生徒は不知不識校規

と同様の或はそれ以上の影響を受け感化を受ける。生徒の人格陶冶も校風を外にしては行ひ得られぬ。蓋し教育は環境の影響を受ける事が甚大だからである、否寧ろ教育は環境を基として行はれるからである。教育に環境整理が唱へられるのも、良き校風の樹立が學校經營の重要項目である所以も斯に存する。而して母校の如き師範學校として光輝ある歴史に基く善良な校風は容易に得らるべくもない。萬一斯る校風の消滅するが如き事あらば邦家教育界の爲めにまことに惜しむべき事である。新師範は新師範として清新な雄大な校風を樹立するであらうが、其處には我が校風の傳承せられ新味を加へて更に發展せられん事を期待する。それは決して他を排擠するものではない。あらゆる要素を加へて渾然統一ある全き理想の下に發展すべきである。

「景勝の地に生れんとする新師範學校よ、新師範學校の使命を果す爲めに我が光輝ある母校の結核を校風を永遠に留めよかし、茅渟の海の如き洋々たる希望を持ち、武庫の山の如き高き理想に向つて發展せよ」と祈り望む。

追 憶 片 々

大正九年卒業 永 井 駒 次

(津名郡石屋小學校長)

威容堂々たる母校に笈を負うて入學してから既に二十年。思へば色々草々の思出がまさしくと現はれ、轉た今昔の感に堪へぬ。大正五年寮庭の櫻と咲き誇つた四月八日、懐しい講堂で池田幸輔先生から點呼を受けながら入

學式を行はれた嬉しさ。紺の筒袖に赤色のスリツバと馴れぬ足取りで、こわく遅風呂に行つたのも今は早や幾年を経ぬる深い思出の種でしかない。

喜んで外出はするものゝ、缺禮が恐ろしいとて、電車の車掌君に鄭重なる挨拶をしたことも幾度か、ケンブリッジ型の帽子、ケリ革の靴なども當時は吾々の憧憬の中心であつた。わけても羅紗の制服に襟章を輝かし、揚々と闊歩する四年生は一種特別な階級の如き感すら持たれてゐたのである。

斯くは時日は流れて聴て亦羨望される身となつた。卒業式も真近な或夜、畑洋服店から新調の岸澤靴屋からキツトの、颯爽たる姿で新任の挨拶練習をしたのも今から思へば寧ろ滑稽である。

遂に大正九年三月廿八日「學びの道には」卒業の歌と共に、四年間慈愛の下に育まれた師の君、懐しの寄宿舎、思出の多い校舎と別れを告げてからも随分久しい。

年毎に加へて行く顔の皺や銀髪の數！ けれ共變らぬものは主觀的氣分である。唯昨今の卒業生を見るにつけて「何んと若い！」の長嘆息することは客觀的な姿を表してゐるものである。

母校を巢立つてから正に十六年、吾々の同期生は縣下各地に眞に初等教育界の中堅として健在してゐる。今之を昭和十年度末の職員録の示す所に依つても、卒業生八十七名中

中等學校	八	小學校長	八	郡部主席	三〇
市部勤務	二三	死亡	一二	其他	六

といふ數字を示してゐる。

即ちその大半が郡部での首席、市部での幹部級である。

固より教育の事は精神的薫化の作用であつて、その能率なる意味に於いては地位の上下を云爲するものではないからう。けれ共實在としての教育が一學校の經營内に於いて行はれる以上、その責任の大半は校長及首席にあると言へやう。のみならず一體教育者としての生活中、比較的圓熟と清新との二者を揚棄せるとのは實に、

「首席から校長へ」の時期である。思ふに此所に到らば吾等の責務の重且つ大なることを痛感するものである。

翻つて見よ！ 追に絢爛たる六十年の歴史と傳統とに誇る母校も今や廢校の運命に閉ざされ、實に惻々として感慨無量の外何者でもない。何を以て高大なる斯の慈恩に酬ゆ可き！ 是は須らく母校の校育精神即ち甲陽魂（説明を省く）に生きることである。是亦吾々の産みの母の懷に抱かれることであり、生命の泉に浴することである。

人生その本に歸り、普通の生命に復歸することに於いて、永遠に正しさと生氣とを保ち得るものである。

此の覺悟にあらば、形而下的母校は失ふとも、形而上的母校は常に存在するものである。

吾々の母校に酬ゆるの道は「甲陽魂」なるものを愈々育て孕くむ可きである。聴てそれは亦教育報國の實となる所以であらう。

願くは相俱に切磋琢磨せんことを！

過ぎにし昔を偲びつつ、追憶の片々。

赭き煉瓦と十和會のこと

大正十年卒業 常 深 伍
(川邊郡伊丹小學校)

私は繪を試みる。勿論其の技は拙であるが、何故かヴァミロンといふ色が好きだ。どの繪でも之を用ひないと氣持が出ない様に思はれてならない。それには繪としての理屈はあるが、然しかうした理論をぬきにして考へても、何となく懐しくて私の感情を絶えず支配してゐる色であることは事實だ。私は何時でもこの色と共に生活してゐる自分を幸福に思ひ、懐しみつゝ安堵の感に満されてゐる。

この色を塗つてゐると私は必ず母校の姿を表象する。さうして其の偉大さに憧がれ其の情調の中に自分が融け込んでよい心持になる。私は十數年の間、毎日母校の赭い煉瓦を眺め續けてきた。赭い煉瓦のもつ色は私にいろんな感情を育んで呉れた。悲しみに泣き、欣びに笑ふときにも無言の教訓を與へて呉れた。赭い煉瓦の色は決して一色ではなかつた。輝くにつれ陰るにつれ、其の色の深さを表はした。私は絶えず其の深きに感激し發奮して、貧弱な自分を今日まで育てゝきた。將來も亦この色の深遠さに自分を掘り下げずには居られぬだらう。

私の母校に對する感情の總べては、この色によつて統一されてゐると言つてよい。だからこの色を塗つてゐると、氣持がよくなり心が安定し、この色のもつ雰圍氣の中に恩師の溫容を浮べ、同窓の情誼を感得するのである。

全く赭煉瓦の色は御影師範の全體的な精神の表徴であると考へる。故にたとひ校舎といふ形骸は消滅しても、この色を腦裏に描くことさへ忘れなければ。御影精神は永遠に輝くであらうし、同窓はより結合を固くして躍進するであらう。新師範は赤塚山に建設されて御影師範の名は永久に消えても、赭煉瓦の色と精神は赤塚山の赤に通じて、其の深さと清さの誇を示さないでは置かぬだらう。私は夫れを翹望する。

兩師範の併合は縣下教育界の情勢から推して、方法的には當然であり、機宜の處置であつたと言へる。之に依つて過去の宿弊が一扫され其の機構が刷新されて、清新の氣横溢した明朗な時代が現出されるなれば洵に欣快に堪へぬ。然し現在活動してゐる兩師範出身者の母校を失つた精神的痛手はどうなるか、若しも之が斯道精進の上に反映するとすれば由々しき大事である。茲に私は將來に於て縣下教育の爲に、お互が戒心せねばならぬ多くの問題の潜在せることを直觀する。然し今説明する必要はない。唯私達は赭き煉瓦の色に依つて統一され結合された同窓の現實の姿が、更に赤塚山に其の影を映し、白堊の色に純化された清き姿となることを念願する。其處に御影精神は發揚され、同窓の情誼は永遠に變らぬものとなることを信ずる。

私達は過去に於ては母校の存續を希求した。夫れは純なる愛校心の發露からである。之が爲には出来るだけの努力もした。而も其の努力は決して無駄でなかつたと思ふ。よし其の形態は變化するとも其の精神はより高き地に止揚されて光彩を放たんとしてゐるではないか。昭和八年九月母校廢止の告示を前の奉職校附屬小學校の職員室の黒板に掲示したとき、私は一字一字を拙いながらも魂を込めて書いたが、涙は止めどもなく頬を濡らした。書き終つて涙に霞む眼で同僚と顔見合せて滂沱する涙を禁じ得ないで愛惜の情に咽び泣いた。然し今となつては

悲寥の心情よりも、新しく雄飛する御影精神の雄々しき姿を想像して希望の胸を躍らせてゐる。

御影精神よ永久に榮光あれ、赭き煉瓦の色よ、白堊の色と共に輝け。

◇

私達は大正十年の卒業生である。この時代も母校の聲譽は赭き煉瓦の色と共に全國に輝いた時である。同期生のTは甲陽のルネッサンスを叫び、學藝に運動に再度の輝きを見せた誇らしき時代である。又私達は和田校長最後の卒業生である。嚴肅にして而も慈愛に満ちた師父和田先生最後の卒業證書を握つた誇れをもつ者である。さうして先生轉任の風評を耳にして動搖した同窓は、先生より輕學妄動を誡められ、卒業の欣びも忘れて聲淚共に下る哀別に終生忘るゝ事の出来ぬ悲しみを體驗した卒業生である。今も恩師の徳を敬慕し先生の「三禁の訓」を胸に秘めて教育に勤む者達である。

私達同期のつどひは十和會と呼んでゐる。その意味は十年の卒業であり、和田先生最後の卒業生としての誇を表はしたのである。十は全きを意味し、和は和平の精神である。而して十和は永久に通ず、私達は御影精神の顯現者として永久に和の精神を以て結合せんことを誓つてゐる。

この意味から六十年の歴史に榮えた母校御影師範の最後の頁に、我が十和會の者達の在學中の生活の思ひ出を繰り展げて二・三記録することを許されたい。

我が同期生は一般に無邪氣であつた。それ故恩師には随分御迷惑をおかけしたこと、思ふ。教練の歩調に三拍子といふ亂調子を創作したり、手工の時間に先生を材料室に押し込め、或は雨天體操場の周圍をぐる／＼と旋回

運動をやつて得意がたつた。六甲山の植物採集には先生が出席簿を持參されてゐないことを看破し、途中で失敬して休養部で悠々遊んだ迄はよかつたが、後でW先生が例の頭腦明晰で出席をとられたと聞いてペンをかいた者も相當にあつたといふ。

然し一方學究方面や運動方面には頗る熱心であつた。英語會・凌踏會・博物會・國語會・音樂會等が次々に創設され、夫々恩師の御懇篤な御指導を仰いだ。凌踏會はマーク入の金剛杖や手拭まで作製して金剛山、多田神社・太山寺へと史蹟の探究と地理的景觀等の研究に餘念がなかつた。國語會は毎回プリントで土佐日記・大鏡等の講義をM先生から熱心に聞いた。

特筆すべきは運動部の活躍である。先づ第一に擧げねばならぬのは、啓發旗競走が復活して義勇旗競走になつた際最初の榮譽を得たことだ。會家部長が捧持する 賀陽宮殿下御下賜の義勇旗を拜した時の感激は今も忘れられぬ。濱寺に於ける大毎主催の全國庭球大會には山口・松村兩君の名コンビに依つて母校第二回目の優勝をした。兩君は一年間に確か七本の優勝旗を獲得したと記憶してゐる。武道部も優勝した。之は母校武道史に大書すべき事項で、今なれば珍しくないが、柔道・劍道が共に優勝したことは嚆矢と聞く、殊に劍道は二回も榮譽を得た。其他各部の活躍は目覺しい限りで蹴球・角力等々傳統的に其の偉力を發揮して全國を風靡した。

思ひ出すだに限りなく懐しく嬉しいのは寄宿舎生活の追憶である。何と言つても母校に於ける最も尊い體驗を得たのはこの生活である。自治的組織による甲陽村の生活は、私達に人間としての修養上どれだけ多くの尊いものを與へて呉れたか知れぬ。寮長を中心に室生・寮生が互に睦み合ひ、家庭的な和合の裡にすく／＼と成長し、

以て社會性は遺憾なく培はれた。喇叭による規律ある生活も未だに私達の生活を支配してゐる。

寄宿舎生活は青春の血に燃える若人の生活場なれば、異變も亦多かつた。寮雨？を降らすこと、食堂隅のすき焼・ホイッスルによる呼出しと使役・夜警のタコ・寮庭の蜜柑・等果しもなくあるが何れも懐しい思ひ出である。

何時思ひ出しても慄然とし且残念に思ふことは私達の住家・東寮二が過失から全焼したことである。この事は五十周年記念誌に梅田君が詳細に報道してゐるので略するが、大部分の者は尻の破れた洋服と一冊の修身書のみとなつたのである。中には丁寧に教科書まで持ち込んで焼いてしまつた周章者もある。學期末の試験はお蔭で延期になつたが、其の喜びも束の間、新學期早々やられて面喰つた。其の結果カンニングが流行して、カンニング優等生が出来たと言ふので風紀週番に食堂に集められて叱られたといふ笑へない挿話もある。焼き出された寮生は一時高宮寮と四年生の寮に收容され、後濃厚な者？は選ばれて一年生の室長となつた。この時の室長さんは随分威張つたもので他の同僚から羨しがられたものだ。當時のことを憶ふと懐しくて堪らぬ。

◇

母校最後の記念誌に執筆するの光榮に感激しつゝ思ひ出す儘に記して行つたが、餘りに書く事の多きに惑ひ、唯事實を説明的に叙述するの程度に終つた。書き残りも多く行文も粗雑で洵に申譯がないが赦されたい。

最後に繕き煉瓦の色を限りなく懐しみ、この色の中に蘊釀する精神が赤塚山に反響することを冀ひつゝ、恩師の御健祥と同窓諸兄の御奮闘を祈つて筆を擱く。

牛の歩みの遅々として

大正十一年三月卒業

岩 崎 圭 司

(朝來郡山口小學校長)

既に十年一昔を過ぎること四年になる。何時の間にかこんな年月を過してしまつた。回顧すると、それは獨り學校の轉變だけではない。世態も變つた。人情も違つた。大きく言へば世界の大勢が變つた。阪神國道が出来て、住宅が増えて、寄宿舎の一部が削られて、と言ふのでは無く、世の中すべてが昔のまゝでなくなつたのである。

私等が入學した年、大正七年の春と言へば、好景氣の絶頂である。米の値が五十圓からしてゐたやうに思ふ。先生は確か初任給が十八圓といふ經濟的受難時代である。こんな時、このみぢめな先生を志した吾々こそ、本當の教育者でなければ、世の落伍者か、馬鹿者か、兎も角百六名募集に、志願した者百四十名。郡役所で豫備試験を受けて(當時六ヶ月の准教員講習あり。年二回、この講習終了者は豫備試験無し。師範入學志望者の大部分は、この講習に入つてゐた。)合格の通知の有つた者だけ、本試験を受けに師範學校に行くのである。かうして發表せられた合格者が七十名。結局所定の百六名は採れなかつた。かくて再募集が行はれたが、その結果も合格者で定員を充すことが出来ず、前後二回の合格者合せて九十六名これを三學級に分つて別に二部一學級と四個學級が編制せられた。實業學校が志望者が十倍以上もある時代である。まこと一般社會狀勢と懸離れた人間達ばかりが集つたと言へよう。今日師範志望者が十倍にもあまる時代と、正反對である。さりとて卒業の蟹は、初任給五十圓

になり、世は追々月給取萬能時代が現出することなど、豫想する程の賢明さが有つた譯でも無い。

上級生が恐ろしい二年間の寄宿舎生活の中にも、一つ竈の飯を食つて生きる團體生活の樂しみに、我彼もつかぬ日が過ぎた。和田校長先生の魏々として聳える巖様な威容と、細心土壤の底の底まで、一粒の砂の間隙にも、浸潤せざれば止まぬ岡田先生の慈恩との中に育まれて、生れた子は親には似もつかぬ不肖の輩であるかも知れないけれ共、それにしても私等の第一の誇りは、三年間の短年月とは言へ、和田校長先生の最後の薰陶を受け得たことであつた。四年生になつた春、堀校長先生を迎へて、私共最初の寮生として、先生の教育信念に燃えてやまぬ熱誠下に、やがて教育界に巢立つべき一ケ年を送つたのであつた。思ひ出は果しなく、善惡正否の別もなく、すべて意氣にまかせて自ら自己を儉することを知らず、青年の無軌道に進みに進んだ生活が思ひ出される。今それら、捨て石にも似た一つ一つの追憶を拾つて行くことの煩に堪へないが、懐しく心に點滅する姿を一貫するものは、ひたすら積極的に、新しい生活へ、日に新に、日々に新に、若き日の憧憬へと、勇敢に突進んだことである。左顧右眄、自ら己れを卑屈し、世の見榮と、人のおもはくに、假裝紳士となり、姑息な腑甲斐ない生命の持續に、汲々とする生活を強ひられる教育者の生涯に、短くとも意氣と希望に馬車馬の如く、前進前進の一路を辿り得たことは、何と言つても、貴くも幸せな時代であつた。

世界戦亂の後を承けて、世は好景氣の亂舞に吾を忘れ、思想界は黎明を眼ざして混亂を極め、書籍店頭には堆高く積まれた思想雜誌・文藝雜誌が、羽を生やしてまたく間に賣れて行つた。赤い煉瓦の學窓から、針の穴から天親く氣持で見やる社會の姿は、羨望そのものであり勃々たる雄心を燃焼させずには置かなかつた。店頭の小僧

は未來の富豪を夢見 中等商業學校の生徒は、華やかに實社會に羽ばたく日の近いのを待ち望んだのに負けず、教育者の卵は、同じ雄心を抱かずに居られなかつた。教員生活の意氣地無さ等、決して想像もしなかつた。今にして思へば、昨日紅顔の美少年の嘆、なきにしも非ずであることが、少々寂寥の感を與へないことも無い。

正直の所、學校の授業には、特別殊勝な人々を除いて、あまり身が入らなかつた。さうしてあらゆる課外の研究部門に、元氣のはけ口を見出してゐると言つた状態であつた。運動方面は遺憾ながら、私自身直接深い關係を持たなかつたので詳述することが出来ない。又おぼろげな記憶を辿ることの却つて誤の有らうことを恐れて、記述を遠慮する。

最も早くから出來てゐた課外講座は、山鳥先生の深い學識の分與を希ふ者の集り博物會だつたと思ふ。これは先輩諸君の遺産で、同好の者は既に一二年生頃から入會して、上級生の中に交つて研究してゐた。私等の卒業後も繼續せられた。この會が歴史も古く、又各學年を通じ、しかも長く後途續いた。今日も繼續してゐるのではなにかと思ふ。その外は大抵私共の學年がその會員の全部を占めて、間々少數の長るべき後生を含んでゐた。以下順序も無く思ひつくまゝに記述して行くでしょう。

岡田先生に「善の研究」の講義を受ける集りがあつた。(今の木曜例會の前身となつたやうに思ふ)東寮一の十四室で、夕食後極めて懇談的にお話を聞いたのであつた。次に晚成會、堀校長先生を煩はして將來高文位を目標に、大器晩成を標語として法律の研究をした。同じく堀校長先生に社會問題の講義を受ける者、何れも晝の休を利用して一週一回乃至二回、高師入學志望者が脇屋先生を煩はして英語會、山本先生を頼んで數學會を組織し、

着實熱心な勉強をするし、歴史同好者が歴史會を作り、三幣先生の講義を受ける。山下先生を煩はして源氏物語の講義を聴く一組、其他相互好相寄る音楽、圖畫、體操の研究團體等枚擧に遑がない。先生方も一寸忙殺せられはしなかつたかと思ふ。

大抵一人が一つ二つに加入してゐた。何かをせねば居られぬ進歩的氣風に煽られてであると言つてよからう。その外毛色の變つた方面では基督教會に信仰を求め一團、文藝同人雜誌に活躍する者、世はあげて成金の時代であり、新思想家の横行活躍の時代である。新進作家が雨後の筍の如く、踵を接して輩出した時代でもあつた。學校にも亦それ／＼一方の權威者がその旗幟を鮮明にして吾こそはと名乗りをあげたのであつた。かくてあまりにも華かなりし若人の氣氣を謳歌した感激の生活であつたことに想到して、轉た懷古と羨慕の情を禁ずることは出来ない、會て五十周年記念誌が編纂せられた時、同じ様な事を書いた私が、今又再この委囑に依つてあまりに自己の世界からみた在學生活に偏した事象を再び物すことは全般に通ぜぬそしりを受けるべきことを憂へるものである、それにしてもかくして甲陽村を巢立つて今や十四年、さながらの一夢である、今母校に當年の恩師を數へて五指を屈し得ず、當時豊かな希望に燃え、光明を夢みた青年も各地に分散して、年を加へ、齡今や三十有五にあまる、母校は六十周年を閲して統一兵庫縣師範の誕生の曉に立たんとしてゐる、まこと世の轉變流動は獨り人の身の上のみかは、靜かに本稿を草して感慨無量、往年の意氣は挫けざれど、牛の歩みの遅々として爲すあるべきことの成らざる多きの感が深い。世は風波高しとはあらねども、小心翼翼、ひたすら過誤なからん事のみ心奪はれ、大過なくして過し得た年月を感謝する心の奥底に進むべくして進まざりし誰からも責められること

のない誤りを悔ゆる心は無いであらうか。新師範の統一と共に新しい生命の躍動を希求する心や切なるものがある。

母校精神に還れ

大正十二年卒業生

大 富 一 五 郎

(加東郡瀧野尋常高等小學校長)

一二會の存在

お目出度いことである。何となれば私共四千の兄弟を生んでくれた母校の還暦祝ひですもの。赤い煉瓦の校舎や運動場の樟の大木は、勿論吾々の日常生活の斷面に隣く幻影ではあるが、それより以上に吾々の生活意識の無形の中に基礎づけるものは、澎湃として胸中に流れてゐる御影魂、甲陽精神ではなからうか。母校六十周年の式典にあたり、母校精神の分身としての四千の卒業生が、各の個性に投ぜられた心絲をたぐり寄せて、お互が宗家の本源的精神に還ることによつて、各々の心底に潜在する母校精神を呼びますとき、勃然として生活意識をして生氣あらしめ、純化せしめ、旺盛ならしめるのではなからうか。かくて個は衆に擴がり、衆は團を結んで所謂牢固として動かすべからざる雄渾な力となるものを信ずるのである。

かゝる意味に於て、我が一二會の存在は至つて健康である。去る昭和九年、卒業滿十周年記念大會を神戸魚庄

樓に擧げ、恩師岡田翁に捧げた大杯の流れを汲んで一同が誓約決議した所である。明朗と純眞を誇とする我が一。二會は顯然として同窓の一角を支へてゐる所である。兄等安恕たれ、弟等浩然たれと申したい。

抑々一。二會の名稱の出所は？ 曰く大正十二年三月の卒業、そこで入學は大正八年の四月、大正八年と言へば人も知る如く、あの世界を震撼せしめた歐洲大戰終局の歳、二十億といふ正金が流れ込んで人は皆財貨の夢に酔うた秋である。馬鹿臭い五十圓の月給取なんか誰が成るものぞといった調子、随つて師範入學希望者は激減し、定員一〇五名の募集に對して僅か百六十餘名の應募、そこで學校當局は嚴然たる詮衡の上、六五名を許可し、更に再募集によつて、三十五名の充當を行つたのである。かういふと、人或は「何だ、再募集組か」と、輕視するかも知れないが、それは所謂認識不足といふもの。何となればそれは商品の量的多寡に着目して、質的價値を忘失するものであるから。重貨利澤に背いて自ら教育者たるを任じて校門を潜つた吾等こそ、眞に本質的な存在でなければならぬ。明朗にして純眞なる一。二會の存在こそ疑ふ可からざる御師の勢力である。

私は敢てこの證左として多くを物語らぬが、その博聞深識の諸兄が、吾々の在校時代に示した運動部の行績、學術部の活躍、さては卒業後の足跳によつて御賢察願ひたい。暴言陳謝。

なつかしい先生方の追憶

私達が母校で教をうけた先生方は、なか／＼たくさんあるので、一々この紙面に追憶の筆をとることは出来ませんが、同期卒業の誰もが異口同音に追想と讃辭を惜しまないのは、何と言つても岡田五鬼大人である。私人のこ

とを筆にすると失禮だが、私は誠に幸福者で附屬小學校在動中、先生のお宅の附近に居住を構へてゐたので、朝夕その恩顔に接し聲咳に觸れる機會が常であつたが、先生は今年、七十歳を迎へさせられて益々御躰で、同窓四千の身の上をいつも心からお察し下さつて居り、「Y君はその後何も言つて來ぬが、どうしてゐるでせう。」「T君は奥様に死別して孤兒を抱いてゐるが、ほんとに氣の毒です。」と言つた調子で、卒業の新舊を問はず、事柄の大小を論ぜず、人の如何に拘らず、凡そ卒業生にして先生の御心像から忘沒されてゐるものは皆無と言つても過言ではないことを熟知して、私はほんとに濟まないといふ氣持に襲はれ、同時に勿體なく思ふのである。先生の日常の御生活振なり、お心持は多少解る様な氣もするが、到底私の稚筆の盡くす所でなく、又卒業生諸兄のあまりにも熟知される先生の事であるから、こゝで擱筆することにする。

私達は、勿論、先生方の嗜好を言つたり、批評がましいことを言ふのではないが、私達の在學時代幸福だつたと思ふことの一つは數學の先生がお揃ひの事であつた。

私達は一二年の幾何を西村恒雄先生（現靜岡縣掛川高女校長）に、三四年の代數幾何を山本政治先生（現東京高師附屬中學教諭）に、途中から藤田新三郎先生（現大阪浪速高校教授）に教へていたといつたが、何の先生も頭腦明晰（失禮な表現であるが）親切適確な御教授振りだつた。

しかし、山本先生の「だらう式教授」には尻尾を卷いたものだつた。

「AとBとの和はCに等しいだらう」

「CとDは等しいだらう」

「故に、AとBとの和はDに等しいだらう。……〇〇、説明して見よ。」
實に滯みもなく行届いた説明だったが、眼鏡越しにこの「だらう式」で、にらまされると、數學の不得手の連中はよく参つてしまつたものだつた。

最も新しみ易かつた先生と言ふと、今は故人となられし國漢の松井龜藏先生、農業の中島先生だつた。お人のよい？ 松井先生は唇をチユウ／＼言はせながら、よくヤンチャ連中の駄々を聴いて、社會實踐學を滔々と述べられたものだつたし、中島先生は誠にお話の姿態が御上手で、薯蕷汁とろろ汁の語にでもなると、よく涎を垂らさんばかりに生徒を汲引されたものだつた。

其の外、御熱心で無口な山下賤夫先生、榎本賞平先生、早口で冗談を眞面目な顔で話される山鳥吉五郎先生、庭球のお得意な神谷怡之吉先生、さては圖書の宿題を忘れると、コツ／＼と頭つ／＼かれる岡村道三先生、稚氣満々の山田春耕先生、……記憶の糸を手繰るとなつかしい思出ばかり、あゝ若き日よ、純なる生活の残香よ。

ずぼらしたが秩序のあつた寄宿舎生徒

何と言つても今から考へると、寄宿舎生活はなつかしい思出の一つである。土曜日の安樂日など、三々五々の氣の合つた連中が一室に集り、未來の校長論を戦はしたり、郷在自慢に花を咲かせたりしたものだつた。若い中は寝る事と食ふ事が楽しみといふ奴で、高年床の連中もあつたし、夜更けてから炊事征伐に出かけてそれが寮長さんに知れてお目玉を喰つた連中もあつたし、かくいふ我輩も油を絞られたことがある。内容は大抵賢明なる諸

兄の經驗されたことであらうから、まあこゝに曝露することを遠慮するが、かゝる種類の惡戯は若氣の至とこゝにお詫び申す次第です。

かういふこと、寄宿舎生活はズボラ萬歳かとも思はれるが、決してさう許りではなかつた。朝の挨拶は「お早う」と、皆キチンとやとし、袴をつけなければ寮外に出なかつた者もあるし、風呂に行くのも上級生からといふ秩序があつたし、炊事場からの飯運びも規律があつたし、校外で上級生に出逢ふと、必ず下級生から敬禮をするといつた調子でなか／＼厳格な部面もあつた。殊に風紀週番の勤務は上級生の自治的任務として立派に遣通したものだつた。その當時、まだ少々たこもあつたが、寄宿舎生活は敢然として自治的氣風を失はなかつたことが今でも一種の誇のやうに思はれる。

急に大人になる教生々活

教生生活は師範時代憧憬的、それだけに教生時代の出來事は若人連の話題の中心を占める。愈々抽籤で附屬校行の學期が決まると、次はどの學級に配當されるといふことが問題になるのは、今も昔も變りのないこと、思はれる。そこで、訓導の下馬評が始まる、ビーヤンの話がはづむといつた調子、今から考へると馬鹿臭いことではあるが、人世に苦のない單純の生活者にとつては、蓋し生活上の大問題であつたに違ひない。

私等が教生に行つたのは、大正十一年度の第二期であつたが、當時教育界は自由教育思想の全盛時代で、篤學の士には、鯉坂さんの自由教育論や、八大教育思潮が愛讀されたものだつた。當時、附屬小學校は曾我先生の御

經營で、麾下訓導には一騎當千の士が隠然として控へてゐたので、教生の批評會の席上で訓導同志が意見交換、談論風發といつた工合で、なか／＼活氣があり面白かつた。

愈々歳が更つて、二月の行事甲山競走が終ると、岡本の梅がチラホラ咲きそめる、岩井さんの花壇にも春の花が装をこらす、かういふ時になると、卒業間際の四年生はサージの服にキツトの靴といふ瀟洒な姿で、三々五々日曜日の散策に附屬時代の語草や、寄宿舎生活の思出を載せて行くのであつた。

(附記)

書きたいことは山積してゐる、しかし紙數には限りがある、そこで五十周年記念誌を繕いて、先輩のあまり觸れてゐない點を書くことにした、一二會の諸兄には代筆の行届かないのを許していただきたい。

口なつかしき

大正十五年卒業

上

野

正

雄

(御影師範附屬小學校)

「十年一昔」の文字通り、魂の故里を巢立つてから丁度十年、ありし日の追憶を辿るに「昔」といふ語を冠することの許された今日、なつかしの故里思慕の情と愛着を一層煽り立てられる。

准教員養成講習會

當時、小學校高等科を卒へた者は、年齢の關係上師範一部一學年の入學不可能といふ制度だつた。入學までの一年間を無駄にせないやうに、私は母校に併置された准教員養成講習會に臨んだ。一ケ年を二分して前期後期に分れ、各期共五十人許りを收容し、其の中成績良好なるものには總額六拾圓也を給與された。講習生は大概御影町上西の柴村に下宿して、和服に袴といふ服装で通學したものだつた。當時の先生の記憶を辿るに、「より育ち」からお説き下さつた教育學の曾我先生、「鎌倉時代の美術工藝に就いて述べよ」との學力檢定問題を出された歴史の脇屋先生、博物考査で最高點を頂戴して印象深いのが山田英一先生、「〇〇君は頭がえい」を連發された物理の神谷先生、快談を交へ抱腹絶倒とまでは行かなくとも少くともそれに近い御授業をなさつた國語の松井先生等の印象が残つてゐる。こゝで共に學びし同輩の姓名までが、意識の埒外に放棄されやうとする昨今、「昔を今になすよしがな」の心境がなつかしく思ふ。

寄宿舎生活恐怖時代

入學を許されて寄宿舎に案内されて、そして父と別れた次の日から、しばらく恐怖の日が続いた。それは上級の各運動部長が部員を勧誘したことである。剣道をやれ、蹴球をやれ等々、其の答辯に二枚舌を使ふものならこつびどく追究される。「蹴球はやりません。」等と言はうものなら、勧誘者は「我部を侮辱するな。」といつてどなりつけられる。自己の意志を十分主張する氣にはなれず、随分おづ／＼したものだつた。

更にもう一つの恐怖は、應援歌練習である。始業前、晝食後には道場附近に集つて、上級生監督の許に應援歌

の練習が始まる。太い聲を張り上げて何遍も歌はせられる。歌つてゐる我々の間を或は周囲を縫ふやうにして上級生が口の開け方を検閲して廻る。之が悪ければ直ぐ列外に引張り出された。経験はないものゝ時々發する上級生の「コリヤ」の大声叱呼にはよく肝をぬかれた。此の應援歌練習も無理ならぬことで、聽て來る神戸又新日報社主催の須磨の角力大會、端艇大會、さては蹴球・柔道・劍道等の各部選手を勢づけるための止むを得ぬ練習だつたのである。

英語成績の良否による組分其他

三年生の時、入學以來の組分を變更して英語成績の良否によつて甲乙丙の三組に一旦組分された。勿論我々三年生だけがからなつたやうであるが、其の事の次第は師範生をして現在並びに將來共、學力の向上を企圖するには、英語の實力を養ふにあるといふ意圖からこの組分が試みられたと聞いてゐる。博物擔任の高瀬先生が其の強張者であるとかいふことを耳にしたが、扱てあなたが主唱者であつたかは未だ定かではない。この編制法は或る組からの反對もあり、形勢の穩かならざる傾もあつたのか、次の學期には元通りの編制に再び改められた。

中等學校にも研究教授があつたと見えて、其の當時手島先生の物理研究教授が行はれたことを記憶する。なんせ顔の色の白くない穩かなよい先生で、「重心」の所を習ふので私も前以て森總之助氏の物理學講義書を下調べした。先生も生徒も若干參觀人のためのぼせ上つたのか、先づ／＼の勉強振りだつたやうに思ふ。或は之が當時は上出来だつたのかも知れない。

教へを享けた先生の聯想の糸は繰れば繰る程長いがこれ位に止めて置かう。

學校配屬將校着任の最初

大正十四年四月岡田文部大臣の訓令を俟つて、中等學校以上學校に配屬將校の赴任があつた。本校では高木少佐殿が着任された。でぶつと太つて鬚の濃い、眼光の鋭い意志的な方だつた。手工室の北側に集つた初めての教練に於て、殊にこの怖い少佐殿に面接して陸軍武官の威壓を受けた。遅刻したり、釦やホックをかけてゐなかつたらどんなに斷壓を蒙るかも測り知れず、文字通り緊張したものだつた。就中岡本梅林への駈歩行軍は、何と言つても苦痛と恐怖を追憶せずにはゐられない。春を待ち梅の蕾をちらつと目には見たものゝ、鑑賞する心の餘裕は更になく銃を擔いで走り続けた。この時誰か前の者との距離を規定以上に開けてゐて、少佐殿に後から首元を思ひさま突かれて前に倒れたことを記憶する。扱てこれが誰君だつたとなると記憶は更にない。規律の嚴正だつた當時が察しられる。

寄宿舎生活の感謝

二年生の時から南寮二（現在東寮二）の寮長城内先生に御世話になつた。地理擔任で、月の玲瓏と輝く満月の晩に共に月を賞で、天文に對する興味をそゝつたことがあつた。「どうあるかの。」の先生の常用語は、時々布團の中にくるまる生徒の上に落ちる。寮生は口癖にでも「どうあるかの。」を連發したのも、先生の慈愛を語るも

のでなくして何であらう。

五年になつて其の前半は岡田先生、後半は堀校長先生の寮に御厄介になつた。「我々の掃除することになつてゐる蜜柑の木の下を岡田先生が早朝から掃除して下さつたぞ」「岡田先生が寮の喫場を掃除してゐられたぞ」などの寮生の聲が時折聞える。實に濟まないことをしたものだ。之に對して、「我等が如何になすべきか」さへ考へなかつた昔を追憶すると身の縮む思ひがする。今にして思へば只慙愧あるのみ。堀校長先生の寮に入つてからも岡田先生と何等變りなく、眞に愛の懷に抱かれたものだつた。先生の御多忙中にもかゝらず、度々役宅に參じて御迷惑をおかけした。食堂に集つて堀先生より御懇篤なる御訓辭を頂戴したこともある。思ひ起せば凡べてが感謝の種とならぬものは無い。今にして昔を顧ふ時、其の當時がどれだけ幸福であつたかわからない。

結 び

十年の昔、共に春を歌ひしなつかしの同期同窓の方々の動靜も随分變つて來た。一々備忘に資する紙片の餘裕もない。「去る者は日々に疎し。」の世間常用語は我々に適用すべくも無く、今後益々親交を加へて行きたい。母校の赤塚山移轉が目捷に逼つた此の頃、附屬の幼な兒でさへ、話に、綴方に母校の將來を案じて呉れる。まして我々の永遠の魂を育くまれ、愛の泉の滾々と湧き出す此の地御影の學舎に對する各人の想ひは皆一樣ならん。同期同窓諸兄の發展を祈念しつゝ筆を擱く。

十 年 一 昔

昭和二年卒業

飛

松

實

(神戸市諏訪山小學校)

本年は母校創立六十周年記念に當るから何か書けとの注文をうけて驚いた。僕の卒業した年は確か五十周年であつた筈だから早や十年の星霜が流れてしまつたのだ。燃ゆる意氣と絶大の期待とをもつて校門を出てから既に十年に垂んとする歲月を何等なすなくこの諏訪山小學校に迎へ送つたのかと思ふと心中一抹の哀愁を感じざるを得ない。十年一昔といふ。しかし僕には甲陽村生活四ヶ年の思出は尙昨日の如く生々しい。現に一年生の時、下駄箱に入れてあつたスリッパがなくなつてこまつたことや、明日は英語や代數の試験だといふに皆目復習ができてゐないのでどうしたものかと悶え苦しんでゐたことなど二月に一度か三月に一度必ず夢みるのである。この他潜在意識として僕の腦裏に刻みこまれてゐるらしい諸種の思出は時折さうした夢となつてあらはれひとり苦笑さされてゐる。

僕等の入學後一二年してから師範學校令の改正があつた。即ち四年制度から現在の五年制度へかはつたのだ。それで一年生から三年生へだつたか、二年生から四年生へだつたか、とにかく三月末の休暇がすんで歸校して見ると學年が二つも進んでゐて驚いたことを覚えてゐる。つまり僕等は卒業の時は五年生であつたが實際は四ヶ年しか學んでゐないわけなのだ。

阪神國道が新しく通するため寄宿舎二棟の移轉が餘儀なくされ、西寮一二が今の場所へ移つたのも當時のことであつた。寄宿舎がうつるまでは農園であつたあの場所に無花果が澤山あつて上級生がくつてゐたことなどろろ覺えに覺えてゐる。それがいよゝゝ寄宿舎移轉と決定するとそれも取りはらはれ地ならしがはじまり出したのでどうしてあの大きな二階建の寄宿舎を運ぶのかと氣になつて仕方がなかつたところ、コロを用ゐてのろゝと動かし出したのには驚きもし感心もしたものだつた。

専攻科が設置されて頭髮の大分うすくなつた先輩たちまでが背廣服の上に帯剣して教練したりしてゐたのを妙なものに思ひつつも感心しながら見てゐたのも思出の一つだ。

四年生から五年生へかけては運動の方をなまけると共に大分あの常夜燈と仲よしになつてゐた。高師へゆくといふじ君等と共にあまり明るくもない燈火の下で外套を頭からかぶつて古事記や枕草紙に読みふけつたり、或は萬葉集をかたへに作歌に熱中したりしたことなど甲陽村生活の思出の中でも特になつかしいもの一つだ。

とにかく夢の多い少青年時代の四ヶ年を、堀、岡田、脇屋其他諸先の膝下にあつて日日薰陶を忝うしたことは恐らく僕の一生を支配する大きな力となつてゐることであらう。在學時代御迷惑ばかりかけてゐた一人であるが改めてこの機會にこれら諸先生に心からなる感謝の意を表し併せて御健康をお祈りする次第である。

六十周年といへば人生の還曆に當る。即ち功成り名遂げて靜かに老を樂しむべきであるが、我が御影師範は更に赤塚山の新校舎によつて更生し清新の意義を以て縣下教育界の陣頭に立つこととなつた僕等も亦鈍才に鞭うたねばならぬと思ふことしきりである。(昭和一一・一・二九)

隨感錄から

昭和三年卒業 吉 田 五 衛

(多可郡西脇小學校)

讀書に疲れた眼を窓外にうつして庭の石燈籠をぼんやり見る春雨にうるほつた若の色が眼をさましてくれる。

自分は今一體何をしてゐるのか又何をやらうとして居るのか、小さい心はあれもこれもと慾張るだけで何一つ自分のものらしくなつたものはない。

觸發されるまゝに右顧左眄何の意味もない何の價値もないけれどもじつとしておれない衝動に驅られる。

誰彼はあゝもして居るこうもして居る俺だつてぼんやりしておれない。こんな學説があるんだ、これが新思潮だ、何でも流行時代だ、生命の長いものがどこにある、けれども知らないではおくれをとる世の中、結局うはつたらだけでも喫いで見なけりや承知が出来ん。

これで一生を終らされたら臺なしだ、もつと深めなくちや、やつぱり一つをやつてじつと辛抱して浮氣もせず八

方ならみの線の太い奴がしてをとる、多情多恨はあれもこれもと慾張るだけで奔命にたふれる位が關の山。

人間ぼんやりしておれば其の日暮しで終る時に気がついていらくする、もういつまでもさまよつて居る年ぢやない、落着くところに落着いてみつちりやつてみたい。

苔が緑にもえてゐる、新鮮な空気をすつてゐるところに新鮮さがある目がさめりや夢ぢやない、時は人を待たぬ、悔を残すことだけはしたくない。(昭和一一、四、二記)

母校よさよなら

橋に點綴された我等の甲陽村!!過去十年の懐しの夢を顧みてそこはかとなき人生の波にゆられて來た者にとつて懐古の情切なるものがある。赤い煉瓦の校舎に夕日が赤く映る頃田舎雀の我一人を残して歸つて行つた父の面影を見送つて哀別離苦を今更の様に體驗させられたのであつた。夕暗深くとざす頃ともなれば運動の勧誘に小さい心は戦きふるへ部屋角の小さくなつて頼る身のない淋しさに何でこんな恐しい處にやつて來たのかしらと不安にもなつて來る。然しこんな中にも故郷の父母からや友からの便りに力づけられ慰められもしつゝ日を重ね月を重ね年を重ねて上級生の誇を感じる頃ともなると我等の村が言ひしれぬ楽しいものに變つて來て麗しい六甲の連山に眺め入る餘裕をさへ感じて來るのであつた。そして何時かしら見えぬ魂にがつしりとスクラムを組んで

るんだなといふ様なことを心に感じて來た頃には甲陽村に育つた事に無上の幸福と誇らしさを認識したのであつた。けれどもこの魂がどんなにくり擴げられどんなに大きな抱擁力をもつて居るかと言ふことは寧ろ卒業後に深く感ぜさせられた。

幾多の先輩に接し同期の諸君に會つた時そこに魂と魂との反映をはつきり知ることが出來たのであつた。爾來十年の歳月を開してお互に變つた。母校の名も今や消えんとして居る六十周年の盛典に列してかつては豫期もしなかつた事實が現實となつて我等の目前にくりひろげられんとして居る時轉た感無量寂寞の情禁じ得ざるものがある。けれども我等同志の意氣は衰へない。母校の最後に接して魂は一段の躍動をしたのだ。先輩は後輩を捨てるな後輩は先輩を賣るな。縦に横にがつしりと櫓を組んで母校の歴史をしつかとふまへこの意氣この精神を赤塚の山に永久に残すこそ我等に課せられた最も大きな宿題であり母校に對する最も意義ある餞である。

夕陽に沈まんとする母校を見る時一沫の淋しさを感じるが今や我等は更に新しい意氣にもえてゐることに思ひを致さねばならないとして母校の一木一石にも心からのさよならを告げやう。

追憶を辿りて

昭和四年卒業

井

上

最

喜

(神戸市二葉小學校)

同窓四千に垂んとし幾多の歴史と名譽あり名實共に天下の御影師範學校が、創立六十周年を迎へこの還暦の祝